



第
409
集

青森県埋蔵文化財調査報告書 第409集

川原平(1)・(4)遺跡 大川添(2)遺跡 水上遺跡

— 津軽ダム建設事業に伴う遺跡発掘調査報告 —

川原平(1)・(4)遺跡・大川添(2)遺跡・水上遺跡

二〇〇六・三

青森県教育委員会

2006年3月

青森県教育委員会

川原平(1)・(4)遺跡 大川添(2)遺跡 水上遺跡

— 津軽ダム建設事業に伴う遺跡発掘調査報告 —

2006年3月

青森県教育委員会



川原平・砂子瀬全景 (『津軽ダム西目屋地域生活文化調査報告書』より写真転載)

序

世界自然遺産である白神山地への玄関口としての西目屋村には、数多くの登録遺跡があり、太古からブナの森とともに人々が生活していたと思われま

す。当センターでは、津軽ダム建設事業に伴い平成15年度に川原平地区及び大川添地区、平成16年度には水上遺跡の発掘調査を行いました。

本報告書は、これらの調査結果をまとめたものです。

今回の調査によって、川原平地区では縄文時代後期から晩期にかけての遺物が多量に出土したことからさらに調査が必要になりました。

また、水上遺跡では、縄文時代の集落跡とそれに伴う階段状の道路跡などが発見されるなど、豊かな自然と厳しい環境の中で人々が生活を営んでいたことを知る手がかりとなりました。

この調査報告書が今後、青森県の文化財の保護と研究に役立つことができれば幸いに存じます。

最後に、発掘調査の実施及び報告書の作成にあたり、ご指導、ご協力いただきました多くの方々に対しまして深く感謝申し上げます。

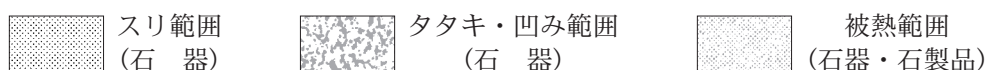
平成18年3月

青森県埋蔵文化財調査センター

所長 白鳥隆昭

例 言

- 1 本報告書は、青森県埋蔵文化財調査センターが津軽ダム建設事業に伴い、平成15年度に調査した青森県中津軽郡西目屋村川原平(1)・(4)遺跡及び大川添(2)遺跡、平成16年度に調査した水上遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本報告書は、青森県埋蔵文化財調査センターが編集し、青森県教育委員会が作成した。なお、執筆者名は依頼原稿については文頭に、その他は必要に応じて文末に付した。
- 3 挿図の縮尺は、各図ごとにスケールを付してある。なお、遺物写真の縮尺は統一していない。
- 4 土層等の色調観察には農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖（小山正忠・竹原秀雄 1996）』を使用した。
- 5 出土遺物の石質の鑑定は青森県立八戸中央高等学校教諭の佐々木辰雄氏に依頼した。
- 6 本書に掲載した地図は、国土地理院発行の2万5千分の1の地形図を複製したものである。
- 7 図中で用いたスクリーントーンは、以下のとおりである。



- 8 引用・参考文献については巻末に収めた。文中に引用した文献名については著者名と西暦年で示した。
- 9 発掘調査における出土遺物・実測図・写真等は現在青森県埋蔵文化財調査センターで保管している。
- 10 発掘調査及び本報告書作成にあたり、次の機関並びに諸氏からご教示、ご指導を受けた。

(アイウエオ順、敬称略)

青森県立郷土館

秋田県埋蔵文化財センター

秋田県立博物館

西目屋村教育委員会

相原 淳一（宮城県教育庁文化財保護課）

阿部 明義（財団法人北海道埋蔵文化財センター）

板垣 雅道（能代河川国道事務所）

稲野 祐介（北上市立埋蔵文化財センター）

長田 友也（名古屋大学大学院 文学研究科）

金子 昭彦・八木 勝枝（財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター）

小林 圭一（山形県埋蔵文化財センター）

小林 克・榮 一郎・河田 弘幸・高橋 学・小島 朋夏（秋田県埋蔵文化財センター）

庄内 昭男（秋田県立博物館）

城田 安幸（弘前大学農業生命科学部）

土谷 崇夫（立命館大学大学院 文学研究科）

福田 友之・木村 高（青森県立郷土館）

目 次

序	
例言	
目次	
第1編 序説	
第1章 調査の概要	
第1節 発掘調査に至る経過	1
第2節 調査要項	1
第3節 調査方法と整理方法	3
第4節 調査経過	5
第2章 遺跡の環境	
第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡	6
第2節 遺跡周辺の地形・地質	7
第2編 川原平(1)・(4)遺跡 大川添(2)遺跡	
第1章 基本層序	
第2章 検出遺構と出土遺物	
第1節 検出遺構	16
第2節 出土遺物	16
1. 土器 2. 石器 3. 土製品 4. 石製品	
第3章 川原平(1)遺跡出土土器付着物の ¹⁴ C年代測定	
第4章 まとめ	
引用・参考文献	48
写真図版	49
第3編 水上遺跡	
第1章 基本層序	
第2章 検出遺構と出土遺物	
第1節 検出遺構	67
1. 住居跡 2. 土坑	
第2節 遺構外出土遺物	96
1. 土器 2. 石器	
第3章 まとめ	
まとめ	104
写真図版	113
報告書抄録(川原平(1)遺跡他・水上遺跡)	

第1編 序 説

第1章 調査の概要

第1節 発掘調査に至る経過

平成14年4月に、国土交通省東北地方整備局津軽ダム工事事務所から青森県教育庁文化財保護課へ、津軽ダム建設予定地内に所在する埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する協議の依頼があり、これを受けて同年7月に、津軽ダム工事事務所、文化財保護課、西目屋村教育委員会の3者により、現地踏査と津軽ダム建設工事の工程・内容、津軽ダム建設予定地内の埋蔵文化財調査の進め方等についての協議が行われた。この協議に基づいて、同年8月中に文化財保護課が再度詳細に現地調査（分布調査）を行い、津軽ダム建設予定地常時満水区域内の埋蔵文化財調査対象範囲を12地区、合計768,000㎡に確定し、平成15年度から青森県埋蔵文化財調査センターが担当して発掘調査を実施することとした。また、平成14年10月には津軽ダム工事事務所、文化財保護課、西目屋村教育委員会が埋蔵文化財調査対象区域内の家屋移転跡地の基礎撤去工事・環境整備等について再度協議し、同年10～11月には、文化財保護課が家屋移転跡地の基礎撤去工事の立会調査を行った。

平成15年度の発掘調査は、大川添(1)・(2)遺跡、川原平(1)・(4)遺跡が所在する川原平地区西部を対象として実施することになったが、調査に先立って平成15年6月に、津軽ダム工事事務所、文化財保護課、埋蔵文化財調査センター及び青森県県土整備部河川砂防課、高規格道路・津軽ダム対策課が、調査対象区域の確認、発掘調査の進め方、青森県（河川砂防課）が管理する（現）目屋ダム常時満水区域内の埋蔵文化財包蔵地の取扱い等についての協議を行った。同年7～8月には、予定どおり川原平地区西部の発掘調査が実施され、調査終了日の8月22日には、津軽ダム工事事務所と埋蔵文化財調査センターとで、調査結果の報告と確認、今後の調査についての協議等を行った。また、同年9月には、津軽ダム工事事務所、文化財保護課、埋蔵文化財調査センターが、津軽ダム建設予定地内の埋蔵文化財調査の進め方と発掘調査報告書の刊行計画、付替県道建設予定地内の埋蔵文化財の取扱い、砂子瀬地区の迂回路・橋台建設予定地内の水上遺跡の調査等についての現地確認と協議を行った。その後、津軽ダム工事事務所から水上遺跡の発掘調査を優先して欲しい旨の要望があり、平成16年3月に、再度津軽ダム工事事務所、文化財保護課、埋蔵文化財調査センターが協議し、平成16年度の発掘調査は、水上遺跡が所在する砂子瀬地区迂回路掘削区域等を対象として、平成16年5～7月に実施することになった。

（工藤 大）

第2節 調査要項

（平成15年度）

1 調査目的

津軽ダム建設事業の実施に先立ち、当該地区に所在する西目屋村川原平(1)遺跡外の発掘調査を行い、その記録を保存して、地域社会の文化財活用に資する。

2 調査期間

平成15年7月1日から同年8月22日まで

3 遺跡名及び所在地

川原平(1)遺跡 (青森県遺跡番号25009)

中津軽郡西目屋村大字川原平字福岡116-47外

川原平(4)遺跡 (青森県遺跡番号25022)

中津軽郡西目屋村大字川原平字福岡64-69外

大川添(2)遺跡 (青森県遺跡番号25019)

中津軽郡西目屋村大字川原平字大川添201～203外

4 調査面積

川原平(1)・(4)遺跡 約2,300平方メートル (調査対象面積約160,000平方メートル)

大川添(2)遺跡 約4,800平方メートル (調査対象面積約200,000平方メートル)

5 調査委託者

国土交通省津軽ダム工事事務所

6 調査受託者

青森県教育委員会

7 調査担当機関

青森県埋蔵文化財調査センター

8 調査体制

調査指導員 藤 沼 邦 彦 弘前大学人文学部教授 (考古学)

調査員 島 口 天 青森県立郷土館学芸主査 (地質学)

調査担当者 青森県埋蔵文化財調査センター

所 長 佐 藤 良 治 (現青森県図書館長)

次 長 福 田 友 之 (現青森県立郷土館副館長)

総務課長 工 藤 和 夫 (現県商工労働部資源エネルギー課副参事)

調査第三課長 工 藤 大 (現調査第2グループリーダー)

文化財保護主幹 中 嶋 友 文

” 主事 岡 本 洋

調査補助員 天 内 敬 子・工 藤 百 恵・若 山 誠 治・斎 藤 俊 一 郎

(中嶋 友文)

(平成16年度)

1 調査目的

津軽ダムの建設事業の実施に先立ち、当該地区に所在する西目屋村水上遺跡の発掘調査を行い、その記録を保存して、地域社会の文化財の活用に資する。

2 調査期間

平成16年5月6日から同年7月22日まで

3 遺跡名及び所在地

水上遺跡 (青森県遺跡番号25017)

中津軽郡西目屋村砂子瀬字水上

- 4 調査面積 約1,400平方メートル（調査対象面積約3,000平方メートル）
- 5 調査委託者
国土交通省津軽ダム工事事務所
- 6 調査受託者
青森県教育委員会
- 7 調査担当機関
青森県埋蔵文化財調査センター
- 8 調査体制
- 調査指導員 藤 沼 邦 彦 弘前大学人文学部教授（考古学）
- 調査員 島 口 天 青森県立郷土館学芸主査（地質学）
- 調査担当者 青森県埋蔵文化財調査センター
- 所 長 佐 藤 良 治（現青森県図書館長）
- 次長兼第1GL 福 田 友 之（現青森県立郷土館副館長）
- 総務GL 工 藤 和 夫（現県商工労働部資源エネルギー課副参事）
- 調査第2GL 三 浦 圭 介（現次長兼第1グループリーダー）
- 総括主幹 成 田 滋 彦
- 文化財保護主事 平 山 明 寿
- 調査補助員 萩 坂 華 恵・若 山 真寿美・小 木 栄 理・成 田 議 謙
(成田 滋彦)

第3節 調査方法と整理方法

（川原平（1）遺跡外の調査方法と整理方法）

平成15年度の調査は、川原平遺跡及び大川添遺跡ともに調査対象区域が広範囲におよぶことから、今後の発掘調査を効率的に進めるために、包含層の厚さ及び遺構・遺物の分布密度の把握を目的広がりから次年度以降の発掘調査とした。

グリッド設定は、業者委託により、津軽ダム貯水池用地測量で設置した4級水準点から、公共座標軸に合わせて100mメッシュ（場所によっては50mメッシュ）で基準杭を設置（川原平地区29点、大川添地区23点）し、併せて、標準原点を平成12年度付替県道実施路線測量で設置したKBM. 5H（H=214.397m）を与点として調査区内に数カ所設置した。

調査は基準杭を基点としたグリッド法を用い、4m四方のグリッドを設定した。グリッドは東西方向に算用数字、南北方向にアルファベットを付し、その呼称は北東隅の杭番号を使用している。

粗掘りは人力を主体としたが、表土の除去や遺構・遺物に支障ない部分の掘り下げには重機を使用し、地区ごとにトレンチ番号を付けた。

遺構は、その種類に応じて仮の表記を付した。竪穴住居跡；S I、土坑；S K、焼土遺構；S N、配石(集石)；S Q等であるが、精査していないため遺構かどうか判断できない風倒木痕などの落ち込みもとらずに記載してある。

遺物の取り上げは、遺構及びグリッド単位ごとに層単位で行った。基本層序の注記は『標準土色帖』を用いた。

写真の撮影にあたっては、35mmのモノクローム、カラーリバーサルの各フィルムを使用し、カラーネガフィルムやインスタントカメラも必要に応じて併用した。

整理は、発掘調査を終了後、当センターにて川原平遺跡及び大川添遺跡出土の土器・石器を水洗い→乾燥→注記後、地区ごとに分けて整理作業を行った。土器は地区ごとの接合作業が終了後復元実測の可能な土器と器種・時期がある程度分かる土器破片を選択し断面実測及び拓本を行った。石器は地区ごとに、器種や代表的な形態ものを選択し実測した。また、土製品・石製品はほとんどを実測し掲載するよう努めた。報告書の掲載遺物は観察表を付してある。 (中嶋 友文)

(水上遺跡の調査方法と整理方法)

平成16年度のグリッドは調査区の工事用の中心杭を中心として、南北方向にアルファベットを、東西方向に算用数字を4m毎に付した。北東隅の交点をグリッドの呼称とし、グリッド名はアルファベットー算用数字の組み合わせ(例：DN-100)である。ベンチマークは基準点から、遺構精査の必要に応じて移動して用いた。

遺構精査は二分法により、土層観察ベルトを設定しておこなった。遺構名は発見順に付した。

土層の名称は基本層序については上位から下位にローマ数字を、遺構名堆積土については、上位から下位にローマ数字を、遺構内堆積土については、上位から下位に算用数字を付した。土層注記には『新版標準土色帖』を用いた。実測図の作成は原則として1/20で行い、必要に応じて縮尺を変えることとした。

遺物の取り上げは、遺構及びグリッド毎に層位毎に取り上げて、必要に応じて出土地点の図化及び標高を記した。

なお、遺構内のもので出土層位が不明なものは、覆土一括で取り上げをおこなった。

写真撮影は、35mmカメラを用い、カラーリバーサル・モノクロネガの2種類のフィルムを使用した。

整理は、4月1日から整理作業が始まった。月毎に整理作業の経過を記す。

4月→土器の復元、5月→土器の石膏入れ・土器の選別・依頼原稿、6月→土器の拓本、7月→土器の断面実測・写真撮影・石器の選別、8月→礫実測・石質鑑定、9月→遺構図面の修正、10月→土器・石器のトレース、11月→遺構図版のトレース、12月→図版作成・原稿、1月→割付・入札

なお、剥片石器40点は、平成16年度に業者に実測委託をしている。 (成田 滋彦)

第4節 調査経過

(平成15年度 川原平(1)遺跡外)

- 6月28日 川原平地区の基準杭打ちを業者に委託する。
- 6月30日 川原平地区にプレハブ及びトイレを設置し、水道の設備工事に立ち合う。
- 7月1日 川原平(4)遺跡のB区の発掘調査を開始する。調査器材を搬入し周辺の整備を行い、午後から設定したトレンチの素掘りを開始し、グリッド杭の敷設、ベンチ・マークの移動も並行して行った。
- 7月9日 川原平(1)・(4)遺跡の表土処理を重機で行い、遺構確認の効率化を計る。
- 7月29日 川原平(4)遺跡E区のトレンチ掘りをし、遺構確認を行う。
- 7月31日 村越・藤沼調査指導員が現地指導を行う。
- 8月1日 大川添(2)遺跡の調査に先立ち草刈りを並びに業者による基準杭打ち委託を開始する。
- 8月5日 大川添(2)遺跡の表土処理を重機で行う。
- 8月7日 島口調査員が地質の現地指導に来られた。
- 8月11日 大川添(2)遺跡の遺構確認を行う。
- 8月19日 西目屋村文化財審議委員ほか7名が現場を視察する。
- 8月22日 発掘調査器材及び出土遺物等を当センターに搬出し、調査を終了するのに伴い、津軽ダム担当者と調査区内のトレンチの埋め戻しについて協議する。
- 8月27日 重機による調査トレンチの埋め戻し及び、一部トレンチの周囲をロープで囲い安全対策を施す。

(中嶋 友文)

(平成16年度 水上遺跡)

5月6日、調査器材を搬入し、草刈り・道路整備などの環境整備を行った後に、東側の試掘調査地区から粗掘りを開始した。

調査は、東側が工事道路地区で試掘調査を、西側は現道の拡幅工事で本調査を実施した。東側は第I層を除去後に礫群を検出し、当初、配石遺構の可能性が予想されたため、全体に試掘トレンチを設定し、確認作業を行った。

調査では縄文時代後期の土器破片が出土したが、すべて水流による摩耗が著しく、当初考えられていた配石遺構は土石流の跡と確認されたため、調査を終了した。

6月中旬には、西側の本調査区の伐採後に、本格的な精査を開始した。緩斜面の地形には、遺構が複雑に重複し、調査は難儀した。なお、調査の結果、縄文時代中期の集落跡の一部を検出することができた。

7月14日には、ラジコンヘリによる空中撮影を行った。

7月22日には、調査器材・出土遺物等を搬出し、予定通り調査を終了した。

(成田 滋彦)

第2章 遺跡の環境

第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡

西目屋村には現在23の遺跡が登録されており、特に目屋ダムのある美山湖周辺に14の遺跡が集中している。その中で調査が行われたのは、岩木川右岸河岸段丘上に立地する砂子瀬村元遺跡が、目屋ダムの完成とともに美山湖の湖底に沈むことになるため、弘前大学教育学部考古学教室（村越潔教室）が、建設省の緊急調査依頼を受けて実施され、遺構は発見されなかったものの、縄文時代中期の土器や石器が確認されている。現在はダムの入水により湖底で保存されているが、渇水期には遺跡が出現しているのを見ることが出来る。なお、この村元遺跡の発掘調査の概要と出土遺物については、福田友之氏が、『青森県考古学1』（1984）に記載している。

平成3年に、青森県教育委員会が分布調査を実施し、砂子瀬地域では、砂子瀬遺跡、水上遺跡、芦沢(1)・(2)遺跡、川原平地域では、大川添(1)・(2)や川原平(3)・(4)・(5)といった遺跡が新たに発見され遺跡登録されている。

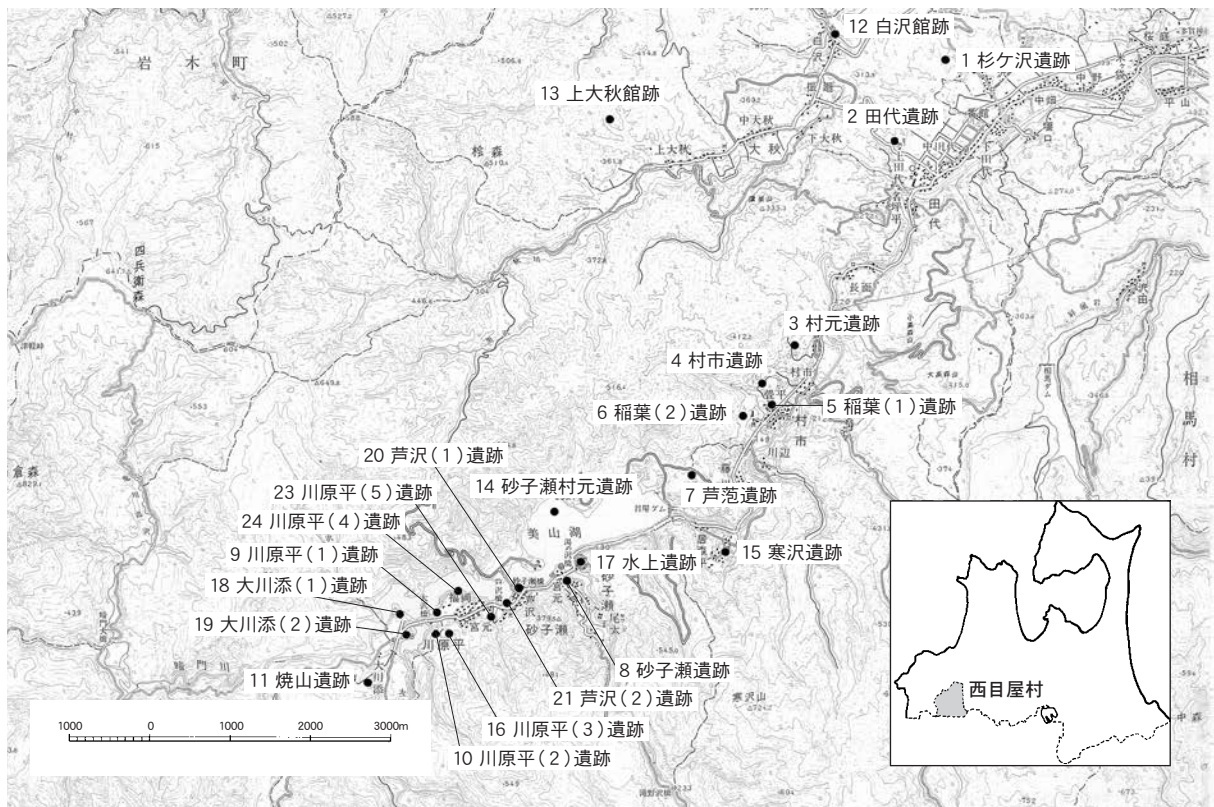


図1 周辺遺跡

地図番号	遺跡名	時代	種別	地図番号	遺跡名	時代	種別
1	杉ヶ沢遺跡	縄文、平安	散布地 城館	13	上大秋館跡	中世	城館
2	田代遺跡	縄文(後)、平安	散布地	14	砂子瀬村元遺跡	縄文(中)	散布地
3	村元遺跡	平安	散布地	15	寒沢遺跡	縄文	散布地
4	村市遺跡	平安	散布地	16	川原平(3)遺跡	縄文	散布地
5	稲葉(1)遺跡	縄文(後)	散布地	17	水上遺跡	縄文	散布地
6	稲葉(2)遺跡	平安	散布地	18	大川添(1)遺跡	縄文	散布地
7	芦沼遺跡	縄文(後)	散布地	19	大川添(2)遺跡	縄文	散布地
8	砂子瀬遺跡	縄文(後・晩)	散布地	20	芦沢(1)遺跡	縄文	散布地
9	川原平(1)遺跡	縄文(後・晩)	散布地	21	芦沢(2)遺跡	縄文	散布地
10	川原平(2)遺跡	平安	散布地	22	川原平(4)遺跡	縄文	散布地
11	焼山遺跡	縄文	散布地	23	川原平(5)遺跡	縄文	散布地
12	白沢館跡	中世	城館				

第2節 遺跡周辺の地形・地質

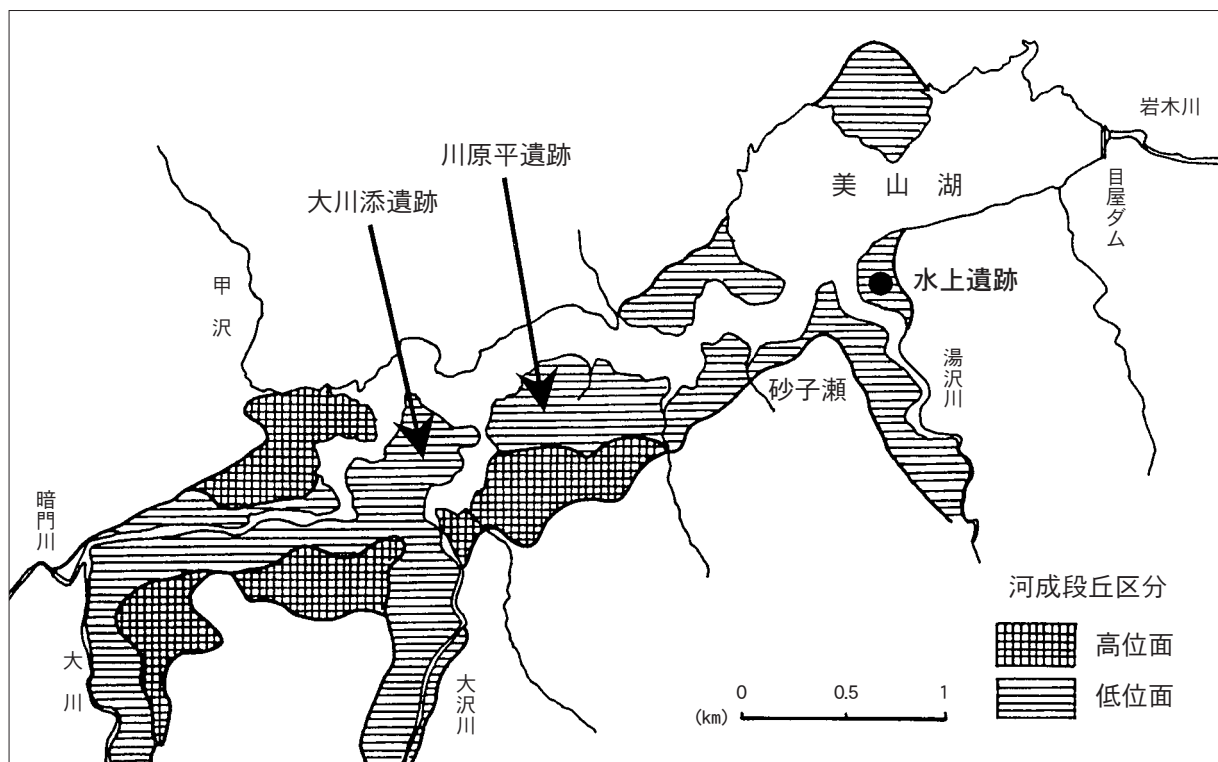
青森県立郷土館 島口 天

1 遺跡周辺の地形

本遺跡の周辺一帯は、青森県の南西部に位置する白神山地と呼ばれる山林地帯である。白神山地から東方へ岩木川が流下し、本遺跡はその上流に建設された目屋ダムによる人造湖「美山湖」の右岸に広がる川原平台地上に位置する。

白神山地は、白神岳・向白神岳を主峰とした急峻な山々からなる。山地北東側では赤石川が北流し、その西方には追良瀬川や笹内川がほぼ北西方向に流下している。白神岳や向白神岳はこの追良瀬川や笹内川の上流部に位置し、追良瀬川と赤石川に挟まれた山地も青鹿山、逆川山、天狗山などの峰々が南北に連なり、急峻な山容を呈している。赤石川より東方では然々岳、菱喰山、乱岩の森、高倉森など急峻な山々もあるが、東方に向かうにつれて緩やかな山容の山地となっている。白神山地の地形的特長として地すべり地形があげられ、更新世のものは大型で、山地内にはこの時期の古い滑落崖が数多くみられる。

川原平台地は、岩木川およびその支流の大沢川や大川沿いに分布する砂礫台地からなり、この台地を構成する砂礫段丘は、その標高・現河床からの比高・段丘面の開析状態などから高位面と低位面に区分される。



地形区分図〔水野・堀田（2003）を元に作成〕

2 遺跡周辺の地質

この地域に分布する先第三系は、菱喰山周辺および白神岳西方に分布する花崗岩類と上長慶平東方に分布する長慶平基盤堆積岩である。新第三系は、下位より藤倉川層、砂子瀬層、大童子層、相馬安山岩類、赤石層、大秋層に区分され、各層は一連整合の関係にある。第四系は、全域に渡って散在的に分布する地すべり堆積物、主要河川に沿って分布する谷底平野堆積物、美山湖周辺および中村川流域に分布する河成段丘堆積物である。白神山地周辺地域は本邦でも有数の第四紀における隆起量が大きい地域であり、そのため緩行性地すべりが多数起こっている。

美山湖の周囲には藤倉川層の一部を構成する安山岩質火砕岩、砂子瀬層を構成する火山礫凝灰岩・凝灰岩・砂質シルト岩、高位河成段丘堆積物、低位河成段丘堆積物が分布する。

藤倉川層の安山岩質火砕岩は美山湖右岸に分布し、層厚600～800m、主として緑～紫緑色の火山礫凝灰岩からなり、淡緑色の凝灰岩・凝灰角礫岩を伴う。一部でデイサイト質溶結凝灰岩が挟まれる。異質礫を多量に含む特徴があり、花崗岩類、流紋岩、黒色の頁岩等の角礫を含む。本岩は、植物化石を含む炭質シルト岩を挟む以外に、石炭、赤褐色の細粒凝灰岩、火山礫岩等を層状に挟む。

砂子瀬層は美山湖左岸および上流側に分布し、火山礫凝灰岩・凝灰岩の層厚は50～250mと著しく増減する。下部は暗灰緑色の流紋岩質凝灰角礫岩と凝灰質砂岩の互層、成層した暗灰～紫色の安山岩～デイサイト質火山碎屑岩、珪長質凝灰岩よりなり、礫岩を挟む。砂質シルト岩は小規模な露出で、軟体動物化石を含むことがある。珪長質凝灰岩、凝灰質砂岩、泥岩および炭層を挟む。

高位河成段丘堆積物は、美山湖周辺に標高200m前後の平坦面を構成して分布する。主に成層した中～細礫層よりなり、砂層や粘土層を挟む。下位層を不整合に覆う。

低位河成段丘堆積物は、主に成層した中～細礫層よりなり、砂層や粘土層を挟む。下位層を不整合に覆う。

3 遺跡内の基本層序

大川添(2)遺跡及び川原平(1)・(4)遺跡

大川添(2)遺跡は標高205～211mの平坦面上に立地し、川原平(1)・(4)遺跡は標高200m前後の平坦面上に立地している。これらの平坦面は低位河成段丘面に相当し、美山湖に注ぐ大沢川によって分けられている。

これらの遺跡では、低位河成段丘堆積物に黒色土が重なり、これが遺物包含層となっている。基本となるのは、この低位河成段丘堆積物に黒色土が重なる場合であるが、造成土が黒色土に重なる場合、黒色土が除かれて造成土が直接低位河成段丘堆積物を覆う場合もある。これは、目屋ダムができたことによって大規模な集落の移転があった際に造成が行われたためである。

本遺跡内で見られる土層を色相や締り具合、含有物等によってⅠ～Ⅳ層に細分し、それを基本層序として詳細について述べる。

Ⅰ層：層厚10～30cm。耕作土。締りがなく草根が多く入り込み、下部には粗粒砂がみられる。

Ⅱ層：層厚10～50cm。造成土。締りがなく礫や炭化物、粘土ブロック等を含む。

Ⅲ層：層厚5～50cm。黒色土。旧表土。小礫や炭化物、粘土粒を含み、遺物を包含する。

Ⅳ層：層厚不明。低位河成段丘堆積物。にぶい黄褐色を呈し、やや締まりがあり粘土質。こぶし大

～人頭大の礫を含み、礫は角がややとれた亜円礫が多い。

水上遺跡

水上遺跡は、標高が210mの平坦面上に立地し、この平坦面は低位河成段丘面に相当する。

水上遺跡では、低位河成段丘堆積物に層厚2～3mの大礫を含む土砂が重なり、更にそれらを黄褐色砂質シルト・黒色土が順に覆い平坦面を形成している。低位河成段丘堆積物最上部の標高は約207m、薄い黒褐色土となっており、大礫を含む土砂に覆われる前に植生があったことが推測される。土砂に含まれる大礫には角が残り、大きさが不均等、基質は砂質シルトで基質支持であることから土石流であることが考えられる。礫種は流紋岩・頁岩と様々で、この場所の基盤をなす藤倉川層の安山岩質火砕岩から由来していると考えられる。

本遺跡内で見られる土層を色相や締り具合、含有物等によってⅠ～Ⅴ層に細分し、それを基本層序として詳細について述べる。

Ⅰ層：層厚10cm。黒色土。遺跡内全域で見られ、締りが無い。

Ⅱ層：層厚10～30cm。黄褐色砂質シルト。締りがなく、黒色土に漸移する。

Ⅲ層：層厚2～3m。土石流堆積物。角が残り、大きさが不均等で様々な種類の大礫が含まれる。

Ⅳ層：層厚10cm。暗色土。段丘面が離水した後の旧地形面で、植生があったと考えられる。

Ⅴ層：層厚不明。低位河成段丘堆積物。円磨度の高い礫が密集するが上位に向かって小さくなり、暗色土に漸移する。

《引用文献》

鎌田耕太郎・根本直樹（2003）5万分の1表層地質図「川原平」．土地分類基本調査「川原平」，青森県農林水産部農村整備課，p.17 - 29.

水野 裕・堀田報誠（2003）5万分の1地形分類図「川原平」．土地分類基本調査「川原平」，青森県農林水産部農村整備課，p.13 - 16.



第2編

川原平(1)・(4)遺跡
大川添(2)遺跡

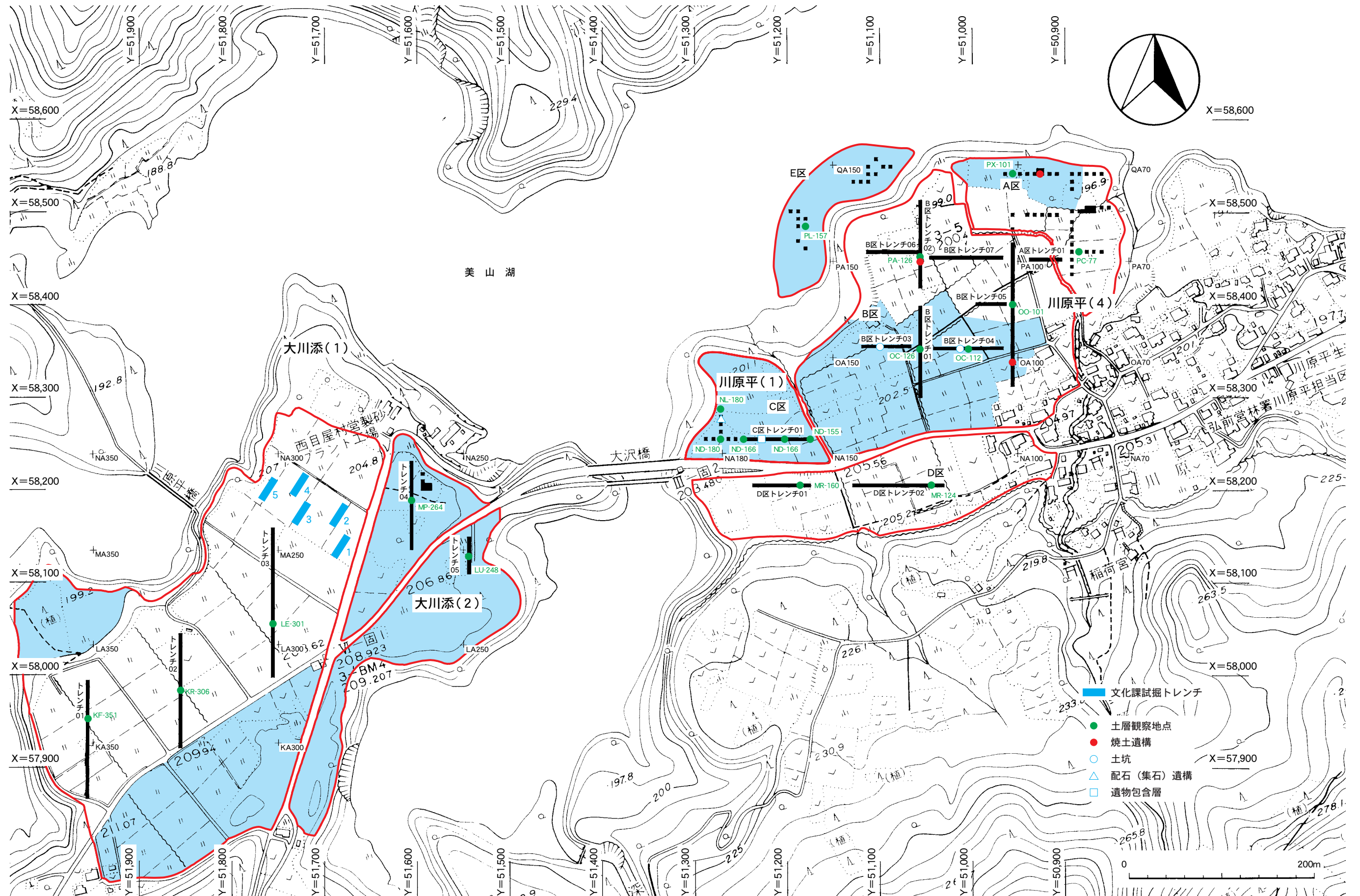


図2 調査区域図・トレンチ配置図 (S=1/4000)

第1章 基本層序

川原平(1)・(4)遺跡、大川添(2)遺跡ともに広範囲な上に削平や造成が行われているため、大まかな層序については第1編、第2章、第2節に記載してある。

本節では各試掘箇所(図2)の堆積状況に図示する。川原平(1)・(4)遺跡では、II層とIII層が部分的に欠落しているのが見られ、大川添(2)遺跡ではほぼ全域でIII層が欠落している。

I層：層厚10~30cm。耕作土。締りがなく草根が多く入り込み、下部には粗粒砂がみられる。

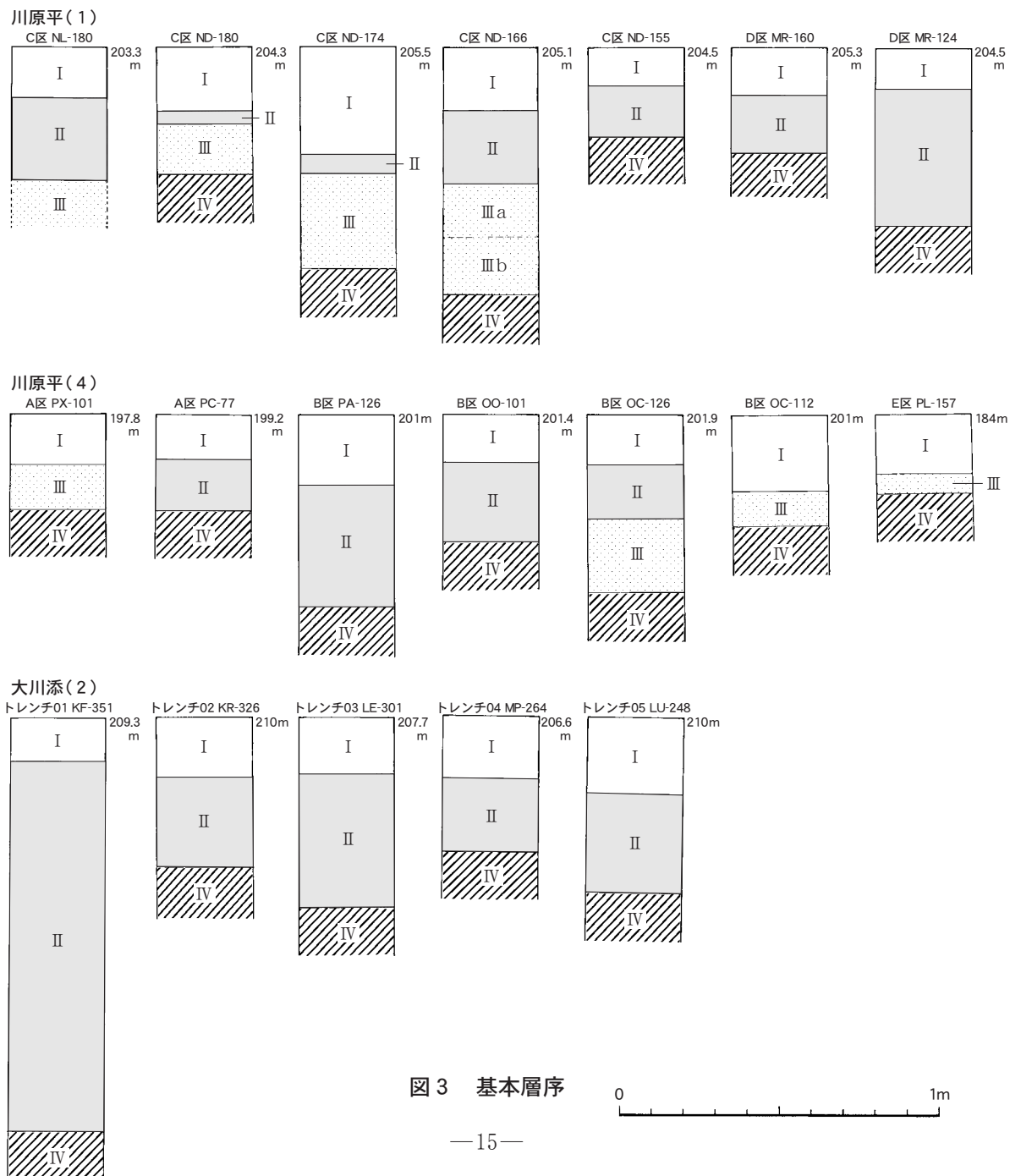
II層：層厚10~50cm。造成土。締りがなく礫や炭化物、粘土ブロック等を含む。

III層：層厚5~50cm。黒色土。旧表土。小礫や炭化物、粘土粒を含み、遺物を包含する。

III a層：炭化物をやや多く含み、小礫や粘土粒とともに、遺物を多量に包含する。

III b層：小礫や炭化物、粘土粒を含み、遺物を包含する。

IV層：層厚不明。低位河成段丘堆積物。にぶい黄褐色を呈し、やや締りがあり粘土質。こぶし大~人頭大の礫を含み、礫は角がややとれた亜円礫が多い。



第2章 検出遺構と出土遺物

第1節 検出遺構（図2）

調査は、対象区域が広いため川原平(4)遺跡の平坦面をB区、北東側の一段低い地区をA区、さらに低く増水時に水没する地区をE区、川原平(1)遺跡は中央を分断する道路から北側をC区、南側をD区とした。大川添(2)遺跡は中央の平坦部を中心に重機による遺構確認を実施し、それぞれの地区ごとトレンチ番号を付した。

その結果、川原平地区及び大川添地区の大部分が前回のダム建設に伴うと思われる大規模な造成等により削平されており、川原平(4)遺跡のA区とB区の一部のみ部分的に削平されずに残存している事が確認され、その結果調査範囲は縮小された。また、E区の旧水田跡からは縄文中期の遺物が出土している。川原平(1)遺跡のD区はそのほとんどが削平されているが、逆にC区の大部分は残存しており、後期から晩期にかけての遺物包含層が確認されている。

大川添(2)遺跡は中央の平坦部が大規模な造成によりほとんど削平されており、遺構は確認されていないが、数点の遺物が出土しているため、今後道路から南西部分の調査が必要と思われる。

検出された遺構は川原平(1)遺跡のA区に焼土遺構1基、B区トレンチ02と101ラインに焼土遺構が各1基、B区トレンチ03に土坑5基、トレンチ04に土坑7基、川原平(4)遺跡は配石（集石）遺構が2基とC区トレンチ01から遺物包含層が確認されている。

第2節 出土遺物

1 土器（図4～11）

今回の調査で出土した縄文土器は、段ボール箱で66箱分である。ほとんどが川原平地区から出土しており川原平(1)遺跡が62箱、川原平(4)遺跡が4箱（約1,800点）、大川添(2)遺跡は土器片7点が出土している。出土土器は各遺跡によって時期的に若干の相違がみられる。

縄文土器については、下記のとおり分類した。

第I群 縄文時代早期の土器

第II群 縄文時代前期の土器

第III類 縄文時代中期の土器

第IV群 縄文時代後期の土器

1類 後期初頭から前葉の土器

2類 後期中葉の土器

3類 後期後葉の土器

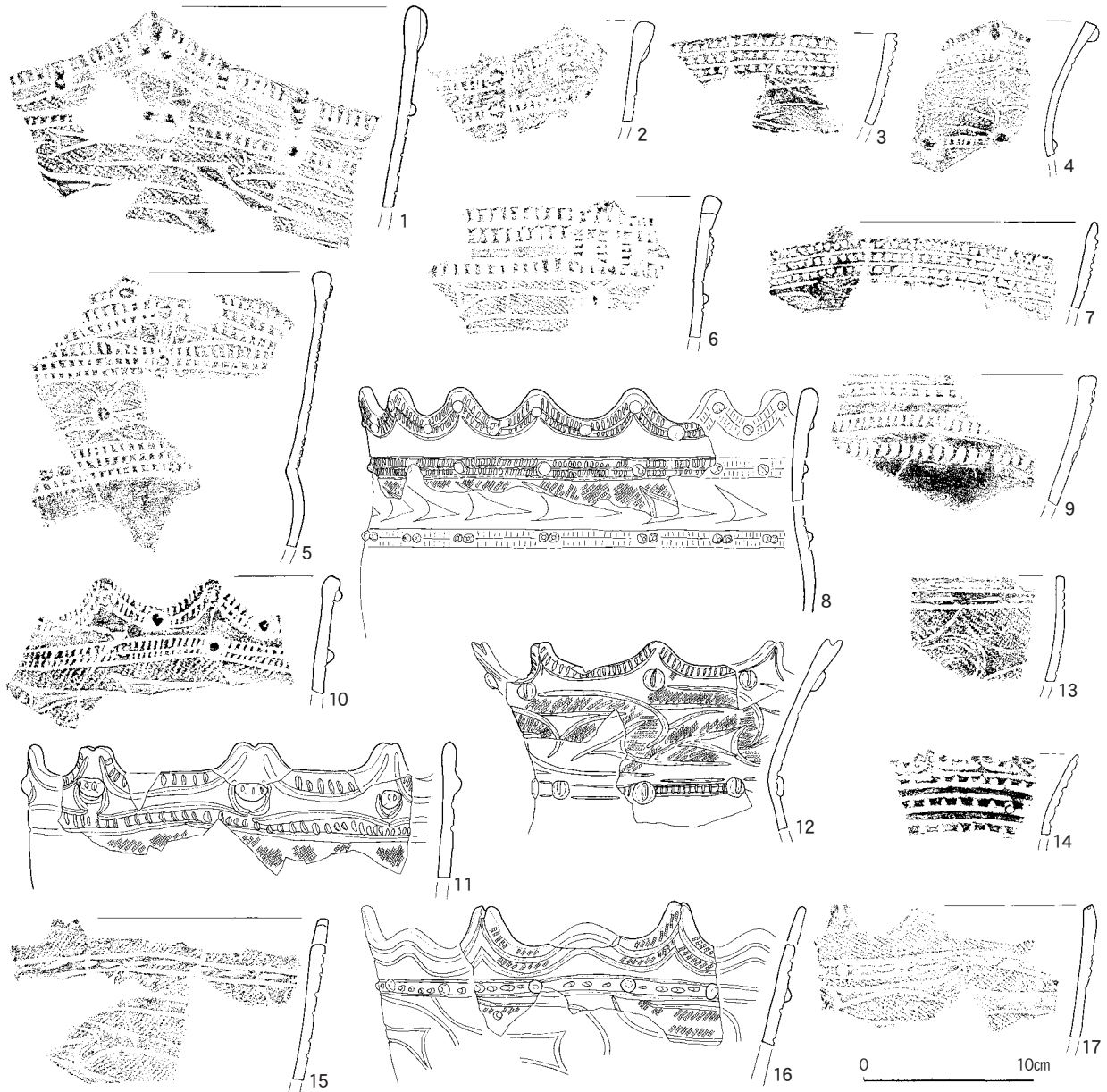
第V群 縄文時代晩期の土器

1類 晩期前葉の土器

2類 晩期中葉の土器

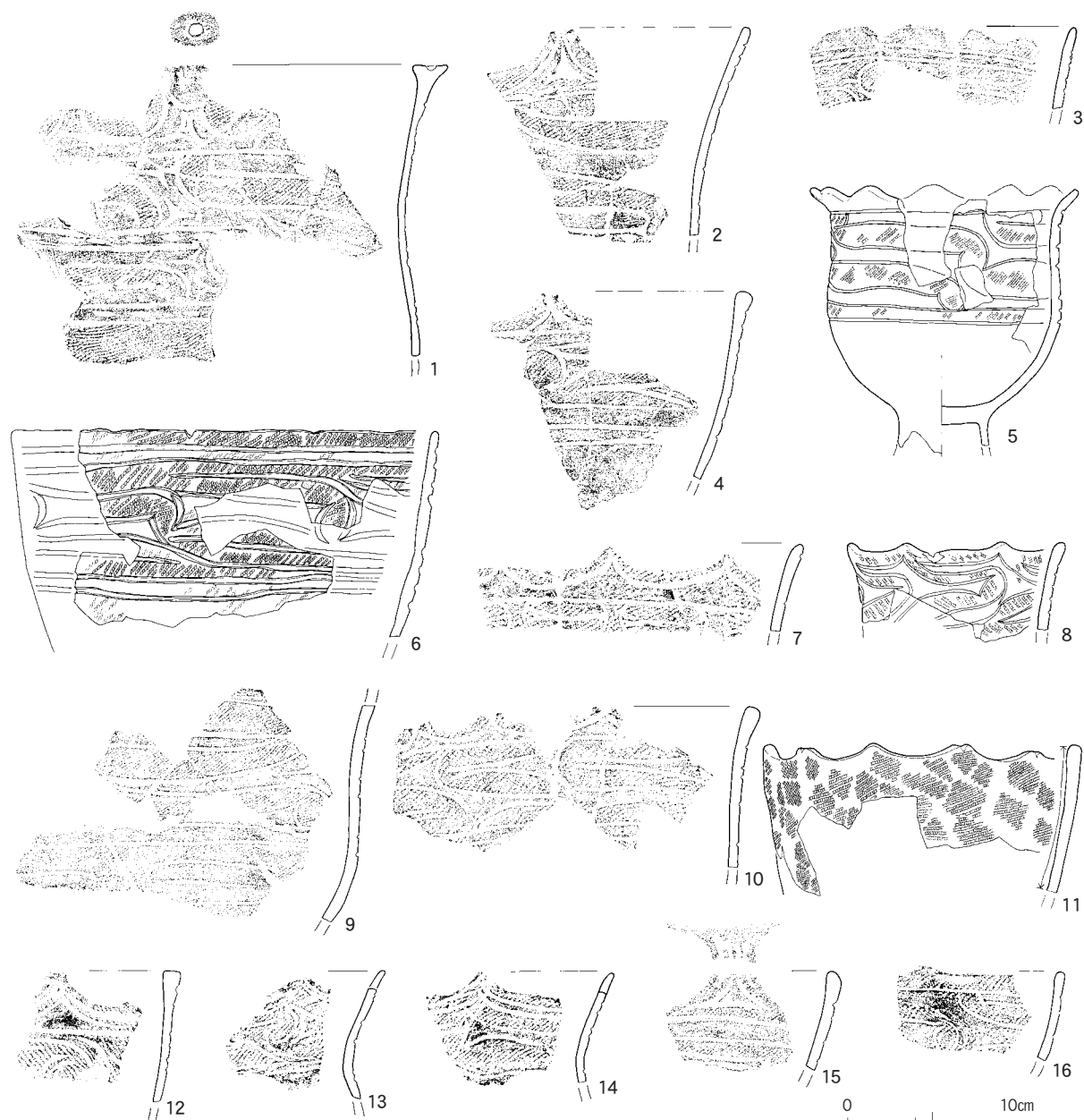
3類 晩期後葉の土器

第VI群 弥生時代の土器



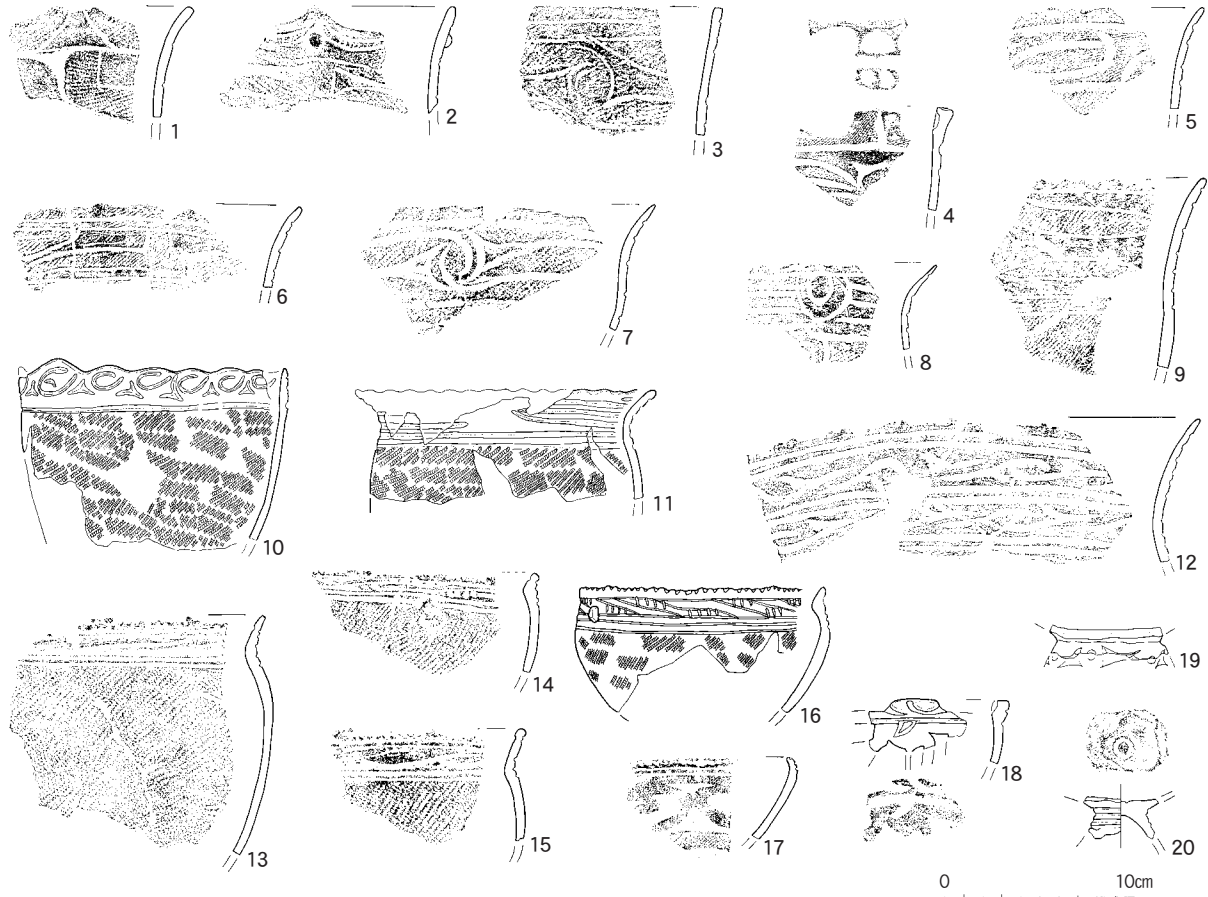
図版番号	出土層位	器種	部位	外面文様	内面調整	分類	備考
1	ND-174 Ⅲ層	深鉢	口縁部	粘土瘤貼付、刻目、RLR複節、沈線	ミガキ	IV-3	
2	C区トレンチ01 Ⅲ層	深鉢	口縁部	粘土瘤貼付、刻目、LR縄文、沈線	ミガキ	IV-3	
3	C区トレンチ01 Ⅲ層	深鉢	口縁部	管状刺突、沈線、LR縄文	ミガキ	IV-3	
4	C区トレンチ01 Ⅲ層	深鉢	口縁部	粘土瘤貼付、刻目、RL縄文、沈線	ミガキ	IV-3	
5	C区トレンチ01 Ⅲ層	深鉢	口縁部	粘土瘤貼付、刻目、RL縄文、沈線	ミガキ	IV-3	
6	ND-173 Ⅲ層	深鉢	口縁部	粘土瘤貼付、刻目、RL縄文、沈線	ミガキ	IV-3	
7	C区トレンチ01 Ⅲ層	深鉢	口縁部	管状刺突、沈線、RL縄文	ミガキ	IV-3	
8	ND-167 Ⅲ層	深鉢	口縁部	粘土瘤貼付、刻目、沈線、LR縄文	ミガキ	IV-3	
9	ND-169 Ⅲ層	深鉢	口縁部	刻目、沈線	ミガキ	IV-3	
10	ND-166 Ⅲ層	深鉢	口縁部	粘土瘤貼付、刻目、LR縄文、沈線	ミガキ	IV-3	
11	ND-167 Ⅲ層	深鉢	口縁部	粘土瘤貼付、刻目、沈線、LR縄文	ミガキ	IV-3	
12	C区トレンチ01 Ⅲ層	深鉢	口縁部	粘土瘤貼付、刻目、LR縄文、沈線	ミガキ	IV-3	
13	ND-167 Ⅲ層	深鉢	口縁部	刺突、RL縄文、沈線	ミガキ	IV-3	
14	C区トレンチ01 Ⅲ層	深鉢	口縁部	刺突、沈線	ミガキ	IV-3	補修孔
15	ND-170 Ⅲ層	深鉢	口縁部	刺突、沈線、LR縄文	ミガキ	IV-3	
16	ND-169 Ⅲ層	深鉢	口縁部	粘土瘤貼付、刺突、LR縄文、沈線	ミガキ	IV-3	
17	NB-169 Ⅲ層	深鉢	口縁部	刺突、刻目、LR縄文、沈線	ミガキ	IV-3	補修孔

図4 遺構外出土土器



図版番号	出土層位	器種	部位	外面文様	内面調整	分類	備考
1	NH-180 I層	深鉢	口縁部	RL縄文、沈線	ミガキ	IV-3	
2	ND-196 I層	深鉢	口縁部	刺突、RL縄文、沈線	ミガキ	IV-3	
3	ND-169 III層	深鉢	口縁部	刺突、RL縄文、沈線	ミガキ	IV-3	
4	NJ-180 I層	深鉢	口縁部	RL縄文、沈線	ミガキ	V-1	
5	NH-180 I層	台付土器	略完形	LR縄文、沈線	ミガキ	V-1	
6	C区トレンチ01 III層	深鉢	口縁部	沈線、LR縄文	ミガキ	V-1	面スス炭灰化物付着
7	C区トレンチ01 III層	深鉢	口縁部	RL縄文、沈線	ミガキ	V-1	
8	C区トレンチ01 III層	深鉢	口縁部	RL縄文、沈線	ミガキ	V-1	
9	ND-167 III層	深鉢?	胴部	沈線、RL縄文	ミガキ	V-1	
10	ND-167 III層	深鉢	口縁部	LR縄文、沈線	ミガキ	V-1	
11	ND-171 III層	深鉢	口縁部	LR縄文	ミガキ	V-1	
12	ND-167 III層	深鉢	口縁部	RL縄文、沈線	ミガキ	V-1	
13	C区トレンチ01 III層	深鉢	口縁部	RL縄文、沈線	ミガキ	V-1	
14	C区トレンチ01 III層	深鉢	口縁部	沈線、RL縄文	ミガキ	V-1	
15	C区トレンチ01 III層	深鉢	口縁部	LR縄文、沈線	ミガキ	V-1	
16	ND-168 III層	深鉢	口縁部	沈線、LR縄文	ミガキ	V-1	

図5 遺構外出土器



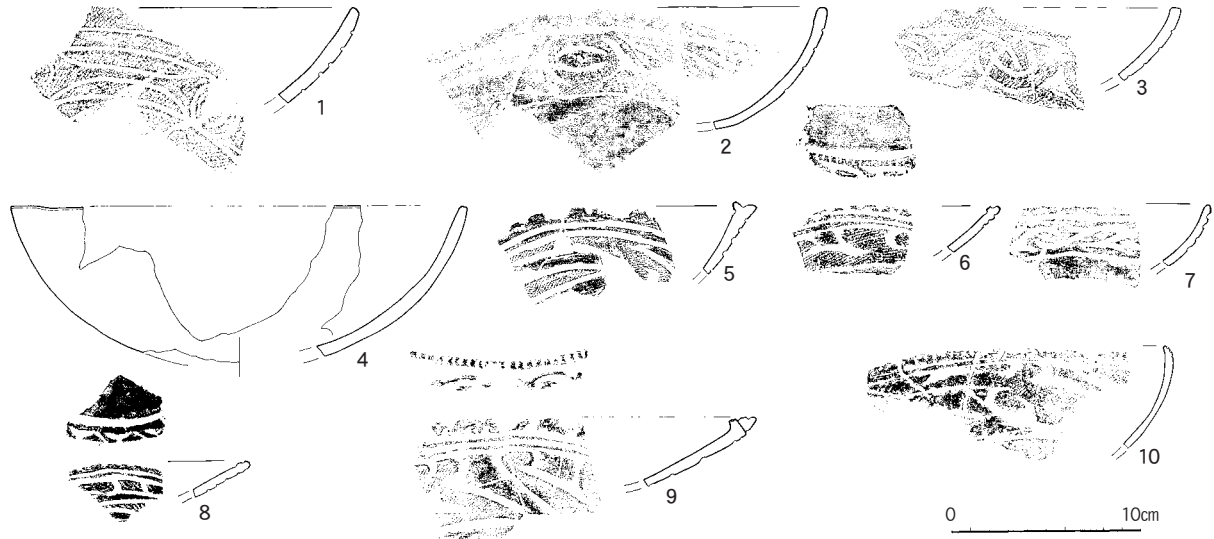
図版番号	出土層位	器種	部位	外面文様	内面調整	分類	備考
1	ND-166 Ⅲ層	深鉢	口縁部	沈線、RL縄文	ミガキ	V-1	
2	ND-170 Ⅲ層	深鉢	口縁部	粘土瘤貼付、刻目、RL縄文、沈線	ミガキ	V-1	
3	NJ-180 Ⅰ層	深鉢	口縁部	LR縄文、沈線	ミガキ	V-1	
4	ND-169 Ⅲ層	深鉢	口縁部	LR縄文、沈線	ミガキ	V-1	
5	ND-167 Ⅲ層	深鉢	口縁部	LR縄文、沈線	ミガキ	V-1	
6	C区トレンチ01 Ⅲ層	深鉢	口縁部	LR縄文、沈線	ミガキ	V-1	
7	C区トレンチ01 Ⅲ層	深鉢	口縁部	刺突？、LR縄文、沈線	ミガキ	V-1	
8	ND-178 Ⅲ層	深鉢	口縁部	RL縄文、沈線	ミガキ	V-1	
9	C区トレンチ01 Ⅲ層	深鉢	口縁部	LR縄文、沈線	ミガキ	V-1	
10	ND-176 Ⅱ層	鉢	口縁部	LR縄文、沈線	ミガキ	V-1	内面スス状炭化物付着
11	ND-176 Ⅰ層	深鉢	口縁部	沈線、LR縄文	ミガキ	V-1	
12	ND-166 Ⅲ層	深鉢	口縁部	沈線	ミガキ	V-1	
13	ND-166 Ⅲ層	鉢	口縁部	刻目、刺突、LR縄文	ミガキ	V-1	内面スス状炭化物付着
14	ND-168 Ⅲ層	鉢	口縁部	刻目、粘土瘤貼付、RL縄文	ミガキ	V-1	
15	ND-166 Ⅲ層	鉢	口縁部	刺突、LR縄文	ミガキ	V-1	内面スス状炭化物付着
16	ND-166 Ⅲ層	鉢	口縁部 ～胴部	沈線、LR縄文	ミガキ	V-1	外面スス状炭化物付着
17	NI-180 Ⅰ層	鉢	口縁部	沈線、RL縄文	ミガキ	V-2	赤色顔料付着
18	ND-168 Ⅲ層	台付土器	底部	透し	ミガキ	V	
19	ND-170 Ⅲ層	台付土器	底部	透し	ミガキ	V	
20	C区トレンチ01 Ⅲ層	台付土器	底部	沈線	ミガキ	V-3	赤色顔料付着

図6 遺構外出土土器

川原平(1)遺跡

当該地区で出土した縄文土器は、後期から晩期を中心に段ボール箱で62箱分である。

第Ⅰ群から第Ⅲ群の土器は出土していない。



図版番号	出土層位	器種	部位	外面文様	内面調整	分類	備考
1	ND-169 Ⅲ層	皿?	口縁部	沈線、RL縄文	ミガキ	V-1	
2	C区トレンチ01 Ⅲ層	皿	口縁部	RL縄文、沈線	ミガキ	V-1	
3	ND-176 Ⅰ層	皿?	口縁部	LR縄文、沈線	ミガキ	V-1	
4	ND-167 Ⅲ層	皿	口縁部 ~胴部	無文	ミガキ	V-1	
5	NJ-180 Ⅰ層	皿	口縁部	LR縄文、沈線	ミガキ	V-1	
6	ND-168 Ⅲ層	皿	口縁部	LR縄文、沈線	ミガキ	V-2	
7	C区トレンチ01 Ⅲ層	皿?	口縁部	沈線	ミガキ	V-1	
8	NJ-180 Ⅰ層	皿	口縁部	RL縄文、沈線	ミガキ	V-1	
9	ND-167 Ⅲ層	皿	口縁部	LR縄文、沈線	ミガキ	V-2	
10	NJ-180 Ⅰ層	皿?	口縁部	沈線、RL縄文	ミガキ	V-2	

図7 遺構外出土土器

第IV群 縄文時代後期の土器

3類 後期後葉の土器 (第4図-1~図5-3、図8-1、図9-1~9)

深鉢類は、口縁部から胴部上半にかけての文様帯に刻目帯や刺突帯をもち、文様の連結点や文様と無文部の境に粘土瘤が貼付けられるものが多く、注口土器も同様である。皿類は出土していないが、壺類は口縁部と頸部に貼付けがみられる。いずれも十腰内V式以降の土器と考えられる。

第V群 縄文時代晩期の土器

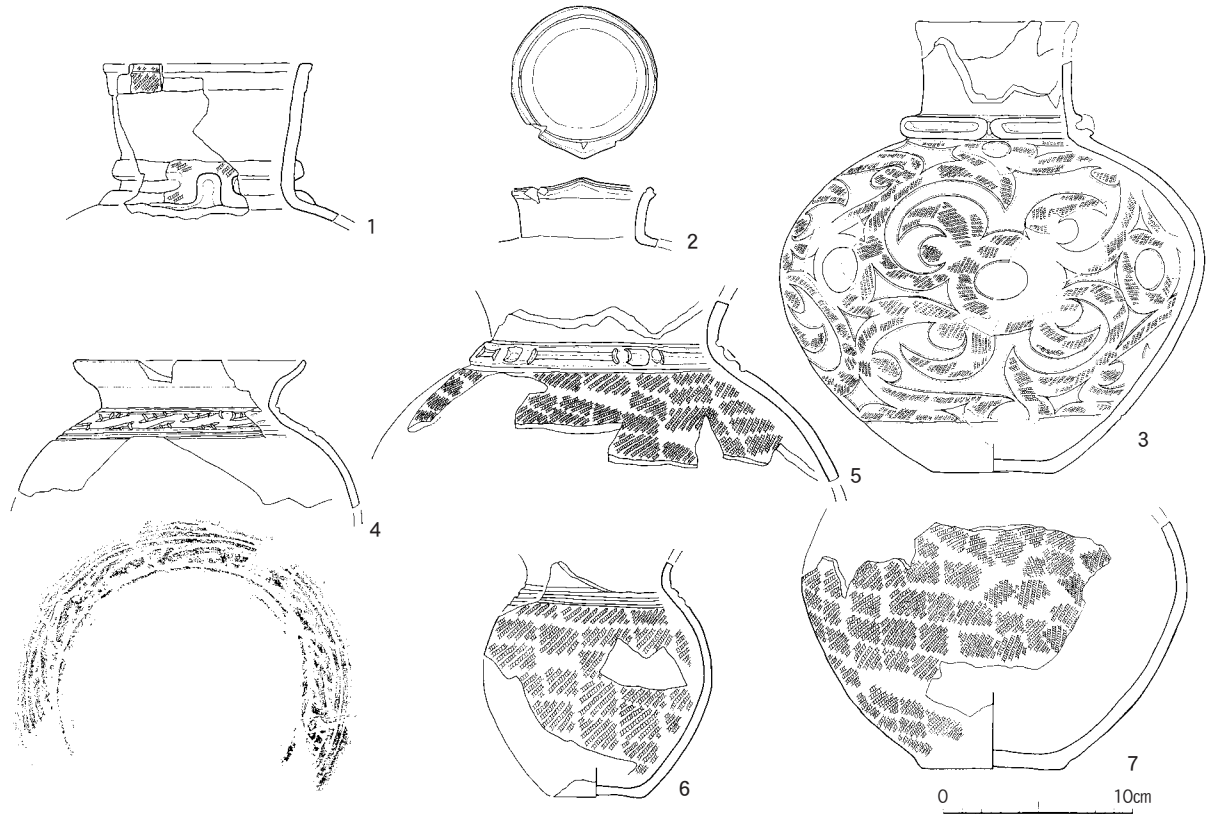
1類 晩期前葉の土器

a 入組縄文帯と三叉文が主体文様のもの

深鉢類(図5-4~図6-9)は入組縄文帯と三叉文が口縁部から胴部にかけてみられる。皿類(図7-1・2)も三叉文や入組縄文がみられ、壺類(図8-2)は口唇部に山形の突起がみられる。注口土器(図9-10)は注口直下に粘土瘤が貼付けられている。いずれも大洞B1式と考えられる。

b 入組三叉文が主体文様のもの

深鉢類(図6-10~12)と皿類(図7-3)は入組三叉文が主体文様である。注口土器(図9-11・12)は肩部から口縁部にかけて椀状に膨らむものや口縁部にB突起と三叉文系の文様がみられる。壺類(図8-3)も入組三叉文が底部近くまでみられ、赤色顔料が全面に塗布されている。大洞B2式と考えられる。



図版番号	出土層位	器種	部位	外面文様	内面調整	分類	備考
1	NH-180 I層	壺?	口縁部	粘土瘤貼付、LR縄文	ミガキ	IV-3	
2	NL-180 I層	壺	口縁部	突起	ミガキ	V-1	
3	ND-176 II層	壺	完形	沈線、RL縄文	ミガキ	V-1	赤色顔料付着
4	C区トレンチ01 III層	壺	口縁部	刺突、沈線	ミガキ	V-1	
5	ND-166 III層	壺	頸部	沈線、LR縄文	ミガキ	V-1	
6	C区トレンチ01 III層	壺	胴部	沈線、LR縄文	ミガキ	V-1	
7	ND-170 III層	壺?	胴部	LR縄文	ミガキ	V	

図8 遺構外出土土器

c 羊歯状文が主体文様のもの

深鉢類（図6-13～16）は羊歯状文が主体文様である。壺類（図8-4）は頸部に羊歯状文がみられる。大洞BC式と考えられる。

2類 晩期中葉の土器（図6-17、図7-6・9・10）

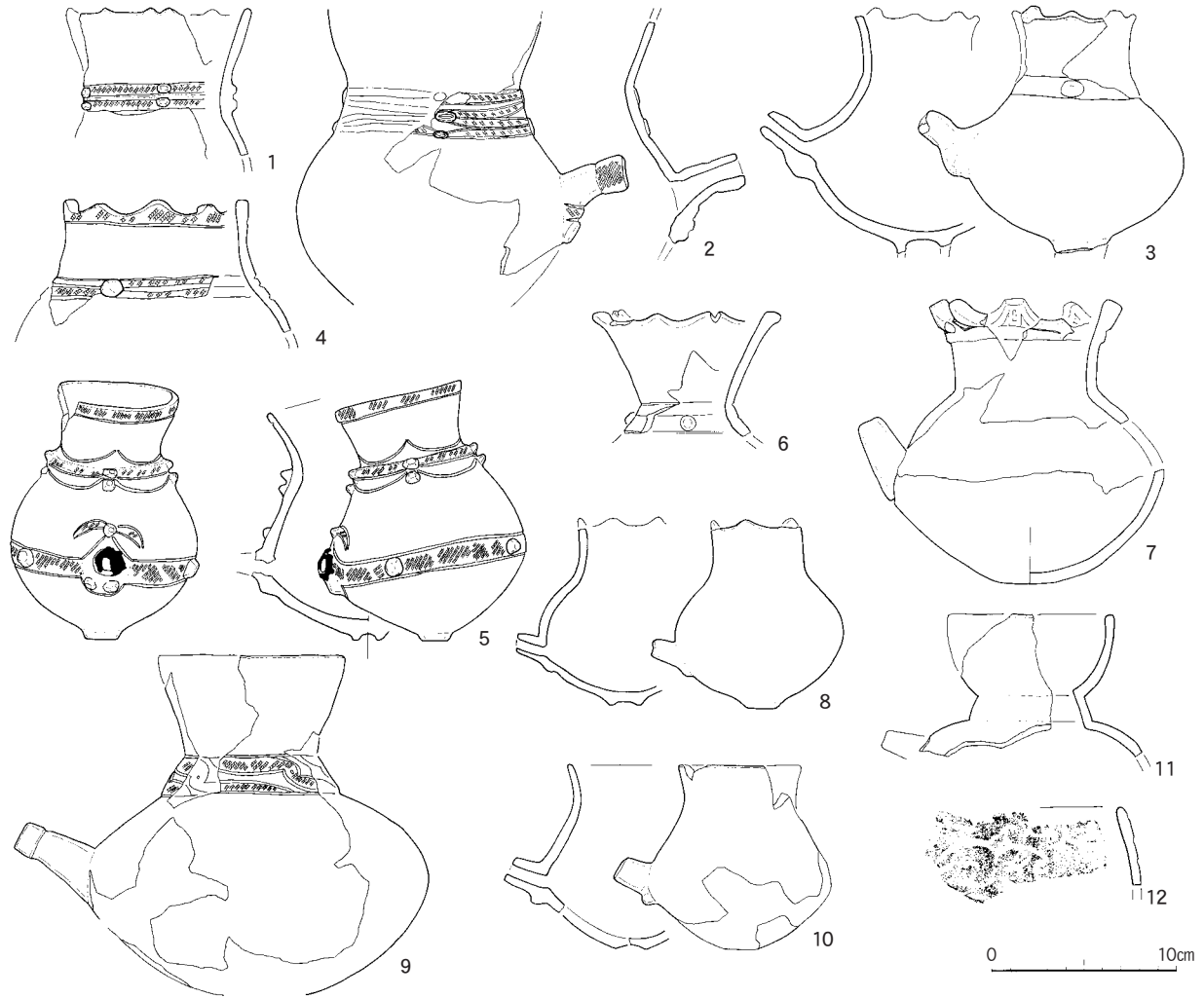
深鉢類と皿類は入組縄文帯が主体文様のものである。大洞C1式と考えられる。

3類 晩期後半の土器（図6-20）

平行沈線文が主体文様のものである。大洞A式と考えられる。

人面・獣面付土器（図10-1・2）

2点出土している。1は浅鉢と思われる、目鼻口を粘土紐の貼付けによって表現し、眉は縄文を施文している。2も鉢型土器に粘土紐と沈線によって目鼻を小突起で耳を表現し、動物のようにも見える。いずれも後期後半と思われる。

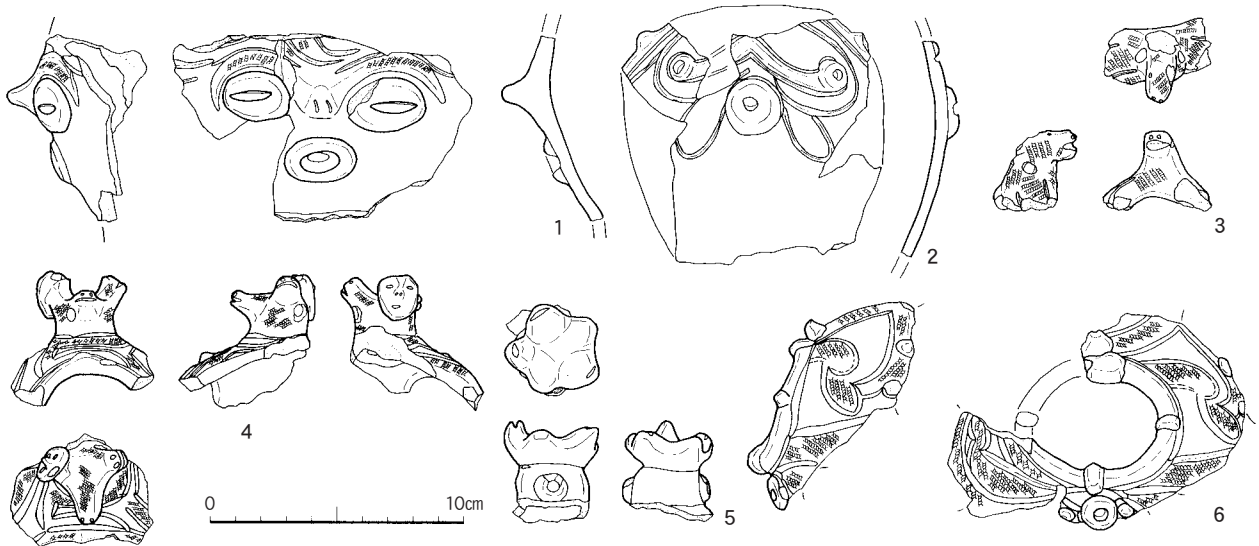


図版番号	出土層位	器種	部位	外面文様	内面調整	分類	備考
1	NJ-180 I層	壺? 注口土器?	口縁部	粘土瘤貼付、沈線、LR縄文	ミガキ	IV-3	
2	C区トレンチ01 III層	注口土器	胸部	沈線、LR縄文	ミガキ	IV-3	
3	NJ-180 I層	注口土器	完形	粘土瘤貼付	ミガキ	IV-3	
4	ND-167 III層	壺? 注口土器?	口縁部	粘土瘤貼付、沈線、LR縄文	ミガキ	IV-3	
5	NJ-180 I層	注口土器	完形	沈線、LR縄文	ミガキ	IV-3	注口接合部分にアスファルト付着
6	C区トレンチ01 III層	注口土器	口縁部	無文	ミガキ	IV-3	
7	C区トレンチ01 III層	注口土器	図上 復元	粘土瘤貼付、沈線	ミガキ	IV-3	
8	NJ-180 I層	注口土器	完形	無文	ミガキ	IV-3	
9	ND-167 III層	注口土器	略完形	沈線、LR縄文	ミガキ	IV-3	注口接合部分にアスファルト付着
10	C区トレンチ01 III層	注口土器	完形	無文	ミガキ	V-1	
11	NJ-180 III層	注口土器	口縁部 ~胸部	無文	ミガキ	V-1	
12	C区トレンチ01 III層	注口土器	口縁部	突起、沈線	ミガキ	V-1	

図9 遺構外出土器

香炉型土器 (図10-3~6)

香炉型土器は4点出土している。4は釣り手部分には貫通孔がみられ、人面とイノシシかクマと思われる獣面2面が付けられている。3も釣り手部分に貫通孔がみられ、動物の耳の部分は欠損しているが鼻と口が作出されている。5は上部が花卉のように五等分され、そのうち先端の3カ所に口のような切れ込みが入れられている。6は入組縄文帯と窓部分の隆帯に粘土瘤が貼付けられている。



図版番号	出土層位	器種	部位	外面文様	内面調整	備考
1	ND-167 Ⅲ層	浅鉢	胸部	RL縄文、沈線、粘土紐貼付	ミガキ	
2	ND-170 Ⅲ層	鉢?	胸部	沈線、粘土紐貼付	ミガキ	
3	NH-180 Ⅱ層上面	香炉	釣手部分	沈線、LR縄文	-	貫通孔
4	ND-168 Ⅲ層	香炉	釣手部分	沈線、RL縄文	-	貫通孔
5	ND-173 Ⅲ層	香炉?	釣手部分		-	貫通孔
6	ND-173 Ⅲ層	香炉	胸部?	沈線、RL縄文	ミガキ	

図10 遺構外出土土器

川原平(4)遺跡 (図11-1~13)

当該地区で出土した縄文土器は、中期から後期にかけて段ボール箱で4箱分である。

第Ⅲ群 縄文時代中期の土器 (図11-1~7)

第Ⅲ群では、中期後半の円筒上層式が比較的多く出土し、図11-1~5、7は円筒上層d式とみられる。

第Ⅳ群 縄文時代後期の土器 (図11-8~11)

1類 後期初頭から前葉の土器

8は網目状、9は沈線文でいずれも後期前半の十腰内I式土器とみられる。

3類 後期後葉の土器

10は、口縁部上半小の文様帯に粘土瘤が貼付けられ、後期後半の十腰内IV式土器とみられる。

大川添(2)遺跡 (図11-14~16)

当該地区で出土した縄文土器の破片数は7点である。

14は十腰内I式期、15は工字文と思われる平行沈線の土器で大洞A式とみられる。

(中嶋)



図版番号	出土層位	器種	部位	外面文様	内面調整	分類	備考
1	PF-159 I層	深鉢	胴部	粘土瘤貼付、RL縄文	ミガキ	Ⅲ	補修孔
2	PJ-159 I層	深鉢	口縁部	粘土瘤貼付、RL縄文	ミガキ	Ⅲ	
3	PJ-159 I層	深鉢	口縁部	粘土瘤貼付、沈線、LR縄文	ミガキ	Ⅲ	
4	PJ-159 I層	深鉢	口縁部	粘土瘤貼付、沈線、LR縄文	ミガキ	Ⅲ	
5	PJ-159 I層	深鉢	胴部	RL縄文	ミガキ	Ⅲ	
6	NU-101 I層	深鉢	口縁部 ~底部	LR縄文	ミガキ	Ⅲ	
7	PJ-158 I層	深鉢	口縁部	粘土紐貼付、RL縄文	ミガキ	Ⅲ	
8	PX-95 I層	深鉢	胴部	網目状 (L単軸絡糸体第5類)	ミガキ	IV-1	
9	PL-157 I層	深鉢	胴部	沈線	ミガキ	IV-1	
10	PL-157 I層	深鉢	口縁部	粘土瘤貼付、沈線、RL縄文	ミガキ	IV-3	
11	PJ-159 I層	深鉢	口縁部	櫛歯状沈線 (条痕?)	ミガキ	IV-1	
12	PJ-159 I層	深鉢	底部	網代痕?	ミガキ	IV	
13	PX-94 I層	深鉢	底部	網代痕	ミガキ	IV	
14	PJ-159 I層	深鉢	口縁部	粘土紐貼付、沈線、LR縄文	ミガキ	IV	
15	MQ-259 II層	鉢	口縁部	沈線	ミガキ	V-3	
16	トレンチ03 I層	深鉢	胴部	LR縄文	ミガキ	V	

図11 遺構外出土土器

2 石器

川原平(1)遺跡

石器の多くは、C区トレンチ01で出土しており、D区からは破損した砥石が1点出土したのみである(48ページ表1)。注目されるのは珪質頁岩の剥片が多量に出土したことで、赤色顔料の生産に関連する遺物が出土したことである。石器の帰属時期は、土器の様相からみて、後期後半から晩期前半である。

剥片石器

331点が出土した。内訳は石鏃95点(28%)、石槍3点(1%)、石錐26点(8%)、石匙59点(18%)、楔形石器5点(2%)、不定形石器143点(43%)である。石材のほとんどは珪質頁岩で、粗く打ち割られた多量の剥片が出土しており、当遺跡で剥片石器が盛んに製作されたと考えられる。

石鏃(図12-1～9)

定形的な石器では最も多い95点が出土した。すべて珪質頁岩製である。形態別では凹基無茎(1)が1点、尖基(2・3)が2点、凸基有茎(4～9)が82点、破損により不明のものが7点、未成品が3点ある。破損品は53点(55.8%)で、茎部を欠くものが多い。22点の茎部にアスファルトが付着している。未成品を除いた完形品の重量をみると、1.0g未満のもの12点、1.0g～1.5g未満のもの13点、1.5g～2.0g未満のもの7点、2.0g以上のもの7点である。

石槍(図12-10)

3点すべて珪質頁岩製で、基部は円基で無茎。長さ5cm、重量10g程度の小型品である。

石錐(図12-11～13)

26点のうち2点が玉髓製、24点が珪質頁岩製である。形態別にみると、摘みのない棒状のもの(11)が8点、摘みのあるもの(12)が13点、剥片の先端部を加工したもの(13)が2点、破損して形状不明のもの2点である。破損品は全体で9点ある。

石匙(図12-14～16・図13-1～6)

59点出土し、大型品1点(図13-5)が頁岩製で、ほかは珪質頁岩製である。形態別にみると、21点が縦型(図12-14～16・図13-1)、29点が横型(図13-2～5)、破損して不明のものが3点、摘み部を作出したのみで刃部調整のない未成品が6点(図13-6 縦型・横型各3点)ある。破損品は全体で21点あり、刃部先端を欠くものが多い。6点の摘み部にアスファルトが付着している。

楔形石器(図13-7・8)

5点すべて珪質頁岩製である。7は角度を変えて二方向から加撃されており、8は剥片を薄くするために両極技法が用いられた可能性がある。

不定形石器(図13-9～12)

定形的な石器以外で、二次調整の認められるものを一括した。143点のうち、玉髓製が1点あるほ

かは珪質頁岩製である。連続した二次調整があるスクレイパー類（9・10・12 I類）が63点、部分的な二次調整のある剥片（11 II類）が56点、定形的な石器の破損品や未成品の可能性のあるもの（III類）が24点ある。スクレイパー類は縦長の剥片を素材とした、削器様のものが多い。

剥片・碎片（図13-13 写真12）

剥片・碎片類は出土点数リストには含めていない。また、相当数に微細な剥離が認められる。

黒曜石の剥片は55点（140.3g）出土している。気泡を多く含み、青森県つがる市出来島産と考えられるものが52点（136.9g）、漆黒色の良質な石材で、青森県深浦町に産する一群と考えられるものが3点（3.4g）ある。原礫面の残る部分から考えて、いずれも小さな原石から粗く剥離されており、明瞭な二次調整も認められないため、定形的な石器を制作する作業で得られた剥片とは考えにくい。

珪質頁岩の剥片・碎片は、C区トレンチ01から69.9kg、グリッド部から27.6kg、D区トレンチ01から0.1kg出土した。総点数は概算で1万点を超える。出土した剥片石器の総重量3.1kgに対し、膨大な出土量である。加撃痕のない、長径15cmほどの原礫も数点採取している。

使用痕はみられないが、アスファルトが付着している剥片（図13-13）が5点ある。

礫石器

磨製石斧（図14-1～3）

3点出土している。1は扁平な小型品で、整形時の擦痕が残る。2・3は定角式で、刃部に刃こぼれがある。2は稜が明瞭で、面形が隅丸長方形に近い。3は側面の加工が弱く、断面は楕円形である。

敲磨器（図14-4～10・図15-1）

礫石器の約8割を占める。使用痕が複合しているものがあるため、磨石、敲石、凹石とよばれているものを一括した。57点出土しており、2点が破損している。石材の内訳は凝灰岩22点、礫質凝灰岩6点、砂岩8点、凝灰質砂岩8点、礫質砂岩2点、花崗岩5点、礫岩3点、閃緑岩2点、安山岩1点である。使用痕の組み合わせにより、次のように分類した。

I類 使用痕がスリによるもの 20点 球状の礫を用い、全体を機能面とするもの（7）、礫の側面を機能面とするもの（5）、扁平な礫の広い部分を機能面とするもの（15-1）がある。15-1は一部剥落があるものの、当初は機能面全体に赤色顔料が付着していた。

II類 使用痕がスリ+タタキのもの 6点 6・9の2点を掲載した。

III類 使用痕がスリ+凹みのもの 1点

IV類 使用痕がスリ+タタキ+凹みのもの 1点

V類 使用痕がタタキのもの 23点 礫表面のごく狭い範囲に軽度のタタキ痕のつくものが多く、8は両側面を機能面としている。4は機能面が凹面を呈し、広い範囲にあばた状のタタキ痕がつく。また、球状の礫表面全体にタタキ痕のつくものがある。

VI類 使用痕がタタキ+凹みのもの 4点 10は礫の端部にタタキ痕、平たい面に凹みがある。

VII類 使用痕が凹みによるもの 2点

砥石 (図15-3・4)

2点出土しており、ともに破損している。3は凝灰岩製で機能面は平滑である。4は凝灰質砂岩製で、幅5mm程度、断面形はU字に近い筋状の使用痕が認められる。

石皿 (図15-5・6)

広く平滑な作業面を有し、使用痕が主にスリによる大型礫石器を石皿とした。4点出土しており、1点が安山岩製、3点が凝灰岩製である。側縁のあるもの(5・6)が3点、側縁のないもの(2)が1点ある。2は安山岩の板状礫を素材としている。赤色顔料が付着しており、磨石(図15-1)とセットで、赤鉄鉱を粉末にするために用いられた遺物である。

台石

部分的に作業面のみられる大礫で、凝灰岩製のもの4点が出土している。使用痕がスリによるものが2点、タタキによるものが2点ある。

川原平(4)遺跡

段丘の高い部分にあるA・B区と低い部分のE区とに分かれる。A区では後期、B区では後期から晩期、E区では中期の土器が出土しており、石器の帰属時期も同様と考えられる。各区の出土数は表1(48ページ)に示し、以下は器種ごとに述べる。また、図17には球状石製品(3)を含めた。

剥片石器

異形石器以外はすべて珪質頁岩製である。全体で28点出土した。

石鏃 (図16-1～6)

7点出土した。凹基無茎のもの(1)1点、尖基のもの(2)1点、凸基有茎のもの(3～6)5点である。破損品は3点ある。6の茎部にはアスファルトが付着している。

石槍 (図16-7・8)

E区から2点が出土した。いずれも基部は尖基で無茎。川原平(1)遺跡のものより大型である。

石匙 (図16-9～13)

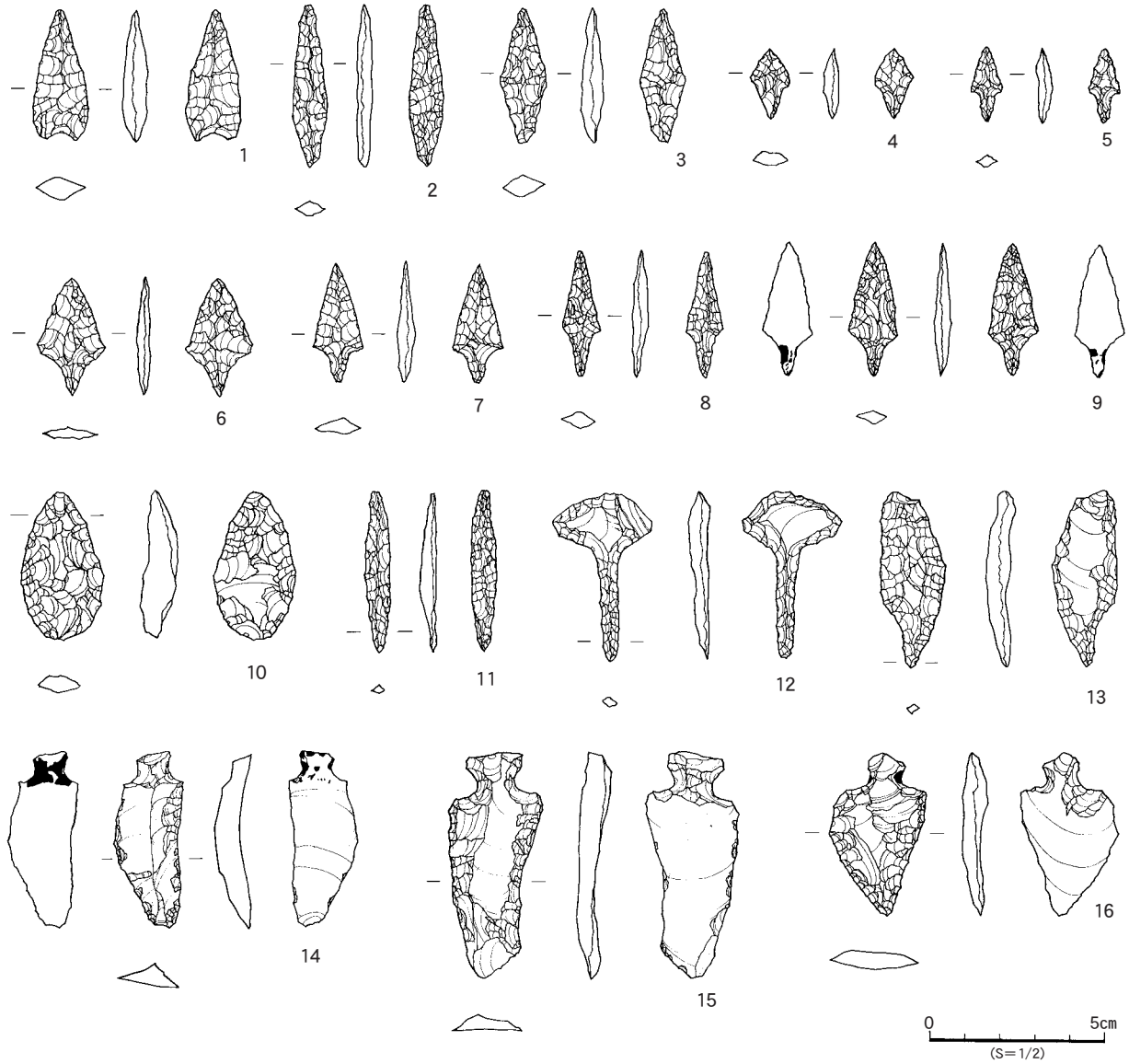
7点出土した。縦型5点(9～11)、横型2点(12・13)で、13は刃部調整のない未成品である。

異形石器 (図16-15)

流紋岩製のもの1点が出土した。団扇形の小型品で、刃部が鈍く、実用品ではないと思われる。

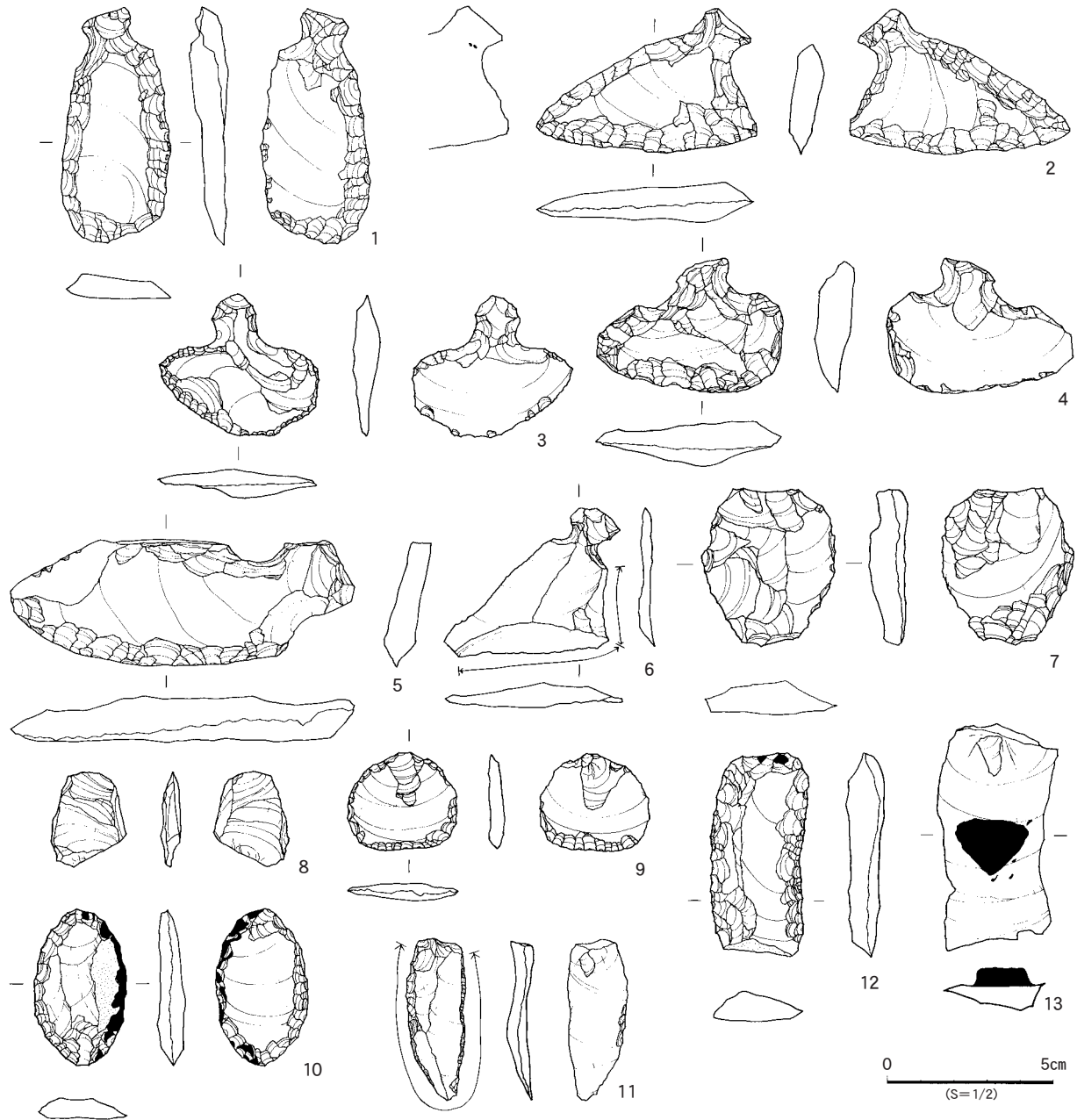
不定形石器 (図16-14)

11点出土した。内訳はI類5点、II類3点、III類3点である(分類は川原平(1)遺跡と同じ)。



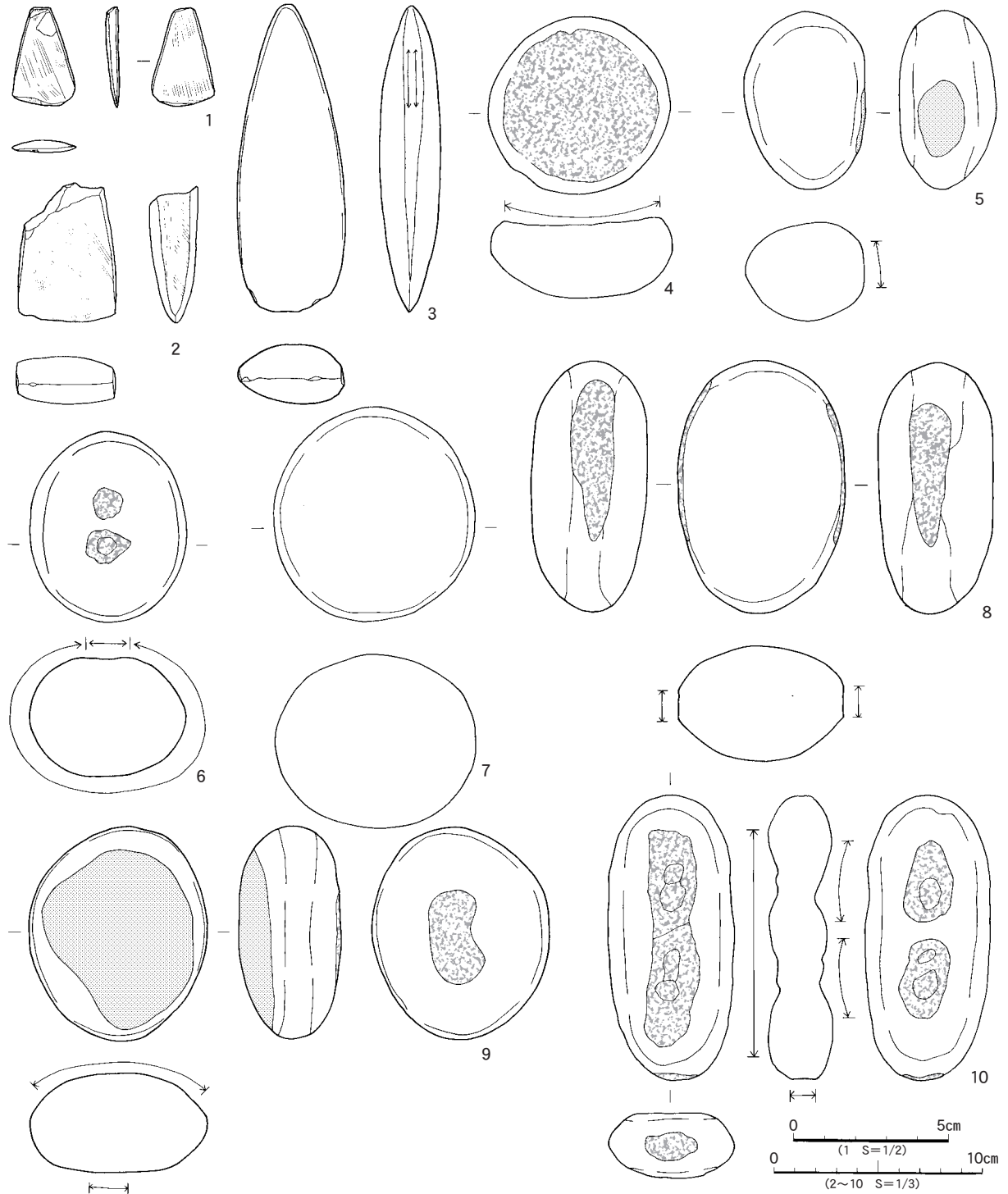
図版番号	器種	出土地点 層位	計測値(cm)			重量(g)	石質	備考
			長さ	幅	厚さ			
1	石鏃	C区トレンチ01 Ⅲ層	3.8	1.6	0.8	3.4	珩質頁岩	凹基無茎
2	石鏃	ND-166 Ⅲ層	4.7	1.0	0.5	1.7	珩質頁岩	尖基
3	石鏃	ND-169 Ⅲ層	3.9	1.4	0.7	2.3	珩質頁岩	尖基
4	石鏃	ND-168 Ⅲ層	2.0	1.2	0.5	0.7	珩質頁岩	凸基有茎
5	石鏃	ND-176 Ⅰ層	2.2	0.9	0.5	0.5	珩質頁岩	凸基有茎
6	石鏃	ND-173 Ⅲ層	3.4	2.0	0.4	1.5	珩質頁岩	凸基有茎
7	石鏃	ND-167 Ⅲ層	3.4	1.5	0.5	1.4	珩質頁岩	凸基有茎
8	石鏃	ND-176 Ⅱ層	3.6	1.1	0.5	1.1	珩質頁岩	凸基有茎
9	石鏃	ND-173 Ⅲ層	3.9	1.5	0.5	1.7	珩質頁岩	凸基有茎 茎部アスファルト付着
10	石槍	NH+180 Ⅰ層	4.3	2.4	1.1	9.0	珩質頁岩	
11	石錐	ND-176 Ⅱ層	4.6	0.7	0.6	1.3	珩質頁岩	つまみなし
12	石錐	ND-176 Ⅱ層	4.8	2.8	0.6	3.7	珩質頁岩	つまみあり
13	石錐	C区トレンチ01 Ⅲ層	5.1	1.9	0.9	5.3	珩質頁岩	剥片先端部加工
14	石匙	ND-176 Ⅱ層	5.1	2.0	1.1	6.0	珩質頁岩	縦型 つまみ部アスファルト付着
15	石匙	ND-174 Ⅲ層	6.5	2.7	0.8	10.8	珩質頁岩	縦型
16	石匙	C区トレンチ01 Ⅲ層	4.7	2.8	0.8	6.1	珩質頁岩	縦型 つまみ部アスファルト付着

図12 川原平(1)遺跡出土石器(1)



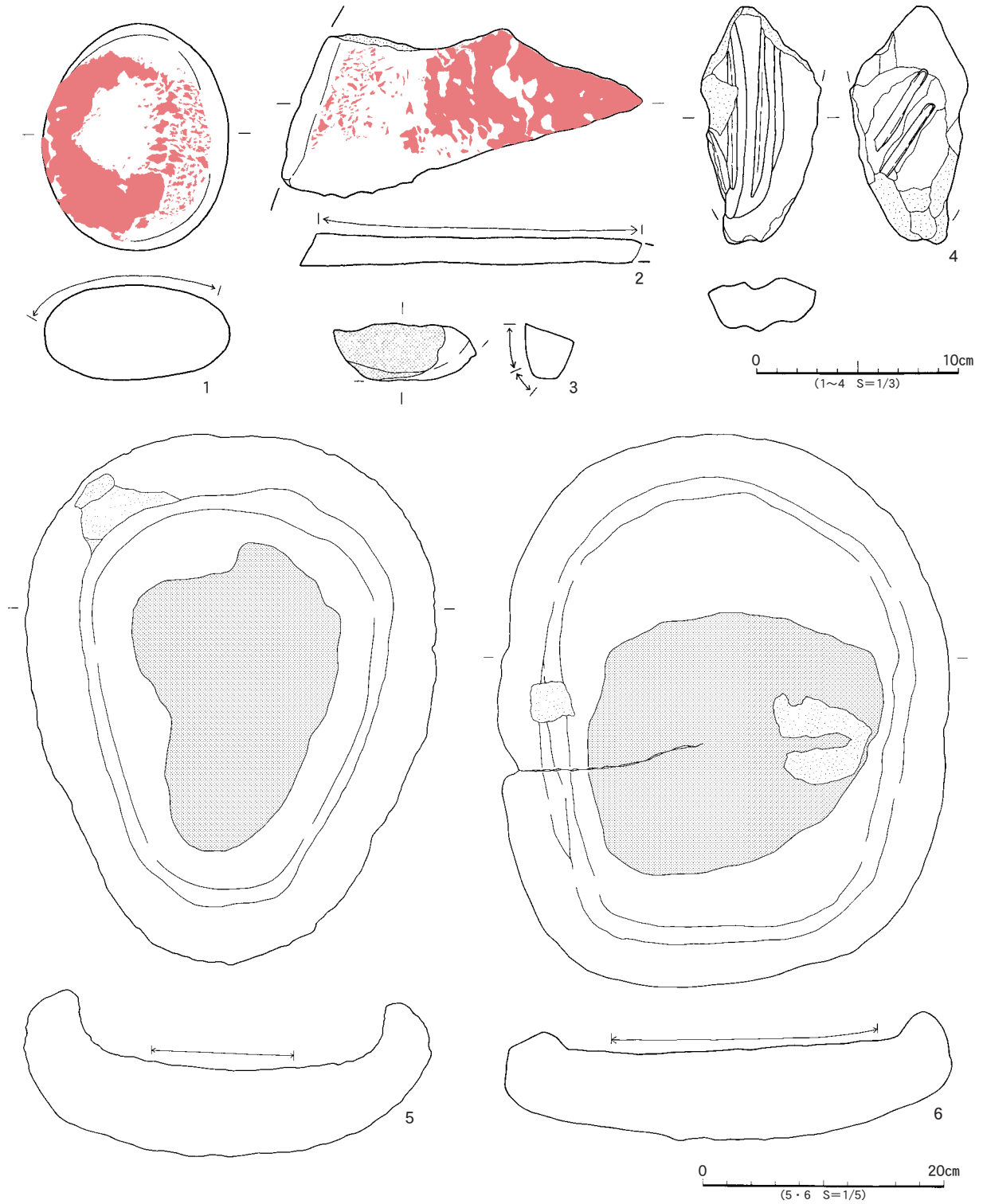
図版番号	器種	出土地点 層位	計測値 (cm)			重量 (g)	石質	備考
			長さ	幅	厚さ			
1	石匙	ND-174 Ⅲ層	7.2	3.3	1.2	23.7	珪質頁岩	縦型
2	石匙	ND-165 Ⅲ層	4.4	6.6	1.2	25.1	珪質頁岩	横型 つまみ部アスファルト付着
3	石匙	ND-174 Ⅲ層	4.3	4.9	0.9	11.7	珪質頁岩	縦型
4	石匙	ND-171 Ⅲ層	4.1	5.6	1.2	17.9	珪質頁岩	横型
5	石匙	ND-178 I層	10.4	3.8	1.5	50.9	頁岩	横型 大型品 風化激しい
6	石匙	ND-173 Ⅲ層	4.5	5.4	0.8	7.1	珪質頁岩	横型 未完成? 矢印範囲に微細な剥離
7	楔形石器	ND-172 Ⅲ層	4.8	4.1	1.2	21.7	珪質頁岩	
8	楔形石器	ND-167 Ⅲ層	2.9	2.3	0.6	3.5	珪質頁岩	
9	不定形	ND-167 Ⅲ層	2.9	3.3	0.5	6.5	珪質頁岩	I類 搔器様
10	不定形	C区トレンチ01 Ⅲ層	4.8	1.8	0.8	10.9	珪質頁岩	I類 削器様 刃部アスファルト付着
11	不定形	ND-165 Ⅲ層	4.9	1.9	0.8	5.7	珪質頁岩	II類 矢印範囲に微細な剥離
12	不定形	ND-167 Ⅲ層	6.2	3.1	1.2	22.6	珪質頁岩	I類 削器様 端部アスファルト付着
13	剥片	C区トレンチ01 Ⅲ層	6.9	3.7	1.3	23.7	珪質頁岩	アスファルト付着 縁の一部に微細な剥離

図13 川原平(1)遺跡出土石器(2)



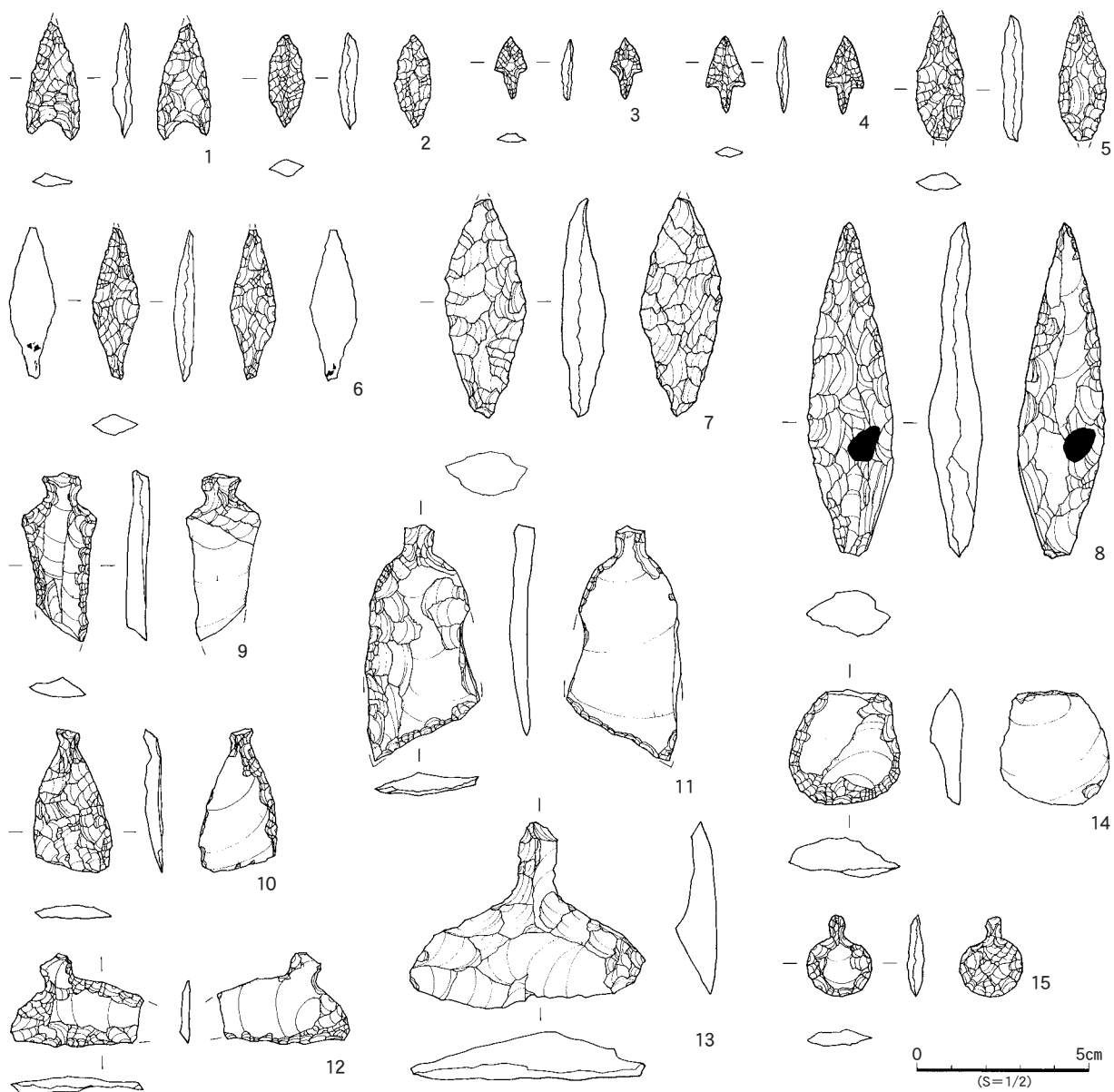
図版番号	器種	出土地点 層位	計測値(cm)			重量(g)	石質	備考
			長さ	幅	厚さ			
1	磨製石斧	C区トレンチ01 Ⅲ層	3.1	2.1	0.5	3.1	粘板岩	小型品
2	磨製石斧	ND-165 Ⅲ層	(6.6)	4.6	2.4	(104.9)	流紋岩	定角式 色調：灰白色 蛇紋岩の可能性がある
3	磨製石斧	NJ-180 Ⅰ層	15.0	5.3	3.0	334.6	花崗岩	定角式
4	敲磨器	ND-169 Ⅲ層	8.8	8.5	3.8	375.3	凝灰岩	V類 1面使用
5	敲磨器	ND-178 Ⅰ層	8.6	5.9	4.7	240.1	凝灰岩	I類 1面使用
6	敲磨器	NJ-180 Ⅰ層	9.2	7.1	5.9	460.5	礫質砂岩	II類 全面スリ 部分的にタタキ
7	敲磨器	ND-171 Ⅲ層	10.3	9.7	8.4	1113.4	花崗岩	I類 全面スリ
8	敲磨器	NJ-180 Ⅰ層	12.6	8.0	5.6	792.0	凝灰質砂岩	V類 2面使用
9	敲磨器	ND-167 Ⅲ層	10.3	8.5	4.9	595.5	凝灰岩	II類 2面使用
10	敲磨器	ND-166 Ⅲ層	13.7	6.1	3.1	292.4	凝灰岩	VI類 端部タタキ 2面に凹み

図14 川原平(1)遺跡出土石器(3)



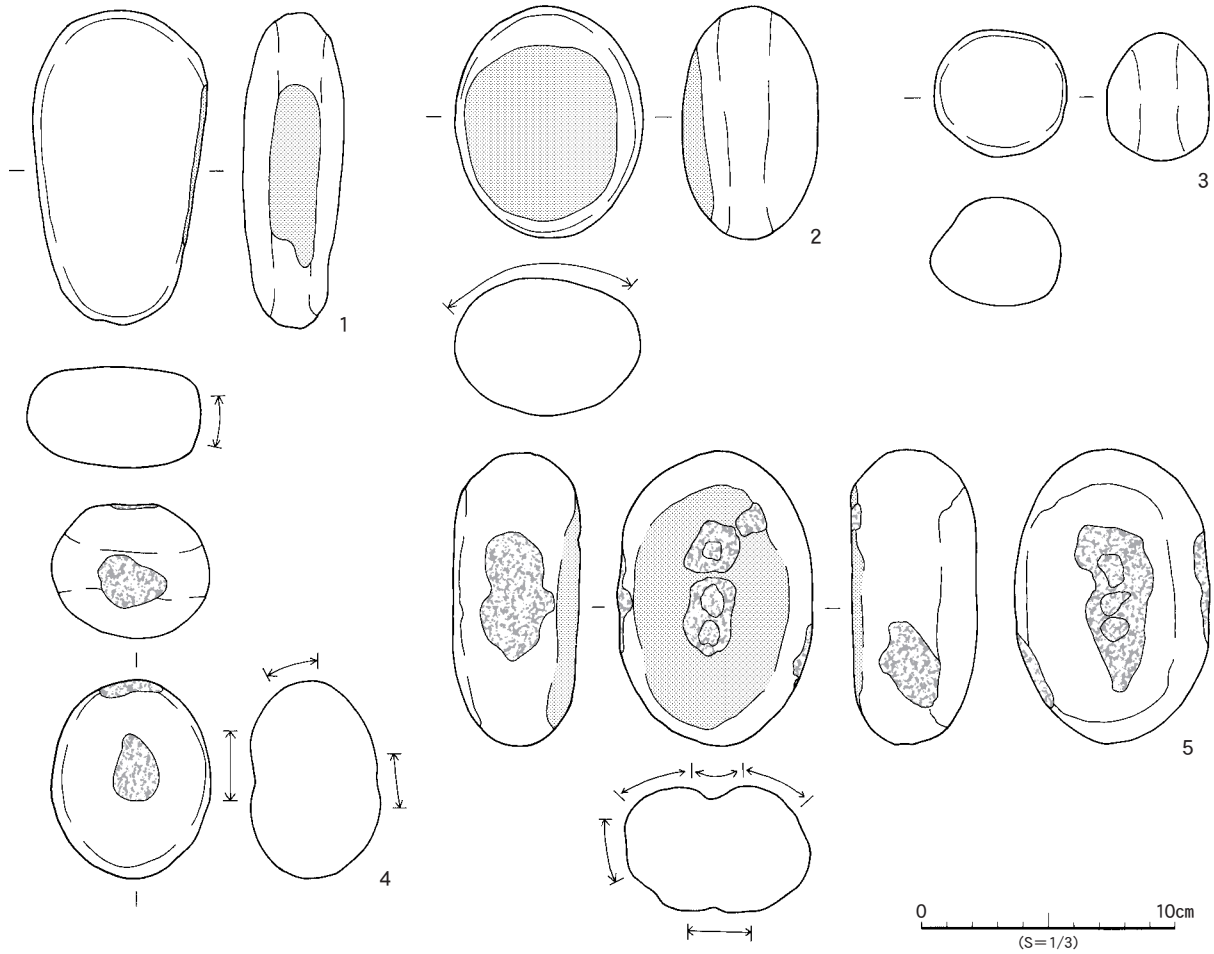
図版番号	器種	出土地点 層位	計測値 (cm)			重量 (g)	石質	備考
			長さ	幅	厚さ			
1	敲磨器	C区トレンチ01 Ⅲ層	11.3	9.3	4.8	572.9	凝灰岩	I類 1面使用 赤色顔料付着
2	石皿	C区トレンチ01 Ⅲ層	(8.5)	(17.8)	1.7	(273.1)	安山岩	赤色顔料付着 板状礫
3	砥石	D区トレンチ01 Ⅱ層	(7.0)	(2.9)	(2.4)	(42.1)	凝灰岩	破損 被熱
4	砥石	ND-163 Ⅲ層	(11.8)	(5.9)	3.2	(126.6)	凝灰質砂岩	筋砥石 破損
5	石皿	ND-166 Ⅲ層	44.2	34.1	13.3	14550	礫質凝灰岩	有縁
6	石皿	C区トレンチ01 Ⅲ層	45.8	37.4	10.8	19200	礫質凝灰岩	有縁

図15 川原平(1)遺跡出土石器(4)



図版番号	器種	地区	出土地点	層位	計測値 (cm)			重量 (g)	石質	備考
					長さ	幅	厚さ			
1	石鏃	E	PD-157	I層	(3.4)	1.5	0.6	(2.0)	珪質頁岩	凹基無茎 先端部欠損
2	石鏃	A	PK-85	I層	2.8	1.1	0.6	1.4	珪質頁岩	尖基
3	石鏃	B	PC-101	I層	1.8	1.0	0.4	0.3	珪質頁岩	凸基有茎
4	石鏃	E	PN-159	I層	2.2	1.2	0.4	0.4	珪質頁岩	凸基有茎
5	石鏃	E	PJ-157	I層	(3.7)	1.4	0.7	(3.7)	珪質頁岩	凸基有茎 茎部欠損
6	石鏃	E	PL-157	I層	(4.4)	1.4	0.6	(3.0)	珪質頁岩	凸基有茎 先端部欠損 茎部アスファルト付着
7	石槍	E	PJ-157	I層	(6.4)	2.4	1.3	14.4	珪質頁岩	
8	石槍	E	PJ-157	I層	9.8	2.5	1.3	23.9	珪質頁岩	アスファルト付着
9	石匙	E	PJ-157	I層	(4.9)	2.2	0.7	(5.1)	珪質頁岩	縦型 欠損
10	石匙	E	PJ-157	I層	4.2	2.3	0.6	4.7	珪質頁岩	縦型
11	石匙	E	PZ-135	I層	6.9	(3.3)	0.7	(12.9)	珪質頁岩	縦型 欠損
12	石匙	E	PN-161	I層	2.7	(3.9)	0.6	(4.0)	珪質頁岩	欠損 縦長剥片を横にして製作
13	石匙	B	OA-101	I層	5.4	6.8	1.4	25.8	珪質頁岩	刃部調整なし 未完成
14	不定形	E	PV-145	I層	3.3	3.3	1.1	12.2	珪質頁岩	I類 搔器様
15	異形	A	PN-81	I層	2.4	1.9	0.5	1.7	流紋岩	石匙模造品?

図16 川原平(4)遺跡出土石器(1)



図版番号	器種	地区	出土地点	層位	計測値 (cm)			重量 (g)	石質	備考
					長さ	幅	厚さ			
1	敲磨器	B	PM-101	I層	12.5	7.0	4.0	448.6	凝灰岩	I類 1面使用
2	敲磨器	A	PX-89	I層	9.1	7.4	5.4	530.1	砂岩	I類 1面使用
3	球状	A	PX-97	I層	5.0	5.2	4.2	90.0	玄武岩	ミガキに近い使用痕
4	敲磨器	A	PX-97	I層	7.8	6.3	5.2	315.7	凝灰質砂岩	VI類 1面にタタキ 2面に凹み
5	敲磨器	E	PL-157	I層	11.6	7.7	5.0	500.0	凝灰岩	IV類 1面にスリ 2面にタタキ 2面に凹み

図17 川原平(4)遺跡出土石器(2)

剥片

川原平(1)遺跡と同様、剥片石器の点数には含めていない。

青森県つがる市出来島産と思われる黒曜石の剥片1点(3.3g)がA区から出土している。

珪質頁岩の剥片は、A区から1.1kg、B区から1.1kg、E区から7.6kg出土している。川原平(4)遺跡の剥片石器総重量は0.27kgであるため、川原平(1)遺跡と同様に剥片の出土量は多いといえる。

礫石器

敲磨器 (図17-1・2・4・5)

全体で10点出土した。内訳はI類が4点(1・2)、II類が1点、IV類が1点(5)、V類が3点、VI類が1点(4)である(分類は川原平(1)遺跡と同じ)。凝灰岩と砂岩が主に用いられる。

(岡本)

3 土製品 (図18・19)

縄文時代の土製品26点が出土している。器種ごとに分類してその特徴を述べる。

土偶 (図18)

出土した土偶は7点で、すべて破損している。1は中空土偶の頭部と考えられ、目の周辺と上の部分に赤色顔料が塗られ、頭頂部にはアスファルトが付着している。3は頭部破片で、髪などの貼付部分が剥落しており、目の周辺と一部残存する髪の毛のあたりに赤色顔料が塗られ、右耳の付け根に貫通孔がみられます。また、首の部分にアスファルトが付着している。5は頭部破片で、顔から上の一部に赤色顔料が塗られ、残存する右耳には貫通孔がみられる。7は胴部破片で、背面に新鮮と縄文による文様がみられる。4箱の土偶の破片で、沈線による渦巻文がみられる。2は足部破片で刻目により4本の指が作出されている。6は中空土偶の足部破片で指が作出されている。

耳飾り (図19-1～11)

耳飾りは12点出土した。大きく白形、環状、鼓形に分類できる。1、2ハウス形で両面がやや窪み、片側に細かい円形とげと梅ほど越されている。3、5～11はいずれも環状で、3の宮や厚手で、三叉文系の文様と刻も区が施され、一部であるが赤色顔の塗布が認められる。4は小型の鼓形で全面に赤色顔料が塗布され、花弁様な凹凸と内側に新鮮が1条廻る。

土製垂飾品 (図19-12～14, 17)

4点出土し、いずれも貫通孔がみられる。12は丸玉状で、周囲に浅い抉りを施して花弁状にし、全面に赤色顔料が塗布されている。14は管状で、巻くように沈線が施され、一部であるが赤色顔料の塗布が認められる。13は円盤形で、中央と上下に貫通孔が確認でき、沈線と縄文が施され、一部であるが赤色顔料の塗布が認められる。17は方形で上下に貫通孔が確認でき、片面の四隅が円形に盛上げられ中央に浅い刺突がみられる。

匙形土製品 (図19-15)

匙と柄の部分は欠損しているが残存の部分から匙形と推定される。

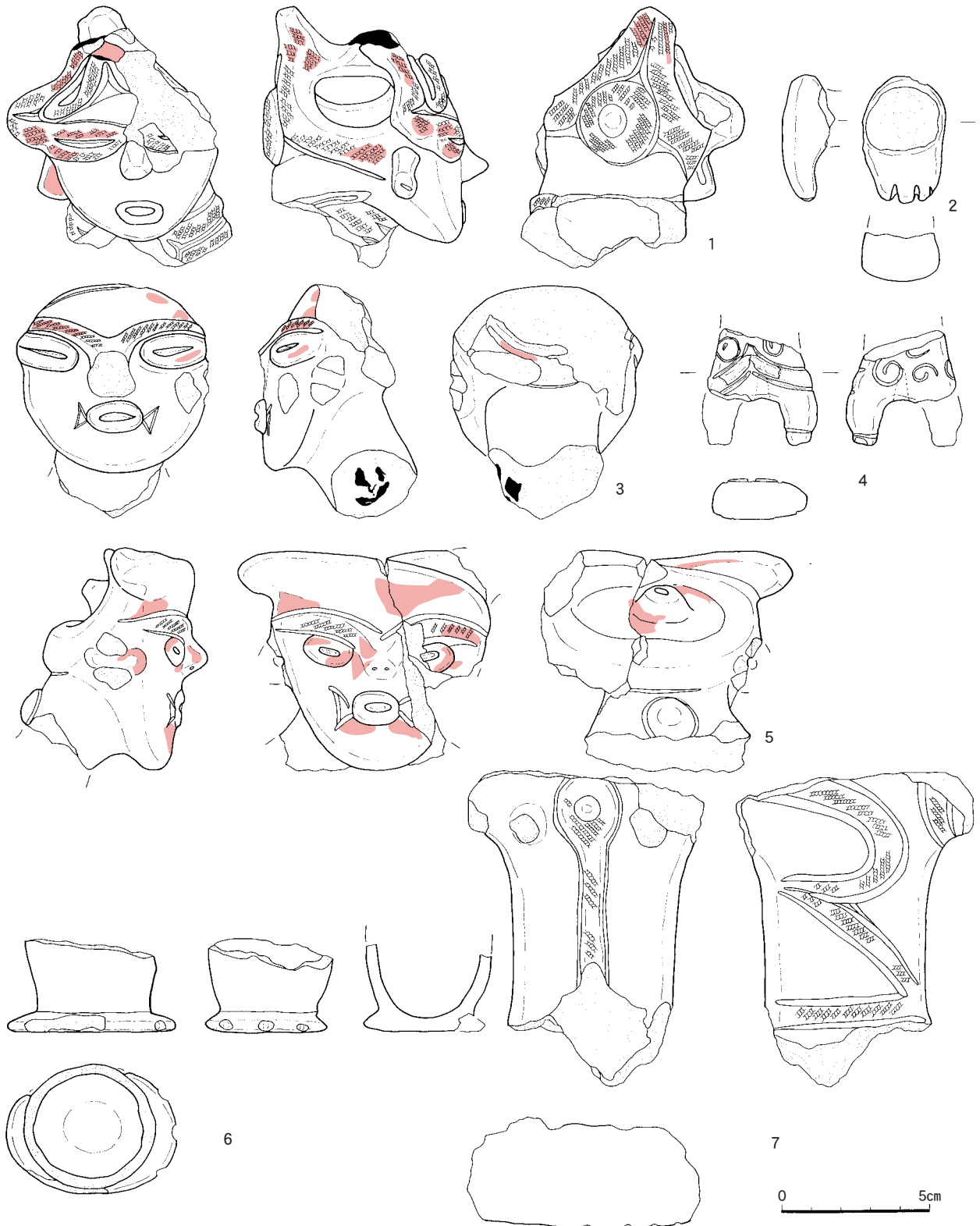
土版 (図19-15)

破片で、表面に弧状、裏面に平行と方形の沈線がみられる。

不明土製品 (図19-16)

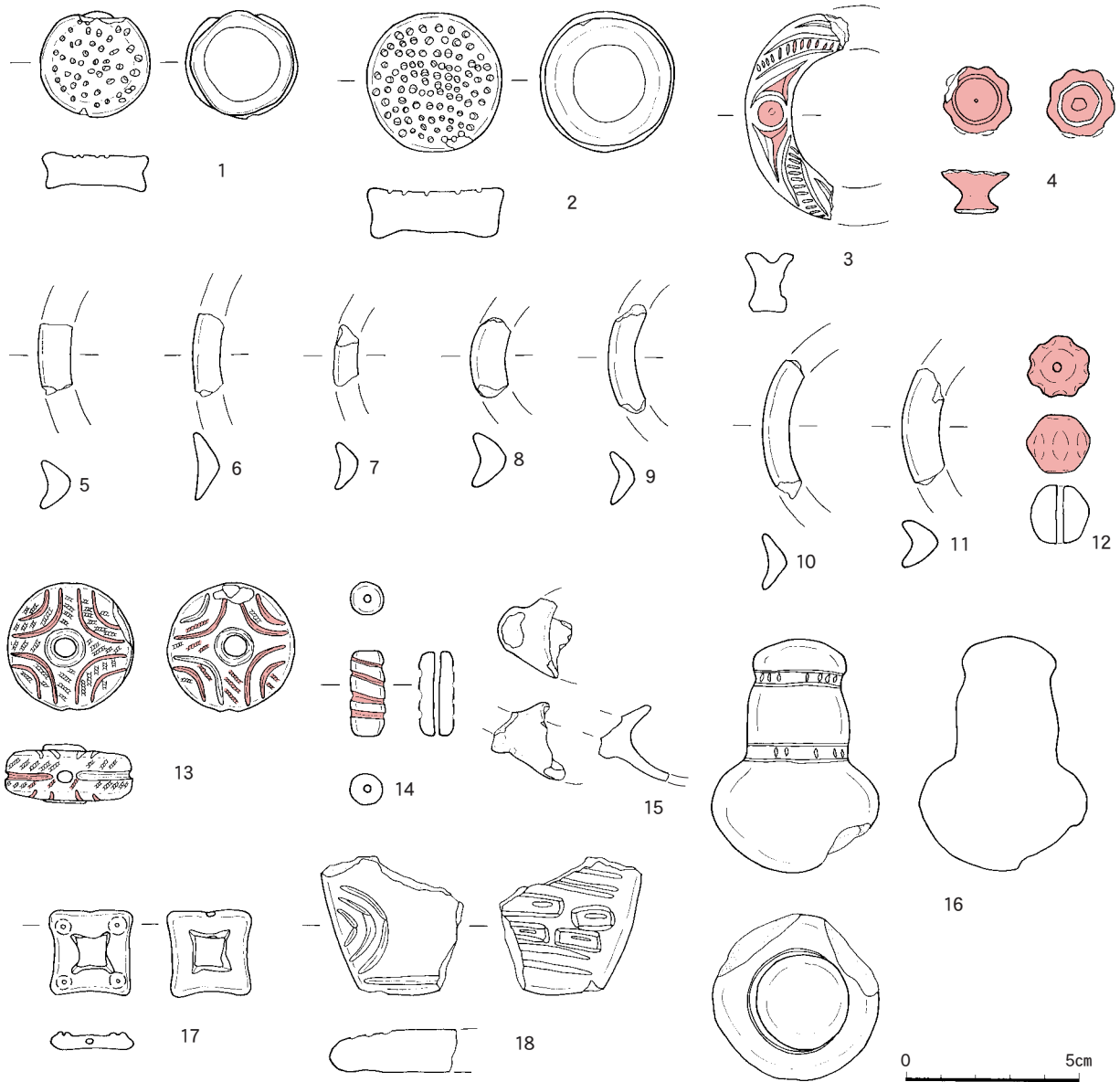
携帯は分銅状で、取手部分には平行沈線と刻目がみられる。

(中嶋)



図版番号	器種	出土層位	計測値 (cm)			重量 (g)	備考
			長さ	幅	高さ		
1	土偶	ND-171 Ⅲ層	—	—	—	181.6	赤色顔料塗布、アスファルト付着
2	土偶	ND-168 Ⅲ層	4.4	—	—	18.3	脚部
3	土偶	ND-165 Ⅲ層	—	—	—	174.5	赤色顔料塗布、アスファルト付着
4	土偶	ND-164 Ⅲ層	—	—	1.4	13.6	
5	土偶	ND-164 Ⅲ層	—	—	—	221.0	赤色顔料塗布
6	土偶	NJ-180 Ⅰ層	—	—	0.4	31.9	脚部
7	土偶	ND-173 Ⅲ層	—	—	3.7	249.7	胸部

図18 遺構外出土土製品



図版番号	器種	出土層位	計測値(cm)			重量(g)	備考
			長さ	幅	厚さ		
1	土製品	ND-168 Ⅲ層	3.2	3.2	1.2	11.2	
2	土製品	ND-168 Ⅲ層	4.1	4.0	1.5	24.8	
3	土製品	ND-166 Ⅲ層	6.4	3.2	1.7	20.4	赤色顔料塗布
4	土製品	ND-170 Ⅲ層	2.0	2.0	1.8	1.7	赤色顔料塗布
5	耳飾	ND-167 Ⅲ層	-	1.0	1.5	2.7	
6	耳飾	NJ-169 Ⅰ層	-	1.0	2.0	3.4	
7	耳飾	ND-167 Ⅲ層	-	0.8	1.4	1.2	
8	耳飾	ND-171 Ⅲ層	-	1.2	1.6	3.2	
9	耳飾	ND-167 Ⅲ層	-	1.2	1.7	2.8	
10	耳飾	ND-169 Ⅲ層	-	1.2	1.7	4.1	
11	耳飾	ND-166 Ⅲ層	-	1.2	1.4	4.0	
12	土玉	ND-173 Ⅲ層	1.7	1.9	0.8	4.4	赤色顔料塗布
13	土製品	ND-166 Ⅲ層	3.7	3.7	1.8	21.2	赤色顔料塗布
14	土製品	ND-175 Ⅲ層	2.5	1.1	0.5	2.3	赤色顔料塗布
15	土製品	ND-174 Ⅲ層	-	-	0.3	10.6	
16	土製品	NJ-180 Ⅰ層	6.9	4.9	-	97.1	
17	土製品	ND-168 Ⅲ層	2.5	2.4	0.6	3.8	
18	土版	ND-166 Ⅲ層	-	-	1.8	19.1	

図19 遺構外出土土製品

4 石製品

川原平(1)遺跡C区からは後期終末から晩期前半に属する多様な石製品が出土しており、下記で主要な遺物についてふれる。

川原平(4)遺跡では球状石製品が4点(図17-3)、赤色顔料の素材剥片が2点出土した。川原平(1)遺跡D区と大川添(2)遺跡からは、石製品が出土していない。

岩版(図20-1・2)

有文のもの1点と無文のもの4点が出土したほか、岩版の石材となりうる未加工の板状礫(砂岩・凝灰岩)が数点出土している。1は楕円形で、表面には正中線と、その両側に三叉文や重畳する半円状の文様が、鋭い工具で何度もなぞるように施されている。裏面には整形時の擦痕が残る。2は隅丸長方形の無文のもので、凝灰岩の板状礫を整形しており、表裏面、周縁に擦痕が残る。

垂飾(図20-3)

2点が出土した。3は板状に整形した凝灰岩の両面から穿孔を施し、表裏面・周縁に擦痕が残る。

石製品(図20-4・5)

加工されたもの(4)3点と、加工されていない奇石の類(5)が3点出土している。6は表面の平滑な小型礫に、十字状に鋭い線刻を施している。5は男根状にも見える自然石である。

円盤状石製品(図20-6・7)

扁平な礫の周縁を打ち欠いたもので、16点出土している。石材は凝灰岩・安山岩・砂岩・閃緑岩・めのうが用いられている。5は、片面の中央部にアスファルトが付着しており、同様のものがもう1点みられる。6の表面にはスス状の黒色物質が付着している。

石剣類(図20-8～16)

13点が出土した。いずれも破損しており、端部の形状は不明である。断面形が円形に近いもの(8～12)6点と、扁平なもの(13～16)7点があるが、明瞭な刃部は作出されていない。石材は、粘板岩や砂岩などの堆積岩で、硬質なものが用いられている。

石棒(図20-17)

1点出土している。直径は5cm程度あったようであるが、全体の形状は不明である。

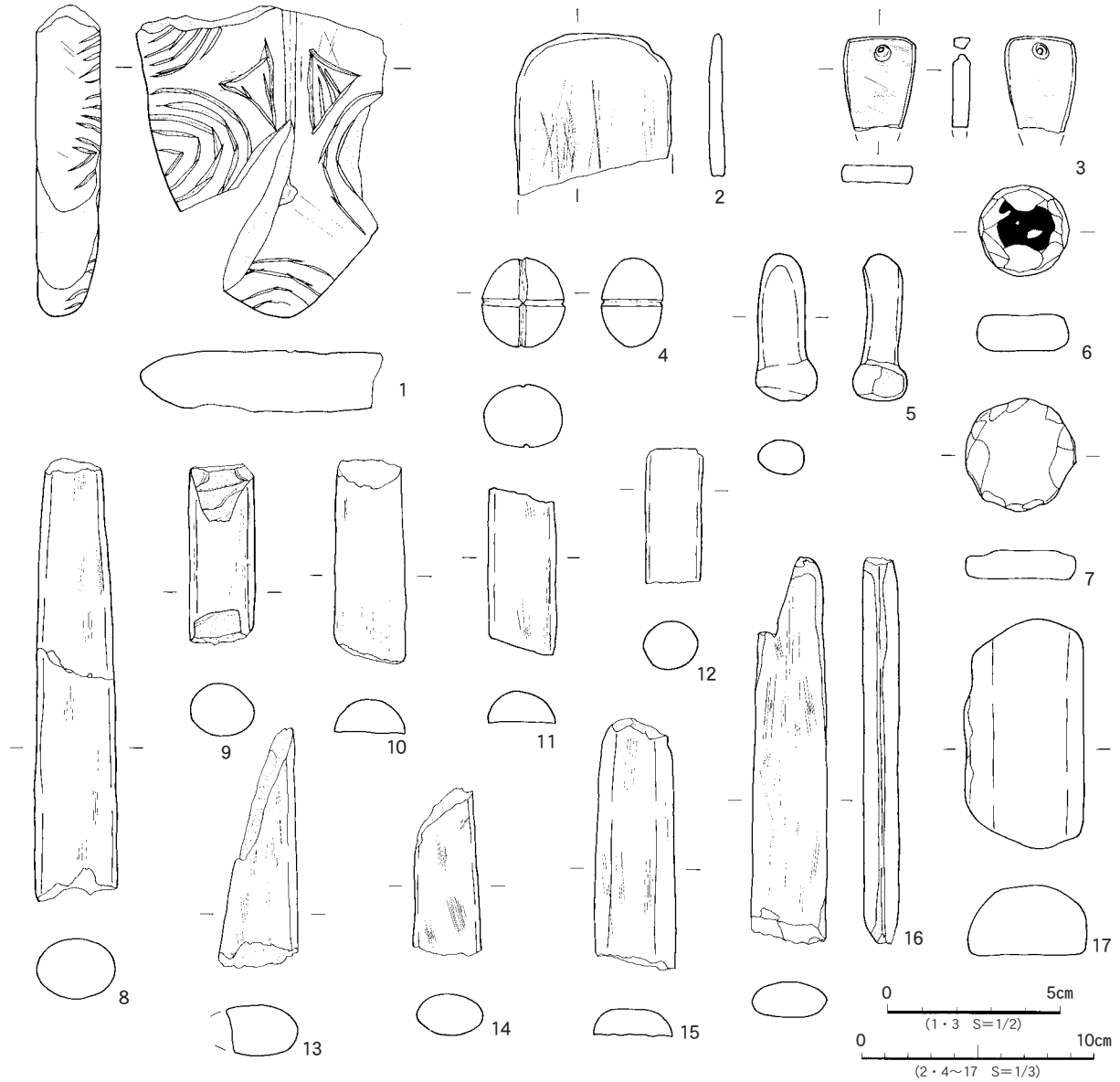
その他

球状石製品が17点出土した。小型礫の表面を磨いたもので、随所に擦痕がみられる。

加工されていない水晶1点(12.0g 写真12)、めのうの剥片1点(190.4g)が出土した。

ベンガラ素材となる赤鉄鉱の原礫1点(1125.3g)・剥片18点(472.6g)が出土した(写真9)。

(岡本)



図版番号	器種	出土層位	計測値(cm)			重量(g)	石質	備考
			長さ	幅	厚さ			
1	岩版	表採	(9.0)	(7.3)	1.9	(118.8)	泥岩	有文
2	岩版	ND-167 Ⅲ層	(7.0)	6.8	0.7	(39.3)	凝灰岩	無文 表裏に擦痕
3	垂飾	ND-173 Ⅲ層	(2.7)	2.1	0.5	(4.3)	凝灰岩	無文 表裏に擦痕
4	石製品	ND-177 Ⅲ層	3.9	3.1	2.7	47.9	凝灰岩	沈線断面は鋭いV字状
5	奇石	ND-165 Ⅲ層	6.4	2.6	2.3	32.4	凝灰岩	加工痕なし
6	円盤状	NJ-180 Ⅰ層	3.9	3.9	1.6	32.9	閃緑岩	周縁打ち欠き アスファルト付着
7	円盤状	C区トレンチ01 Ⅲ層	4.9	4.7	1.4	44.6	凝灰岩	周縁打ち欠き 表面の一部にス状の黒色物付着
8	石剣類	ND-173 Ⅲ層	(19.2)	3.7	2.6	(291.5)	泥岩	断面円形 破損
9	石剣類	C区トレンチ01 Ⅲ層	(7.8)	2.8	(2.3)	(39.0)	粘板岩	断面円形 破損
10	石剣類	ND-176 Ⅰ層	(8.8)	3.2	(1.5)	(57.1)	粘板岩	断面円形 破損
11	石剣類	ND-166 Ⅲ層	(7.2)	2.9	(1.4)	(51.1)	千枚岩	断面円形 破損
12	石剣類	C区トレンチ01 Ⅲ層	(5.8)	2.5	2.1	(55.4)	砂岩	断面円形 破損
13	石剣類	C区トレンチ01 Ⅲ層	(10.3)	3.5	2.3	(94.2)	砂岩	断面偏平 破損
14	石剣類	ND-166 Ⅲ層	(7.1)	2.9	1.8	(58.9)	砂岩	断面偏平 破損
15	石剣類	ND-173 Ⅲ層	(10.9)	3.5	(1.3)	(78.7)	粘板岩	断面偏平 破損
16	石剣類	ND-177 Ⅲ層	(16.8)	3.2	1.6	(132.9)	粘板岩	断面偏平 破損 刃部にあたる部分が被熱
17	石棒	C区トレンチ01 Ⅲ層	(11.6)	5.1	(3.0)	(145.0)	凝灰岩	破損 被熱 風化激しい

図20 川原平(1)遺跡出土石製品

第3章 川原平(1)遺跡出土土器付着物の¹⁴C年代測定

国立歴史民俗博物館・年代測定グループ
(小林謙一¹⁾・宮田佳樹¹⁾・遠部慎¹⁾・松崎浩之²⁾)

1) 国立歴史民俗博物館

2) 東京大学原子力研究総合センター・タンデム加速器研究部門

青森県川原平(1)遺跡出土土器付着物の¹⁴C年代測定を行った。

1 測定試料

試料は、青森県埋蔵文化財センターにおいて、小林が、土器から採取した。AOMB-21~47とした27個体の土器の内外面（両面から採取した場合は、内面はa、外面はbとした）の付着物について採取し、状態がよいと観察された20試料について試料処理したが、結果的に炭素量不足のもの・状況の不良なものもあり、6試料について¹⁴C年代が測定できた。

測定できた試料については、一覧を表1に付す。

2 試料の処理およびAMS測定

年代測定用試料については、以下の手順で試料処理を行った。国立歴史民俗博物館の年代測定資料実験室において、(1)の作業は、遠部、(2)(3)の作業は、宮田が行った。AMSによる¹⁴C測定は、AOMB-24,25a,27,44aは、東京大学大学院 工学系研究科 タンデム加速器施設（機関番号MTC）で行った。AOMB-28,44a(rt),46は、地球科学研究所を通してベータアナリティック社（機関番号Beta）へ委託した。AOMB-44aは、東京大学で測定した後、試料に残余があったので、同一の二酸化炭素精製分から分取してガラス管に詰めた試料AOMB-44a(rt)を、ベータアナリティック社へ測定依頼したものである。

(1) 前処理：酸・アルカリ・酸による化学洗浄（AAA処理）。

土器付着物については、まずアセトンに浸け振とうし、油分などの不純物を除去した。次いで、希塩酸溶液（1N HCl）で土壌などから混入する炭酸塩鉱物を溶解し、除去する。この酸処理は2回行った。その後、アルカリ溶液（NaOH）でフミン酸等を除去する。アルカリ溶液による操作は濃度を変えて（1回目：0.01N、5回目以降：0.1N）5回行い、ほとんど着色しなくなったことを確認して、終了とした。その後、6時間の酸処理によって中和し、さらに超純水にて4回の洗浄を行い、回収した。各処理は80℃にて1時間行った。なお、酸、アルカリ、酸と液性を変えるときには超純水で洗浄を行った。

(2) 試料の燃焼と二酸化炭素精製

AAA処理を施した試料を約500mgの酸化銅とともに石英ガラス管に真空封入した。3時間850℃にて加熱して完全に燃焼させた。燃焼によって生成した気体を真空ラインに導き、液体窒素および冷却エタノールなどの冷媒を用いて二酸化炭素を分離・精製した。

(3) グラファイト化

約1.5mgの炭素に相当する二酸化炭素を分取し、水素ガスとともにあらかじめ鉄粉を投じた石英ガラス管に封入した。これを10時間600℃にて加熱し、鉄粉を触媒として二酸化炭素を還元して、グラファイトを生成させた。得られたグラファイトを鉄粉と混合し、アルミニウム製のターゲットホルダーに600Nの圧力で充填し、AMS測定用の試料とした。

3 測定結果と暦年較正

表3に得られた ^{14}C 年代値、暦年較正年代および $\delta^{13}\text{C}$ 値を記す。

AMS法では試料中の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比が測定される。正確な $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を得るには測定時の同位体効果を補正する必要がある、同時に $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比も測定することにより同位体効果を見積もり、補正している。 $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比は標準体（古生物belemnite化石の炭酸カルシウム中の $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比）に対する千分率偏差 $\delta^{13}\text{C}$ （‰、パーミル）で示され、 ^{14}C 年代値を求める場合は $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を -25% に規格化して測定された $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正する。 ^{14}C 年代値は、大気中の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比は常に一定であったという仮定のもと、補正された試料中の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比にまで減少する時間を ^{14}C の半減期を5568年として計算され、西暦1950年からさかのぼった年数として表記される（BPあるいはyr BPと記されることも多いが、本稿では ^{14}C BPとする）。表3における ^{14}C 年代値の誤差は測定における統計誤差（1標準偏差（ δ ）、68%信頼限界）である。

求められた ^{14}C 年代値を較正データベースIntCal04（暦年代に対して ^{14}C 年代値を与えたデータベース、2004年版）（Reimer et al 2004）と比較することで暦年代（実年代）に換算する。 ^{14}C 年代値と較正データベースの両者に誤差があるため、統計数理的に扱うことでより正確に実年代を表せる。すなわち、測定値と較正データベースの一致の度合いを確率で表すことにより暦年代を確率分布として表す。暦年較正計算は国立歴史民俗博物館で開発したプログラムRH-Cal3（OxCalに準じた計算法（Bronk 2001）で作成）を用いている。誤差は2標準偏差（ δ ）に相当する95%の信頼限界で計算した。

4 年代的考察

試料の重量について、AAA処理を行った量（処理量）、処理後回収した量（回収量）、二酸化炭素を得るために燃焼した量（燃焼量）、精製して得られた二酸化炭素の量に相当する炭素量（ガス）をmg単位で、処理した量に対する回収量の比（回収／処理量比）、燃焼量に対する炭素相当量の比（収率）を%で、表2に記す。今回測定できた試料は、収率が49～55%と、土器付着物としては高い収率であり、良好な年代測定用試料といえることができる。

つぎに、安定同位体である $\delta^{13}\text{C}$ 値について検討する。 $\delta^{13}\text{C}$ 値については、加速器による測定は同位体効果補正のためであり、必ずしも $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を正確に反映しないこともあるため、東京大学で測定した加速器による $\delta^{13}\text{C}$ 値は参考として（）で付す。AOMB-28については、ベータアナリティック社の測定で、 ^{13}C 用ガス試料を安定同位体質量分析計により測定した $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比の値を示してある。 $\delta^{13}\text{C}$ 値が測定できたものについては、 -25% 程度と、陸生の C_3 植物の値と考えられ、通常の植物の燃料材または食料に由来する可能性が考えられる。

つぎに年代についてみていく。AOMB-28は、炭素年代で 4280 ± 40 ^{14}C BPと明らかに古く、縄文中期くらいの年代が測定されている。その原因については、現在のところ不明である。

大洞B式土器であるAOMB-27は炭素年代で 2960 ± 30 ^{14}C BP、較正年代で前1270～1110年（cal BC）が86%の確率である。小林によるこれまでの測定結果による、大洞B式期は前1250～1270年（cal BC）以降という推定（小林2004）と矛盾しない。

大洞B-C式土器であるAOMB-24は炭素年代で 2875 ± 30 ^{14}C BP、較正年代で前1130～960年（cal BC）が89%、AOMB-25aは炭素年代で 2925 ± 35 ^{14}C BP、較正年代で前1220～1010年（cal BC）が88%の確率である。大洞B-C式土器であるAOMB-46は、炭素年代で 2990 ± 40 ^{14}C BP、較正年代で前1325～1110年（cal BC）が85%の確率である。小林によるこれまでの測定結果によると、大洞B-C式期は前1100～1000年頃と推定される。

大洞C2式土器であるAOMB-44aは、2つの測定機関による差が認められるが、この時期は較正曲

線が大きく変動する時期であり、その時期によっては値の変化が大きくとれてしまう時期である。またMTC-06396は測定誤差が大きいことも考慮される。ここでは、測定誤差の小さいBeta-209379をみておくと、炭素年代で 2710 ± 40 ¹⁴C BP、較正年代で前925～800年 (cal BC) が95%の確率である。小林によるこれまでの測定結果と矛盾しない。

この研究は、平成16年度文部科学省・科学研究費補助金 学術創成研究「弥生農耕の起源と東アジア—炭素年代測定による高精度編年体系の構築—」(研究代表 西本豊弘) の成果である。測定については、国立歴史民俗博物館今村峯雄氏に教示いただいた。感謝します。

<参考文献>

今村峯雄2004『課題番号13308009基盤研究(A・1)(一般)縄文弥生時代の高精度年代体系の構築』(代表今村峯雄)
 小林謙一2004「東日本」『弥生時代の実年代』学生社
 Bronk R. C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43, 355-363.
 Reimer P. J. et al (2004) IntCal04 Terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26 cal kyr BP, Radiocarbon, 46, 1026-1058.



AOMB 24 図6-16



AOMB 25a 図6-13



AOMB 27 図6-10



AOMB 28 図5-6



AOMB 44a



AOMB 46 図6-15

表 1 川原平遺跡年代測定用試料一覧

AOMB	報告書番号	種別	時期	土器型式	器種	出土地 (旧整理番号)	付着状況
24	図6-16	土器付着物	縄文晩期	大洞BC式	深鉢	Ⅲ層 ND-166 (No.3)	口縁部外面煤
25a	図6-13	土器付着物	縄文晩期	大洞BC式	深鉢	Ⅲ層 ND-166 (No.2)	口縁部内面焦げ
27	図6-10	土器付着物	縄文晩期	大洞B2式	深鉢	Ⅱ層 ND-176 (No.32)	口縁部内面焦げ
28	図5-6	土器付着物	縄文晩期	大洞B1式	深鉢	Ⅲ層 C区トレンチ01 (No.59)	口縁部外面煤
44a		土器付着物	縄文晩期	大洞C2式	深鉢	Ⅰ層 NH-180 (No.155)	口縁部内面焦げ
46	図6-15	土器付着物	縄文晩期	大洞BC式	深鉢	Ⅲ層 ND-166 (No.157)	口縁部内面焦げ

表 2 川原平遺跡年代測定用試料炭素含有量

AOMB	採取量	処理量	回収量	回収/処理	前処理後	燃焼量	ガス	収率	ガス/処理
24	23.88	23.88	2.47	10.3%	良	1.58	0.90	57.0%	5.9%
25a	68.97	15.66	3.74	23.9%	良	3.23	1.73	53.6%	12.8%
27	126.55	24.33	2.94	12.1%	良	2.42	1.34	55.4%	6.7%
28	35.51	35.51	7.89	22.2%	良	3.97	2.16	54.4%	12.1%
44a	13.58	10.51	3.45	32.8%	良	2.91	1.47	50.5%	16.6%
46	31.25	31.25	8.55	27.4%	良	4.00	1.97	49.3%	13.5%

表 3 測定結果と暦年較正年代

試料 番号	測定機関 番号	炭素年代 $\delta^{13}\text{C}\text{‰}$	^{14}C BP (補正值)	暦年較正cal BC	(%)は確率密度
AOMB-24	MTC-06393	(-28.9)	2875 ± 30	1190-1180	1.3%
				1155-1145	1.5%
				1130-970	88.6%
				960-935	4.0%
AOMB-25-a	MTC-06394	(-26.2)	2925 ± 35	1260-1230	7.1%
				1220-1010	88.4%
AOMB-27	MTC-06395	(-26.8)	2960 ± 30	1290-1275	2.3%
				1270-1110	86.0%
				1105-1055	7.1%
AOMB-28	Beta-209317	-25.2	4280 ± 40	3015-2870	89.6%
				2805-2775	4.5%
				2770-2760	1.0%
AOMB-44-a	MTC-06396	(-27.6)	2580 ± 80	895-495	91.4%
				495-485	0.8%
				460-445	1.2%
				440-415	2.1%
AOMB-44-a (rt)	Beta-209379	測定不能	2710 ± 40	965-965	0.5%
				925-800	95.0%
AOMB-46	Beta-209318	測定不能	2990 ± 40	1385-1330	8.9%
				1325-1110	85.5%
				1100-1085	0.8%
				1060-1060	0.3%

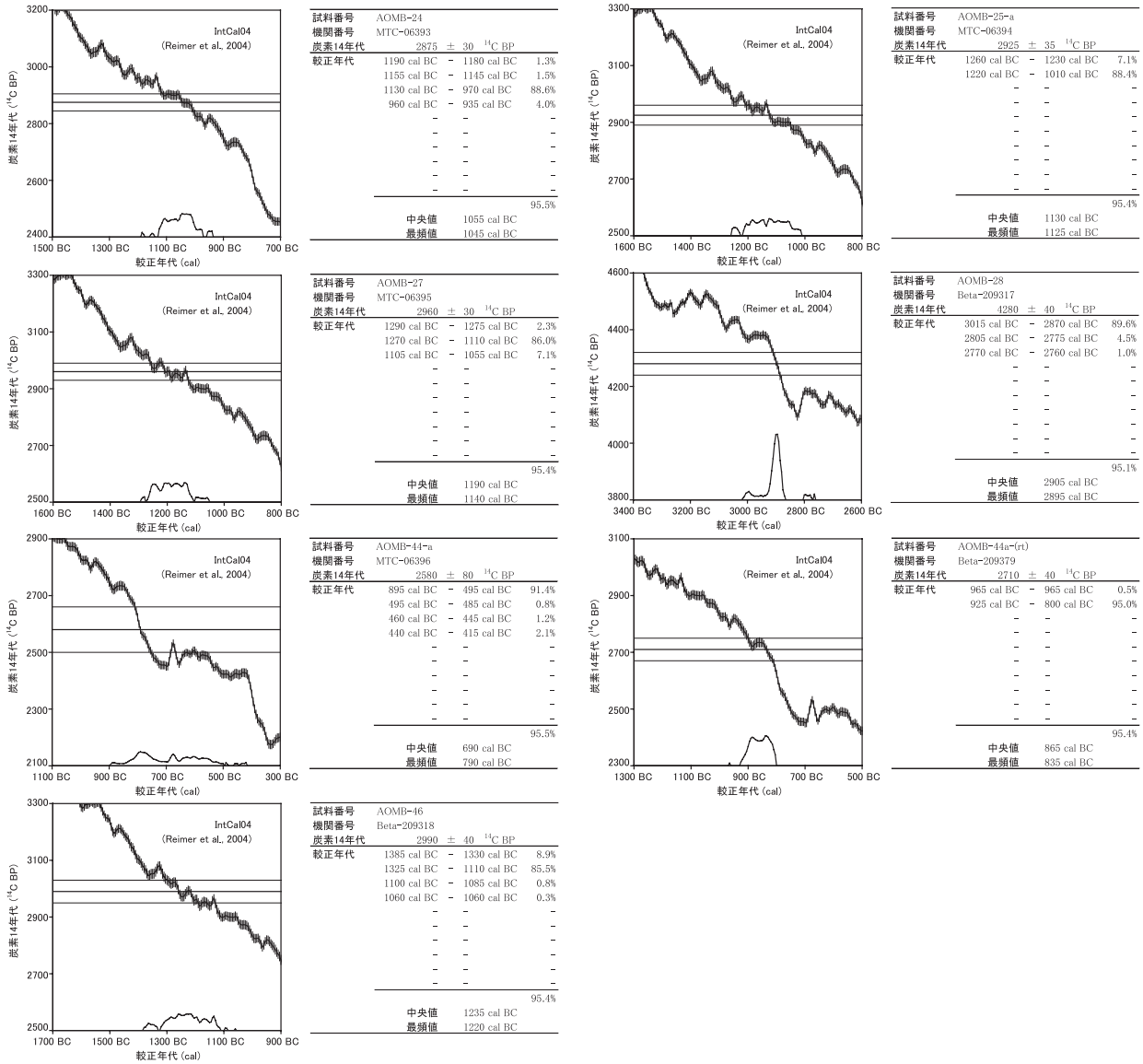
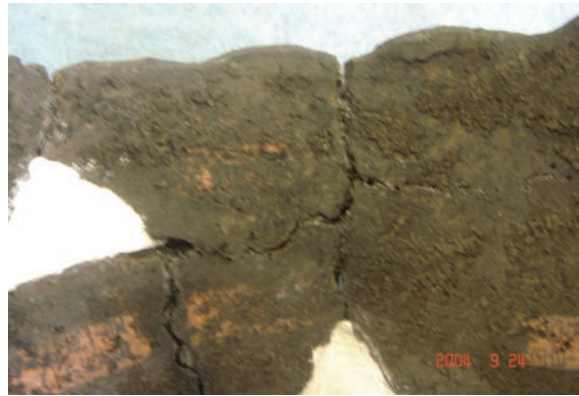


図 川原平遺跡測定試料の暦年較正確率密度分布

中央値はその左右で確率密度が等しくなる値、最頻値はもっとも高い確率を与える値であるが、どちらも統計学上の数値であり、試料の年代として推奨される値とは限らない。



AOMB024 口縁部外面付着状態



AOMB027 口縁部内面付着状態



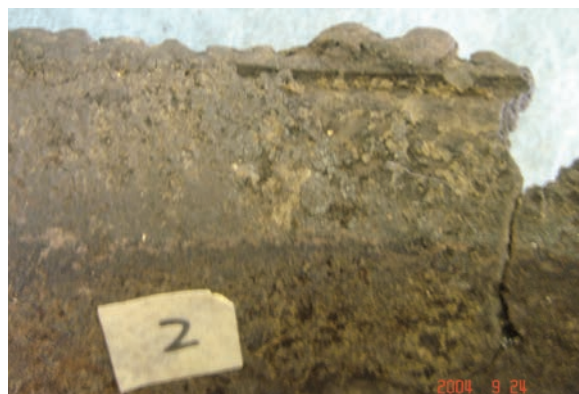
AOMB028 口縁外面付着状態



AOMB046 胴部内面付着状態



AOMB025b 口縁部外面付着状態



AOMB025a 口縁部内面付着状態

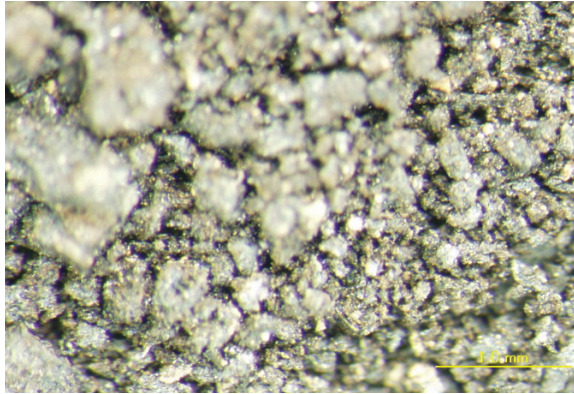


AOMB044b 胴部外面付着状態

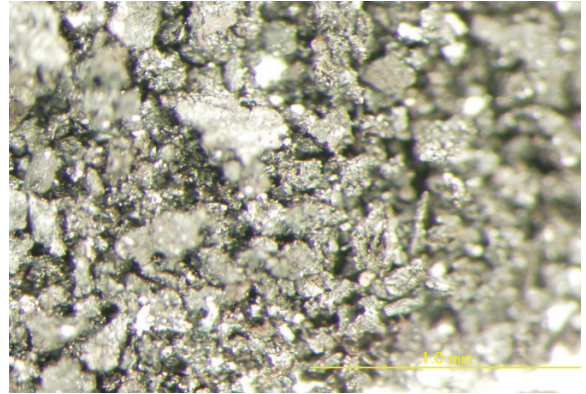


AOMB044a 胴部内面付着状態

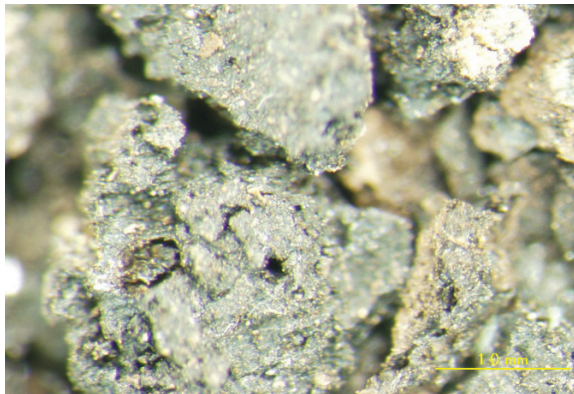
川原平遺跡出土土器炭化物の状態



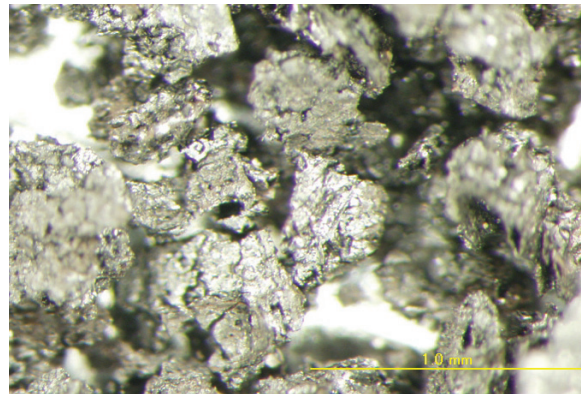
AOMB024 AAA処理前 9倍



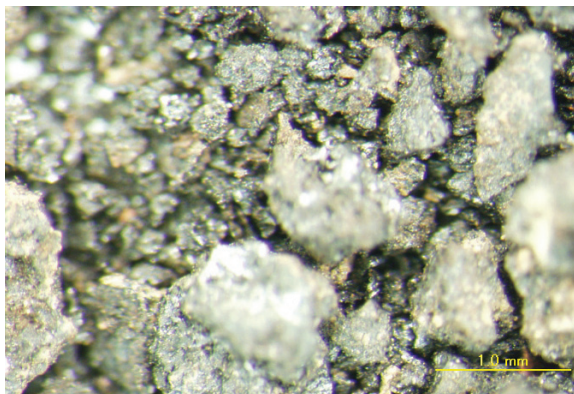
AOMB024 AAA処理後 9倍



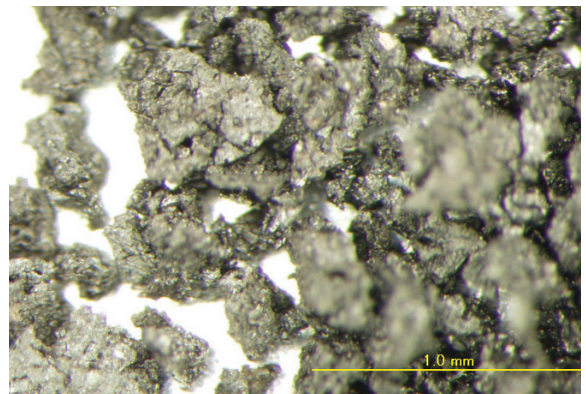
AOMB025a AAA処理前 9倍



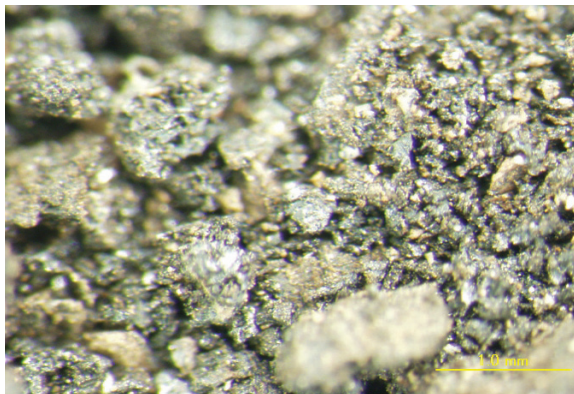
AOMB025a AAA処理後 9倍



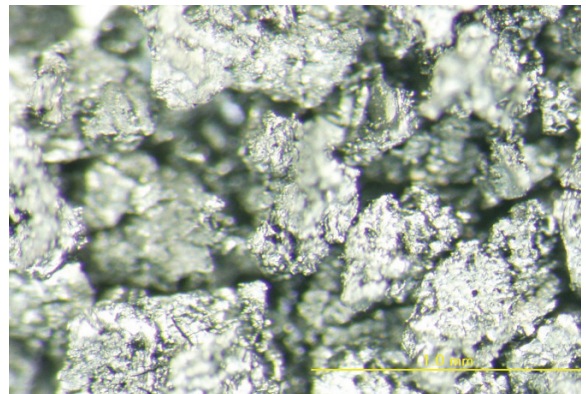
AOMB027 AAA処理前 9倍



AOMB027 AAA処理後 9倍

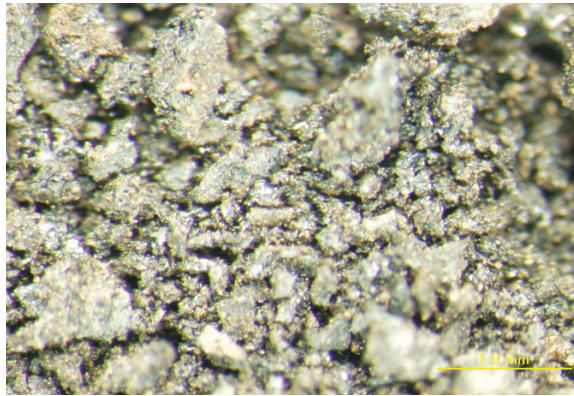


AOMB028 AAA処理前 9倍

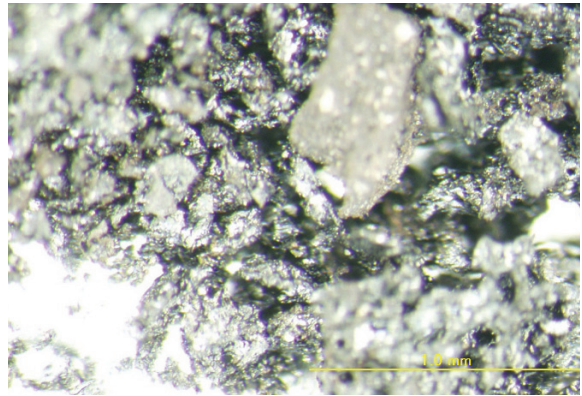


AOMB028 AAA処理後 9倍

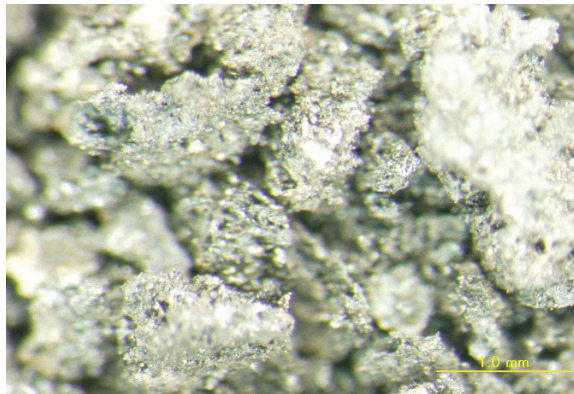
川原平遺跡出土土器炭化物の状態



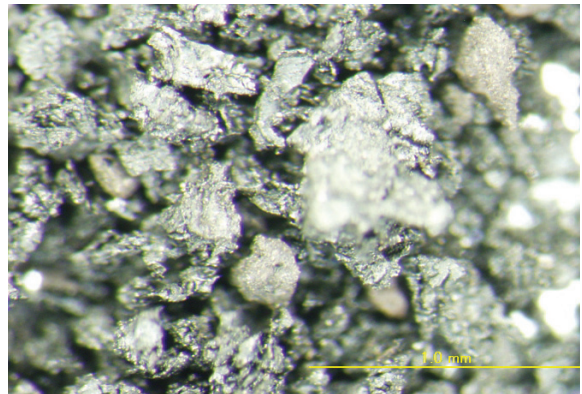
AOMB44a AAA処理前 9倍



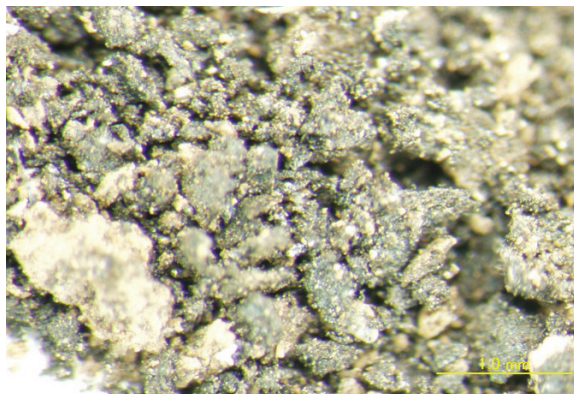
AOMB44a AAA処理後 9倍



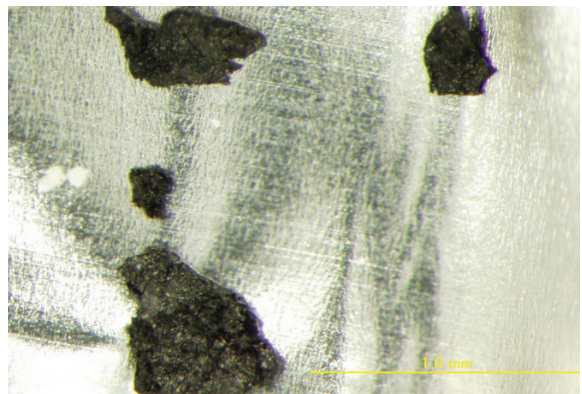
AOMB46 AAA処理前 9倍



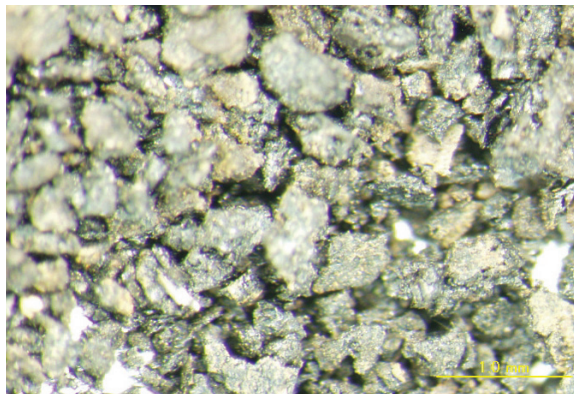
AOMB46 AAA処理後 9倍



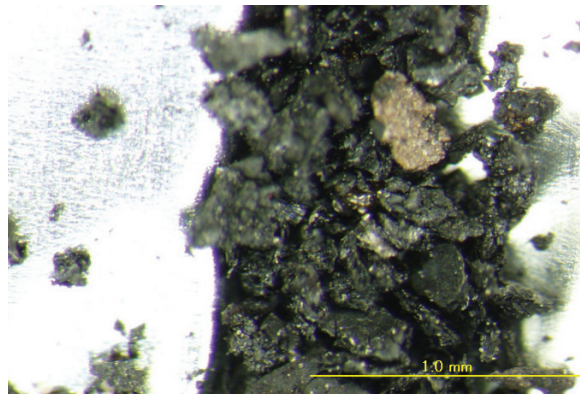
AOMB25b AAA処理前 9倍



AOMB25b AAA処理後 9倍



AOMB44b AAA処理前 9倍



AOMB44b AAA処理後 9倍

川原平遺跡出土土器炭化物の状態

第4章 まとめ

1 遺跡の立地

津軽地域の西部に位置する川原平(1)・(4)遺跡と大川添(2)遺跡は隣接し、西に白神山地、南に北部出羽丘陵を経て県境に接し、津軽平野を潤す岩木川の支流大川、大沢川、湯ノ沢川等に挟まれた河岸段丘上に位置する。調査区はいずれも広大で標高は200～230mの緩やかな緩斜面であるが、一部造成による盛土や削平区域がみられる。現況はおもに畑地や植林された杉林である。

2 検出遺構

調査で確認した遺構は、川原平(4)遺跡が土坑12基と焼土遺構3基、川原平(1)遺跡が遺物包含層1カ所と配石(集石)遺構2基で、いずれも縄文時代と考えられる。

3 出土遺物

出土した遺物は、川原平(1)遺跡が段ボール箱で79箱分、川原平(4)遺跡が段ボール箱で4箱分、大川添(2)遺跡が土器片7点である。時期は縄文時代中期から晩期にかけての遺物である。

4 まとめ

調査の結果、次年度以降の発掘調査が必要と思われる区域として、川原平(4)遺跡のA区は、中央部から南側が大規模に削平され、北東側に造成用の盛り土と利用されていたため焼土や土器が出土している西側部分、B区は中央部を中心にかなり削平されているが一部残存している遺構が検出した中央部から南側、E区は旧水田跡から土器などが出土しているため全域の調査が必要である。川原平(1)遺跡は、C区は、中央部に遺物包含層と配石・集石遺構などが検出されているため全域、D区はほぼ全域が礫層まで削平されており、これ以上の調査は不要である。大川添(2)遺跡は、調査した平坦部はほぼ全域が礫層まで削平されており、僅かではあるがトレンチから土器片が出土したため道路から東側と南側部分は、さらに調査が必要と思われる。

遺物は縄文時代中期から晩期末葉までの土器などが出土しており、特に注目されるのは、縄文時代後期後半から晩期前半にかけての土器や石器のほかに土偶などの土製品や石製品などがあげられ、県内では出土例が少ない時期のものである。

今後の発掘調査が広範囲におよぶことから、海岸線から遠く離れ標高200m以上の山奥に生活を求めた当時の人々の生活がより明らかになっていくと考えられ、今後の発掘調査に期待したい。

最後に調査にご協力していただきました多くの方々に心から感謝申し上げます。(調査担当者)

《引用・参考文献》

- 青森県教育委員会 1998 『青森県遺跡地図』
- 秋田県教育委員会 1998 『虫内 I 遺跡』 秋田県文化財調査報告書第274集
- 秋田県教育委員会 2000 『戸平川遺跡』 秋田県文化財調査報告書第294集
- 秋田県教育委員会 2003 『向様田A遺跡』 遺構編 秋田県文化財調査報告書第346集
- 秋田県教育委員会 2004 『向様田A遺跡』 遺物編 秋田県文化財調査報告書第370集
- 東北地方整備局津軽ダム工事事務所 2005 『津軽ダム西目屋地域生活文化調査報告書』
- 西目屋村役場 1991 村制施行百周年記念 『西目屋村誌』
- 安孫子 昭 二 1994 「瘤付土器」『縄文文化の研究4』雄山閣出版株式会社
- 稲野 彰子 1995 「岩版」『縄文文化の研究9』雄山閣出版株式会社
- 小林 圭一 2003 「東北北半における縄文晩期前葉の注口土器」『研究紀要創刊号』
(財)山形県埋蔵文化財センター
- 設楽 博己 1995 「土製耳飾」『縄文文化の研究9』雄山閣出版株式会社
- 鈴木 克彦 2003 『北日本の縄文後期土器編年の研究』雄山閣出版株式会社
- 鈴木 克彦 1994 「亀ヶ岡土器」『縄文文化の研究4』雄山閣出版株式会社
- 福田 友之 1984 「西目屋村砂子瀬村元出土の遺物」『青森県考古学第1号』青森県考古学会
- 米田 耕之助 1995 「土製耳飾」『縄文文化の研究9』雄山閣出版株式会社
- 村越 潔 1984 『円筒土器文化』雄山閣出版株式会社

表1 地区・器種別石器出土点数

地区\器種	石鏃	石槍	石錐	石匙	楔形	異形	不定形	剥片小計	敲磨器	石斧	砥石	石皿	台石	礫小計	総計	珪質頁岩剥片(kg)
川原平(1)C区	95	3	26	59	5		143	331	57	3	1	4	4	69	400	97.5
川原平(1)D区											1			1	1	0.1
川原平(4)A区	1					1	1	3	8					8	11	1.1
川原平(4)B区	2			1			4	7	1					1	8	1.1
川原平(4)E区	4	2		6			6	18	1					1	19	7.6



川原平(4) A区トレンチ 作業風景



川原平(4) A区トレンチ 作業風景



川原平(4) A区 作業風景



川原平(4) A区 作業風景



川原平(4) A区トレンチ01



川原平(4) A区 作業風景



川原平(4) A区 作業風景



川原平(4) B区トレンチ01

写真1 川原平(4)遺跡



川原平(4) B区トレンチ02



川原平(4) B区トレンチ04



川原平(1) C区トレンチ01 作業風景



川原平(1) C区 ND-176 礫出土状況



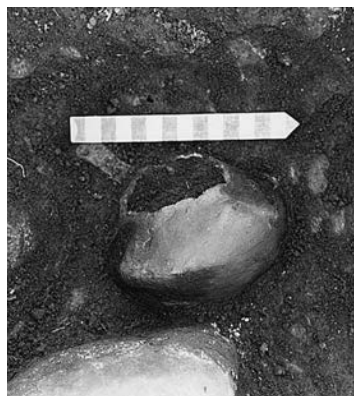
川原平(1) C区 NJ-180 配石2



川原平(1) C区 NJ-180 配石1



(P-3)



(P-1)



(P-2)

川原平(1) C区 NJ-180 遺物出土状況

写真2 川原平(1)・(4)遺跡



川原平(1) C区 NH-180 遺物出土状況 (P-1)



川原平(1) D区トレンチ01



川原平(4) E区 作業風景



川原平(4) E区 PL-157 遺物出土状況



川原平(4) E区 PL-157 遺物出土状況



川原平(4) E区



大川添(2) トレンチ01



大川添(2) トレンチ04

写真3 川原平(1)・(4)遺跡・大川添(2)遺跡

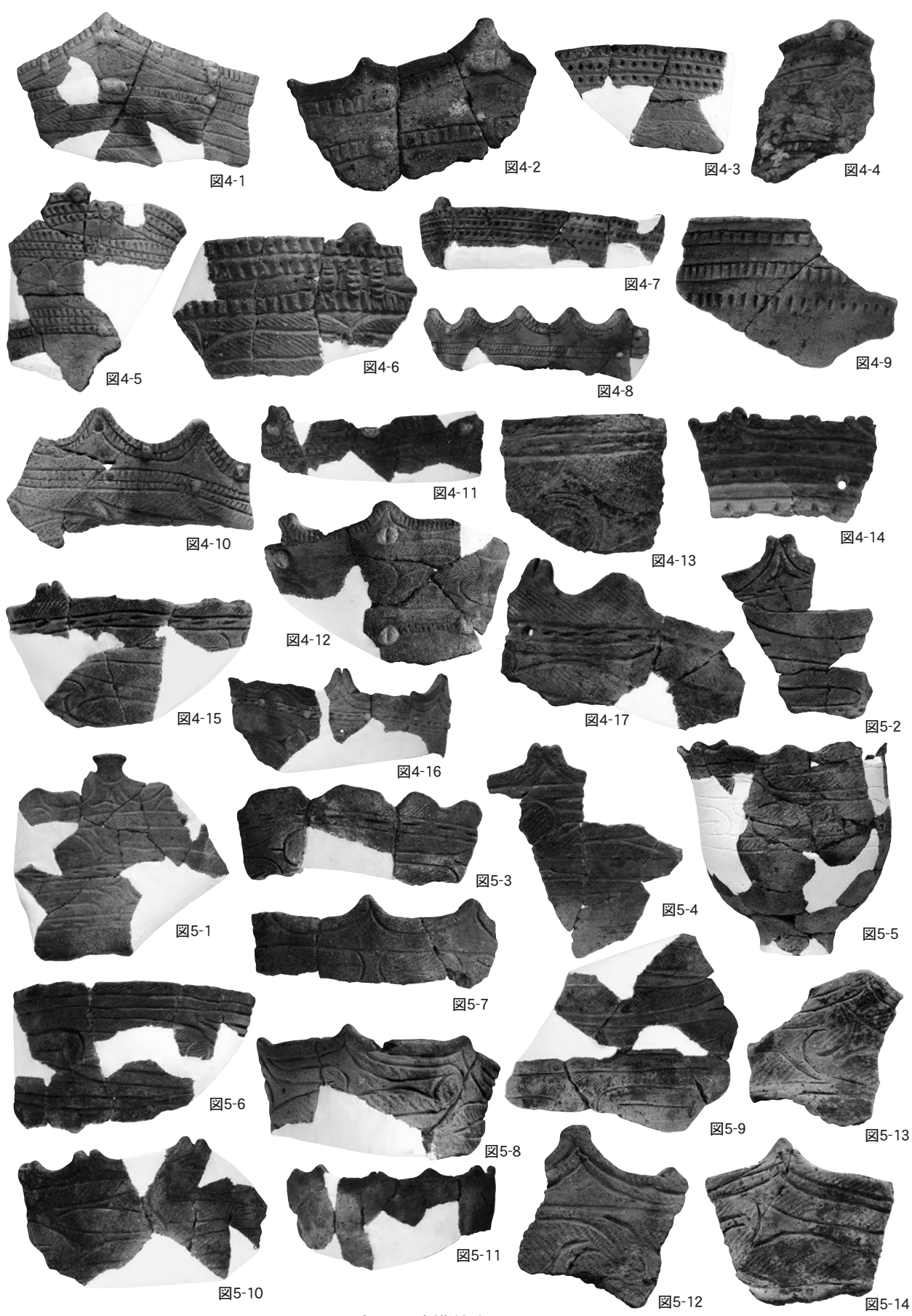


写真 4 遺構外出土土器 1

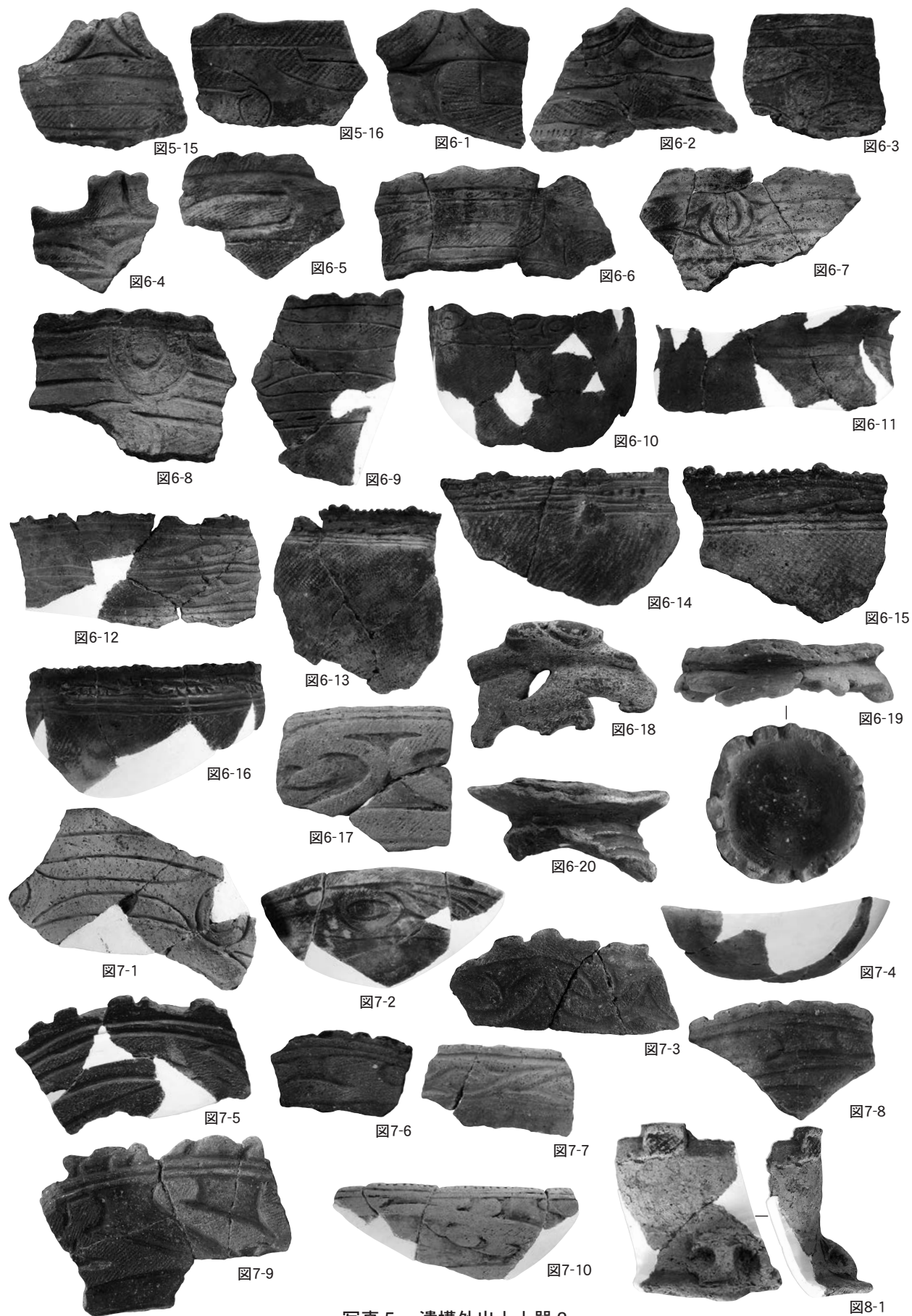


写真 5 遺構外出土土器 2

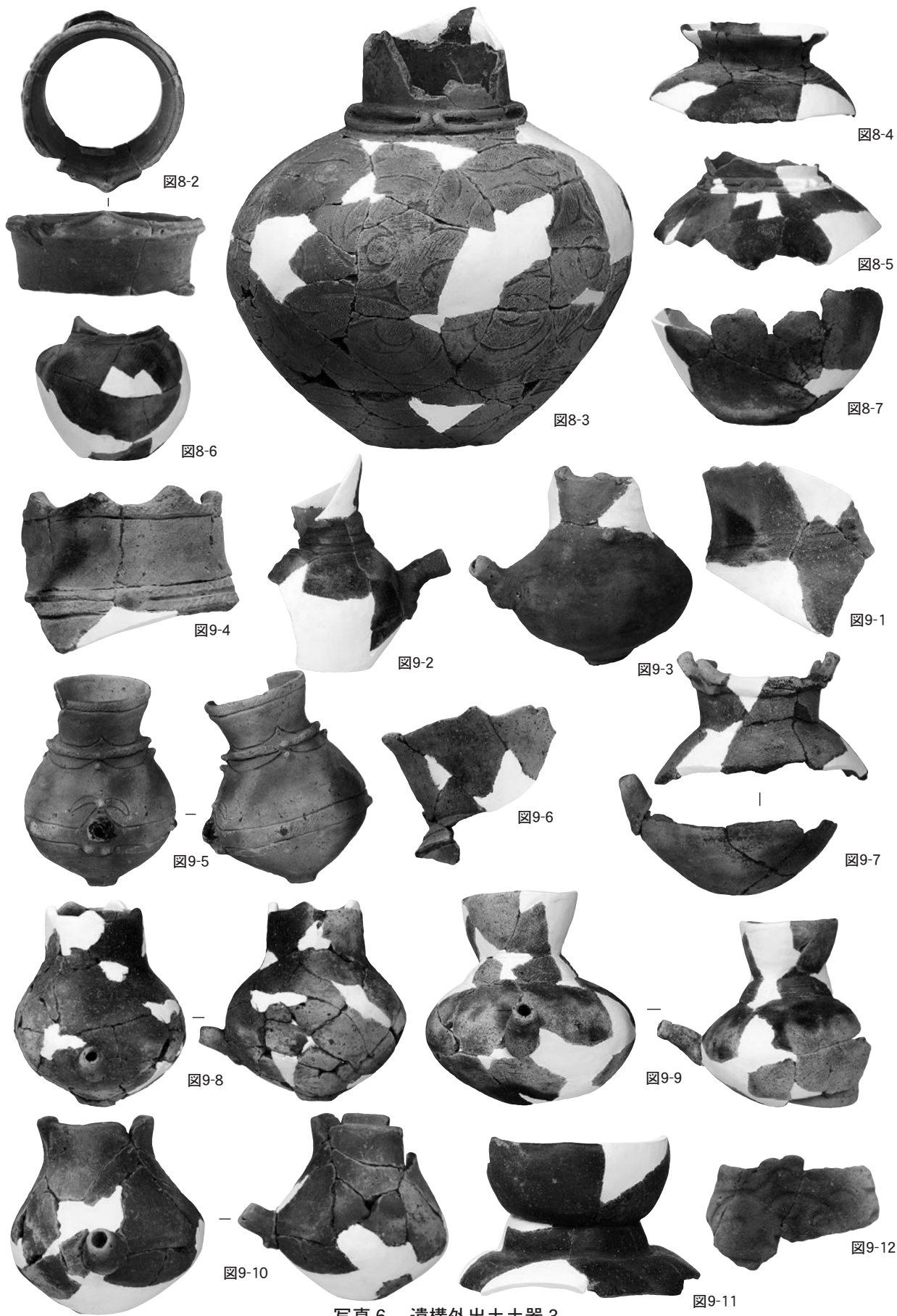


写真 6 遺構外出土土器 3

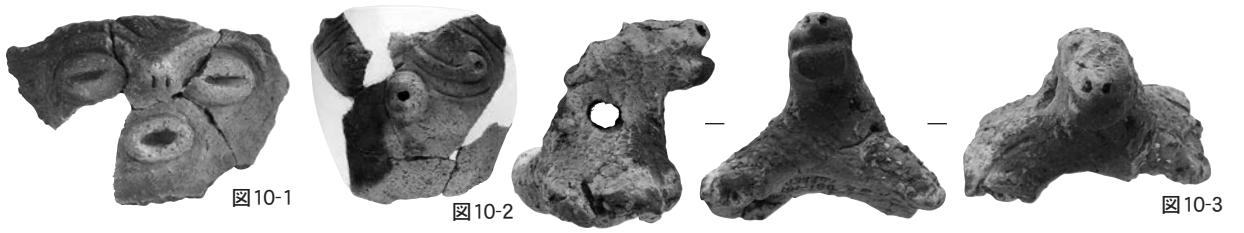


图10-1

图10-2

图10-3



图10-4



图10-5

图10-6

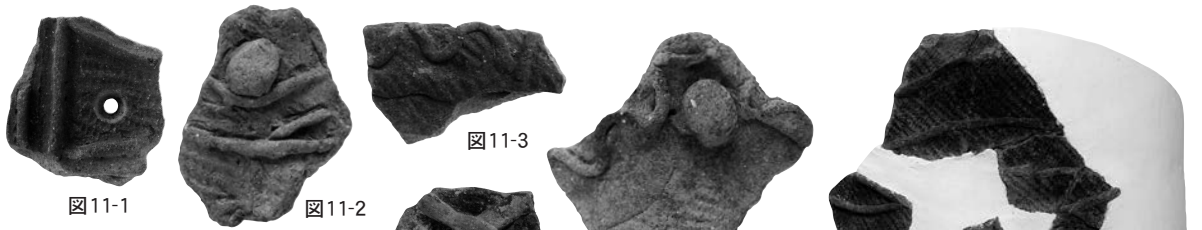


图11-1

图11-2

图11-3

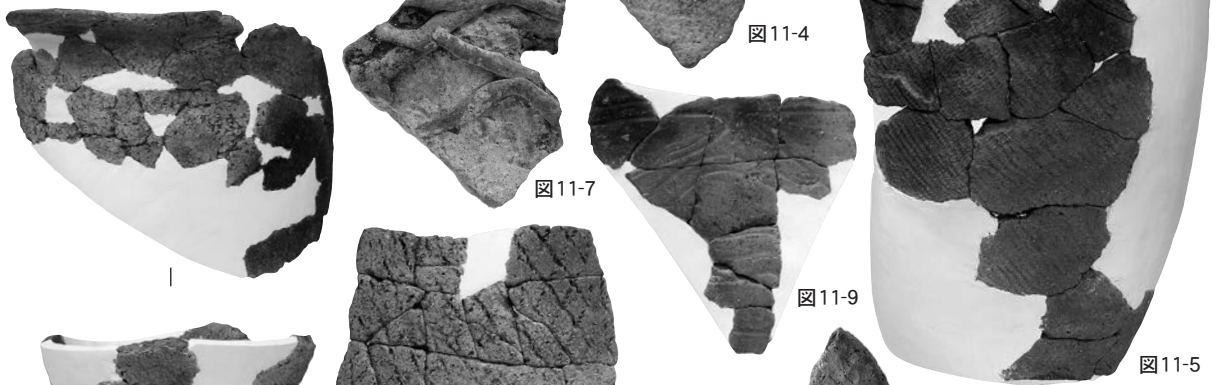


图11-4

图11-7

图11-9

图11-5



图11-10

图11-11

图11-12

图11-13

图11-14

图11-15

图11-16

写真7 遺構外出土器4

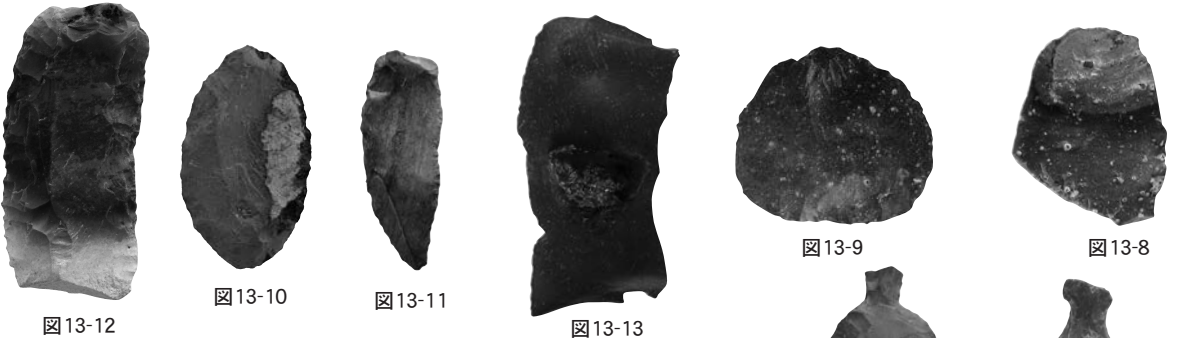
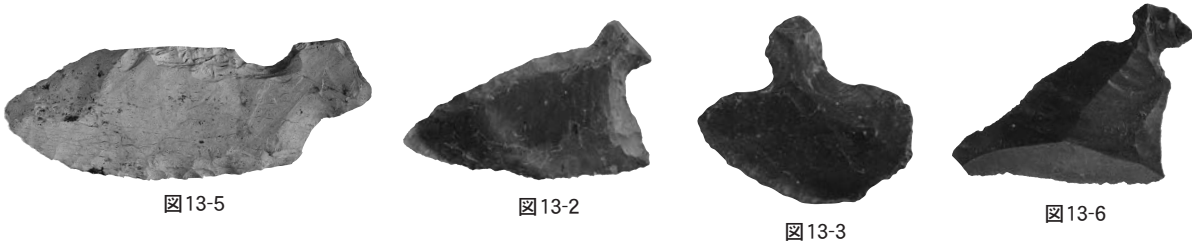
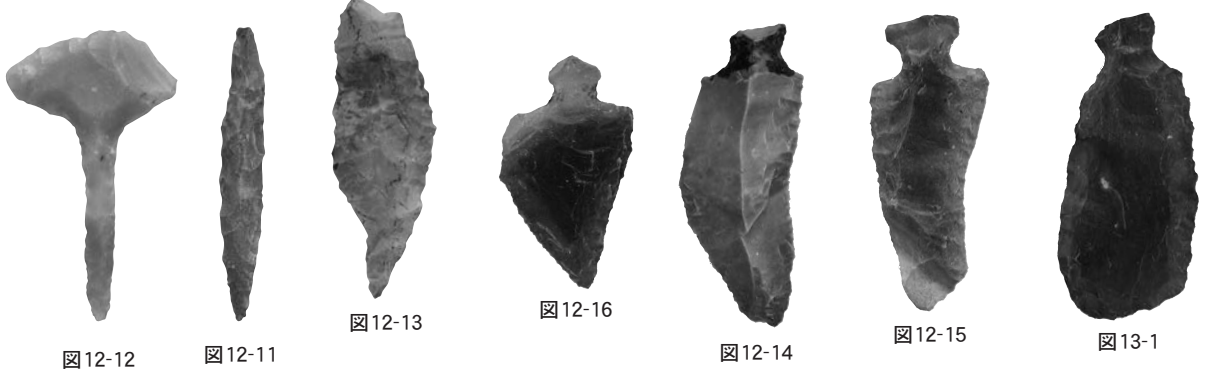
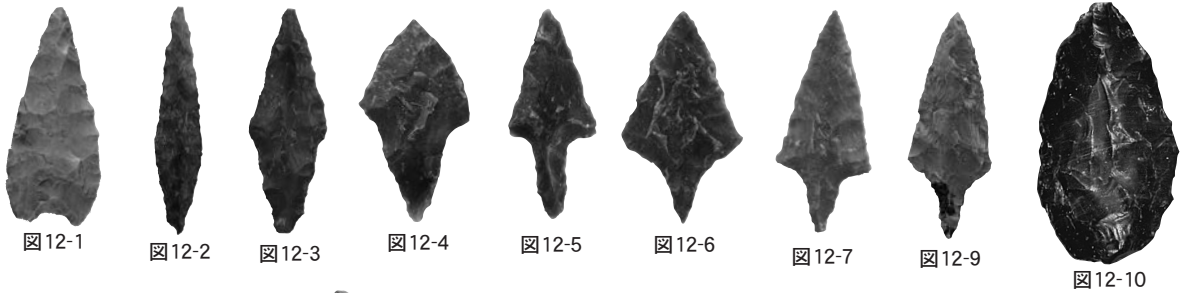


写真 8 遺構外出土石器 1

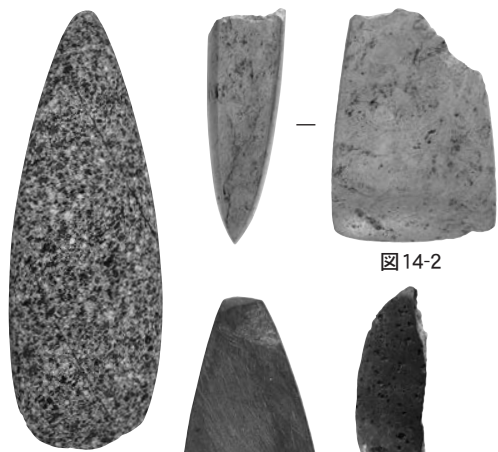


图14-2

图14-3



图14-1



图15-3



图14-8



图14-10



图17-5

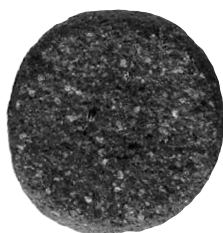


图14-4



图14-9



图14-6



图15-1



图15-4



图15-2



石皿・磨石と赤色顔料片



图15-5



石皿 图15-6
磨石 图14-7

写真9 遺構外出土石器2



图18-1



图18-2



图18-3



图18-5



图18-4



图18-7

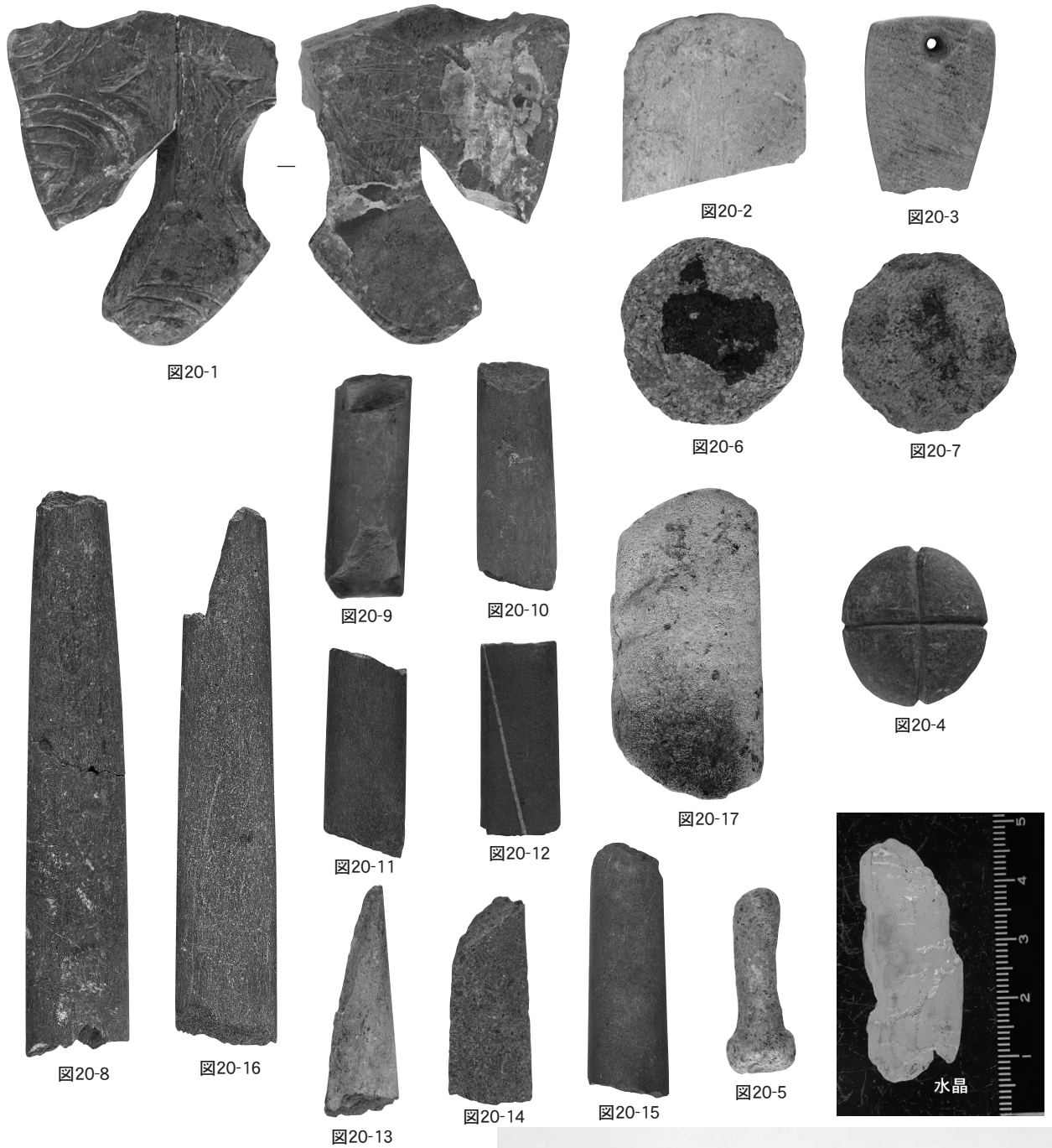


图18-6

写真10 土偶



写真11 遺構外出土土製品



深浦産

出来島産

黒曜石

水晶

剥片

写真12 遺構外出土石製品



水上遺跡（東側から）

第3編

水上遺跡

目次

第1章 基本層序	66
第2章 検出遺構と出土遺物	67
第1節 検出遺構	
1. 住居跡	67
2. 土坑	76
3. 硬化面	94
第2節 遺構外出土遺物	
1. 土器	96
2. 石器	99
第3章 まとめ	
表	105
土坑一覧表	106
土器観察表	107
石器観察表	110
写真図版	113
報告書抄録	131

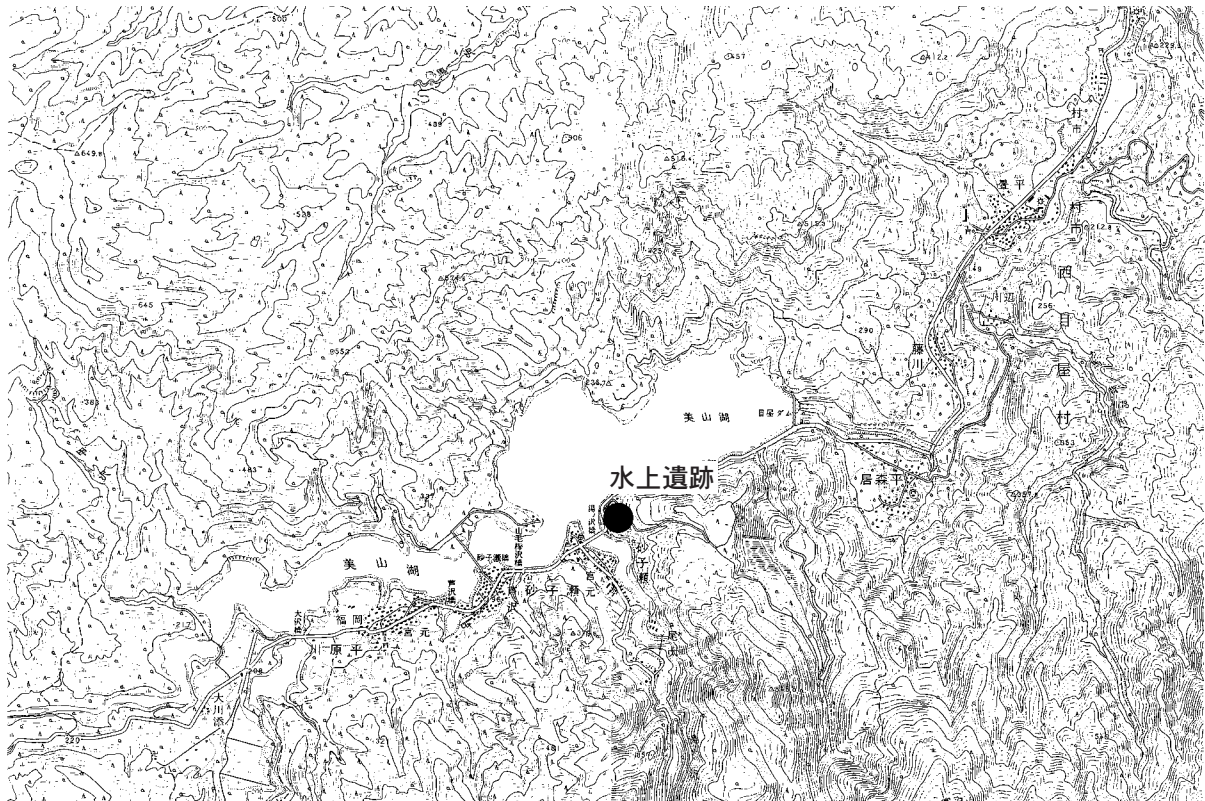


図1 水上遺跡位置図

1 : 25,000
500m 0 500 1000 1500

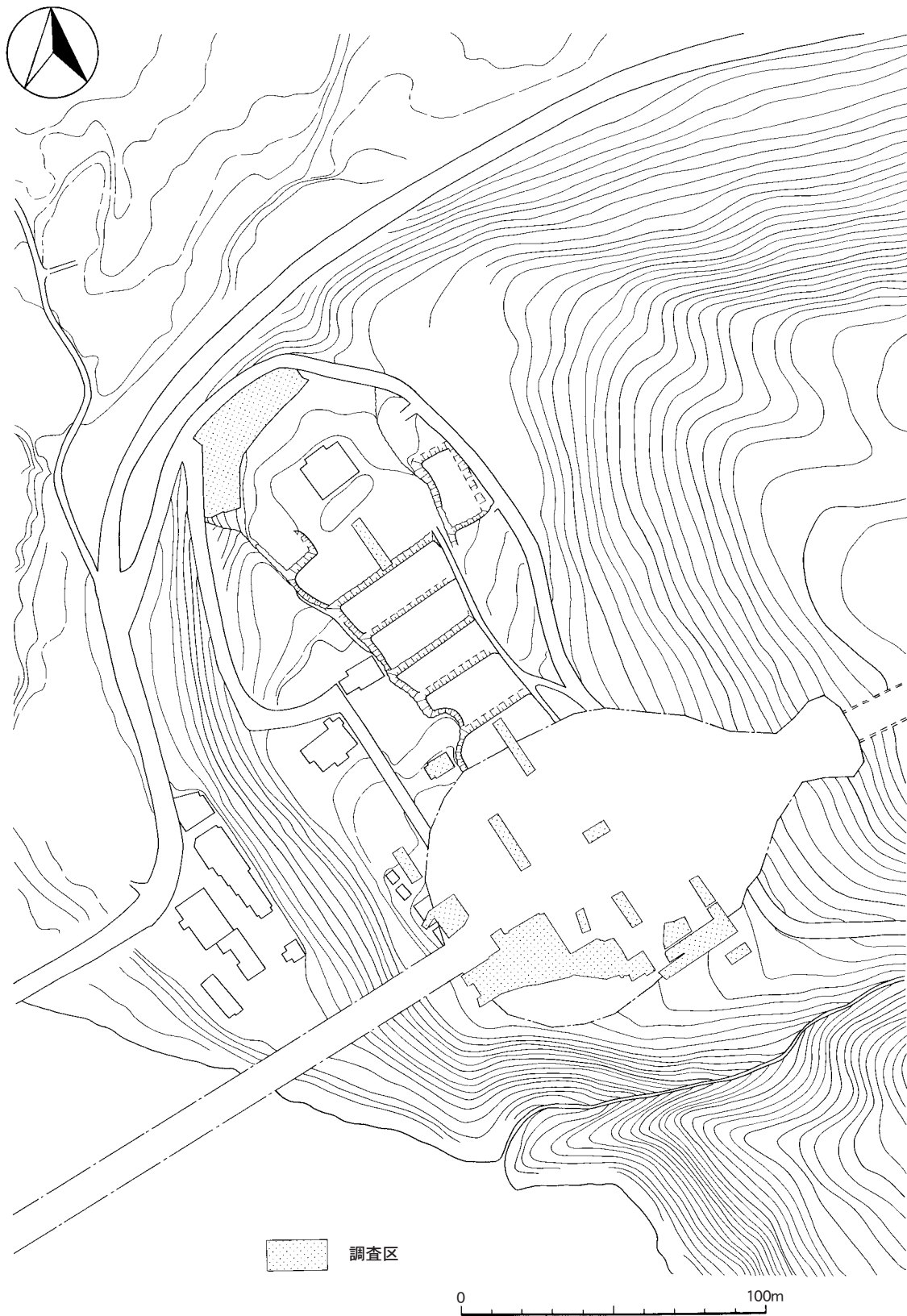


図2 遺跡全体図



图3 遺構配置図

第1章 基本層序

調査区の東側調査地域は、第I層が黒褐色土であり、ローム粒・褐色土ブロックを多く含んでいる表土層である。調査区全体に20cmの厚さで堆積している。第2層以降は、礫岩を含む堆積土である。

このことから、東側調査区全体は、戦後の津軽ダム移転の建設に伴って、当該地区に集落が移転した際に機械等で削平してしまい第II層以降が礫岩層が存在すると思われる。

西側の調査区域は、神社周辺が機械等での耕作をまぬがれた地域と考えられる。第I層は暗褐色土で、炭化粒を含み全体的に黒っぽい色調で粘性をもつ土質である。II層以降は褐色土のれき層であり、黒色土が堆積していない地域である。

以上の土層観察から、東側地域は機械等で天地返しを受けた地域であり、西側調査地区は神社周辺は残存しているもの、黒色土の堆積がみられない地域と考えられる。

基本土層注記

I層	10YR2/2	黒褐色	ローム粒(φ1~10mm)3%、炭化物粒(φ1~5mm)2% 褐色土ブロック(φ30~50mm)7%、ややしまりなし
II層	10YR4/6	褐色	10YR2/2黒褐色土(φ2~10mm)3%、炭化物粒(φ1mm)1%、礫(φ10mm以上)5%、やや粘性あり
III層	10YR5/6	黄褐色	炭化物粒(φ1~2mm)礫、(φ10mm以上)40%、やや粘性あり
IV層	10YR5/6	黄褐色	炭化物粒(φ1~3mm)1%、礫(φ10~30mm)3%、粘性あり
V層	10YR5/6	黄褐色	炭化物粒(φ1mm)2%、小礫(φ3~10mm)15%、礫(φ1~80mm)10%、硬くしまりあり
VI層	10YR4/6	褐色	炭化物粒(φ1~3mm)1%、小礫(φ1~10mm)20%、礫(φ15~150mm)50%、やや粘性あり
VII層	10YR3/4	暗褐色	褐色土ローム7%、褐色土(φ2~5mm)がロームに含まれる。炭化物粒(φ1mm)1%、礫(φ5~400mm)、ロームは硬くしまりあり

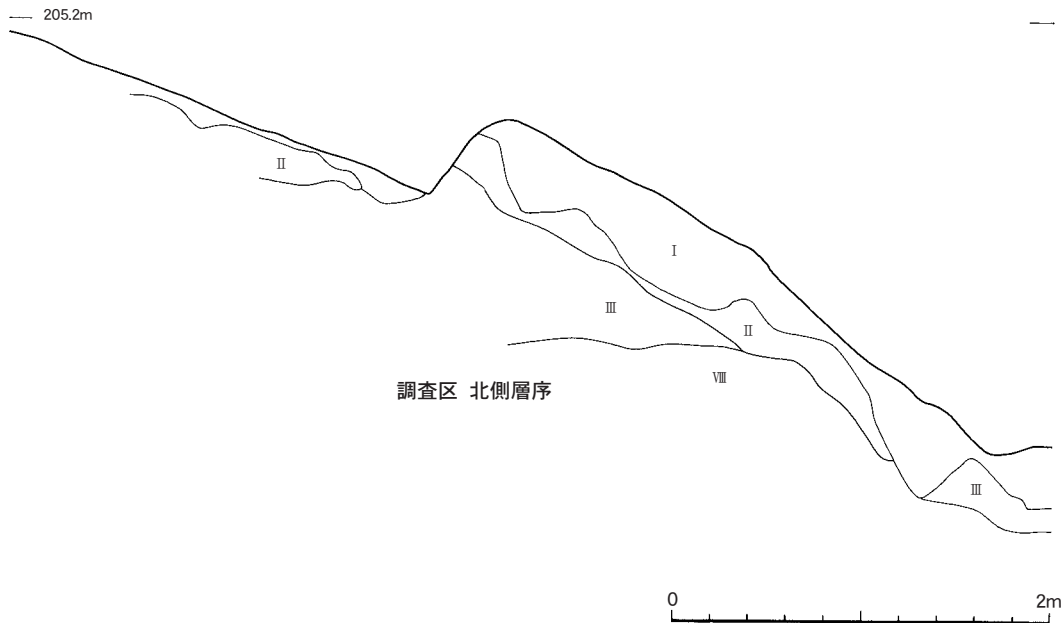
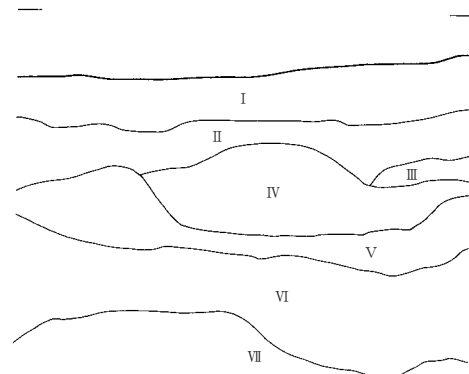


図4 基本層序

第2章 検出遺構と出土遺物

第1節 検出遺構

1. 住居跡

水上遺跡からは、第1～4号住居跡の4軒の住居跡を検出した。

第1号住居跡 (IHSI02) 図5

〈位置・重複〉

DG・DH-146・147グリッドに位置している。重複は第2号住居跡・第3号住居跡・第4号住居跡と重複しており、新旧関係は、本住居跡が古い。

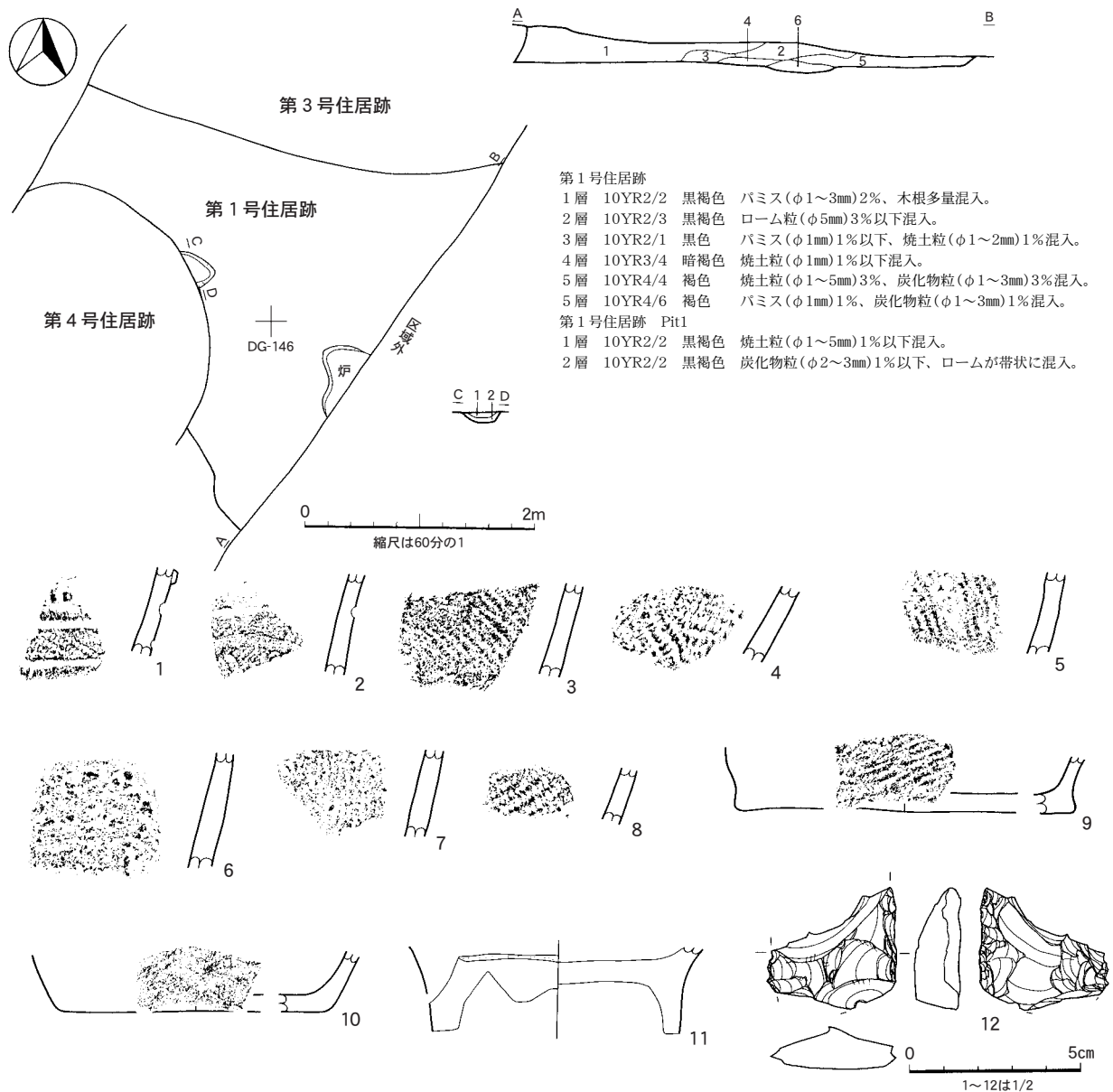


図5 第1号住居跡

〈平面形・規模〉

重複が激しく、全体の形状は不明である。東西330cm 南北380cmの床面が残存していた。

〈床面・壁〉

床面は、ほぼ平坦で堅いつくりである。壁は、南壁のみ残存し、確認面から床面に掛けて斜位にかけて傾斜している。

〈炉〉

確認された住居跡の中央部に位置し、東側が区域外のため完掘はできなかった。形態は残存部から判断して楕円形を呈すると思われる。長軸（60cm）・短軸（35cm）・深さ5cmを測る浅い地床炉である。火熱面はあまり火を受けておらず、軟らかい。

〈柱 穴〉

一カ所確認した。南側半分を第4号住居跡によって切られており、形態は残存部から判断して楕円形を呈すると思われる。深さ10cmと浅いピットである。

〈堆積土〉

堆積土は5層に分層できた。第3層中に焼土粒を確認できた。

〈遺 物〉

土器は堆積土中から17片、床直から4片が、全体から散在して出土した。堆積土中から出土した土器は、1は帯縄文で上位対の粘土粒を貼り付け、2は弧状文の磨消縄文であり、薄手のつくりで焼成は良好である。3～5は深鉢形の胴部破片であり、3はスス状炭化物が付着し、4は回転方向を施文している。11は底部破片であり、単節の斜行縄文である。床面・床直からの出土は、6～8が深鉢形の胴部破片で、6・7は縄文を施文していると思われるが表面の剥落が著しい土器である。8はスス状炭化物の付着がみられる。9・10は底部破片で、9は台付鉢と思われる。

石器は、剥片石器が床直から不定形石器1点出土した。

〈小 結〉

堆積土遺物の土器から時期を判断するならば、床面・床直から出土した土器は縄文時代後期後葉の時期であり、堆積土の遺物も同時期の粗製縄文と考えられる。遺物から判断すると住居跡の年代は縄文時代後期後葉と考えられるが、住居跡の重複では第3号住居跡（縄文時代中期）に切られており、重複関係から、構築時期を判断するならば縄文時代中期の時期に求められると思われる。

第2号住居跡（旧SI03）図6

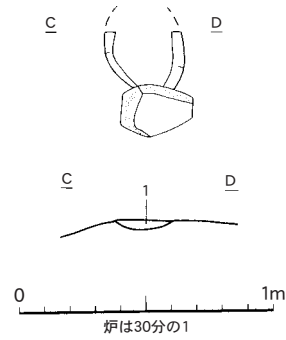
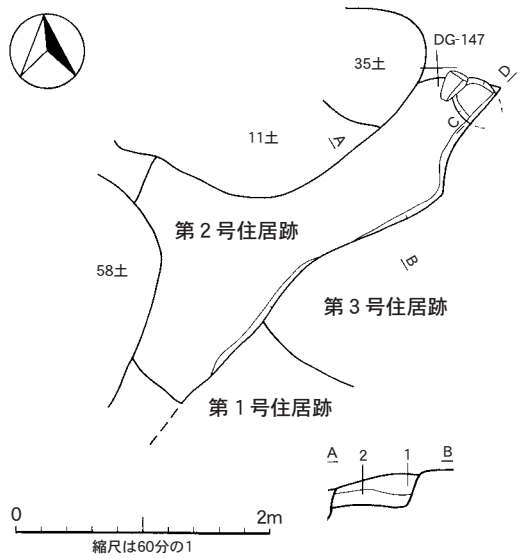
〈位置・重複〉

本住居跡はDG-147グリッドに位置している。重複は下記の通りである。

(古)	(新)
第1号住居跡 → 第3号住居跡 →	本住居跡 → 第11号土抗 → 第35号土抗 \ 第44号土抗

〈平面形・規模〉

本住居跡は、激しい重複のため、床の一部と炉を検出したのみであり、全体の形態は不明である。床の残存部は東西145cm・南北350cmを測る。



第2号住居跡
 1層 10YR2/3 黒褐色 焼土粒(φ1~3mm)1%、炭化物粒(φ1~5mm)1%、ローム粒(φ5mm)1%混入。
 2層 10YR3/4 暗褐色 焼土粒(φ1mm)1%未満、炭化物粒(φ1mm)1%未満混入。

第2号住居 炉
 1層 7.5YR3/4 暗褐色 炭化物中量(φ1~3mm)3%以下、パミス(φ1mm)1%以下、焼土粒(φ1mm)1%以下。

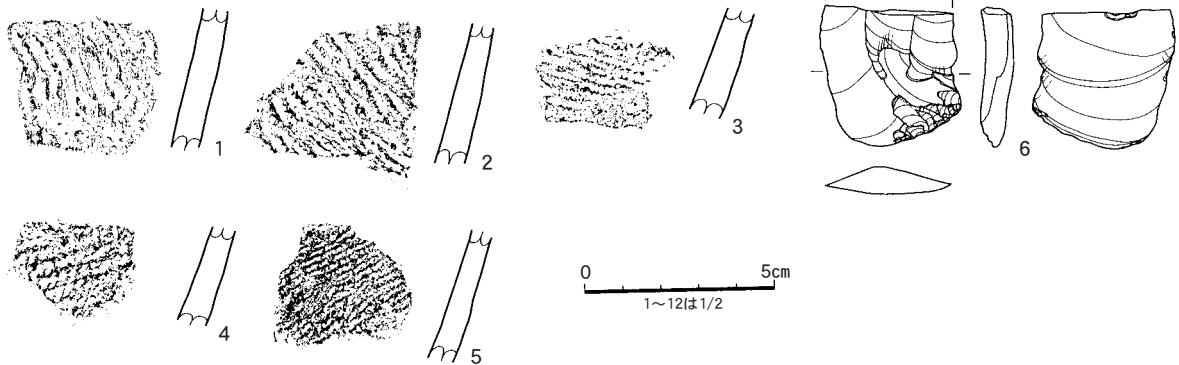


図6 第2号住居跡

〈壁・床面〉

壁は、西側のみ確認され確認面から床面にかけて傾斜している。床面は、ほぼ平坦で硬いつくりである。

〈堆積土〉

2層に分層できた。

〈炉〉

北側の壁寄りで確認された。礫を1つ伴う立石炉と思われる。炉は4cmと浅い炉であり、火熱面は軟らかい。

壁寄りにあるため、下位の面の炉とも考えられるが、下位の面を確認できなかったため、本遺構に図化したものである。

〈柱 穴〉

検出できなかった。

〈遺 物〉

土器は第1層中及び堆積土中から24片が散在して出土した。

土器は、1~4が深鉢形の胴部破片と思われ、1・2が同一個体の可能性が高い。縄文のみの施

文で、スス状炭化物の付着しているものが多く、縄文時代中期後葉期と考えられる。5は鉢形土器で、縄文の地文地に横位の沈線を施文しており、スス状炭化物の付着ががみられる。時期は縄文時代後期末葉～晩期初頭期と思われる。

石器は不定形石器が、堆積土中から1点出土した。

〈小 結〉

住居内の土器は、すべて縄文を施文した粗製縄文である。5は器厚が薄く、縄文の節が細かく、縄文時代後期末葉～晩期初頭期の土器と考えられる。堆積土中の遺物から住居跡の構築時期を求めらば、縄文時代後期末葉～晩期初頭期の時期と考えられる。

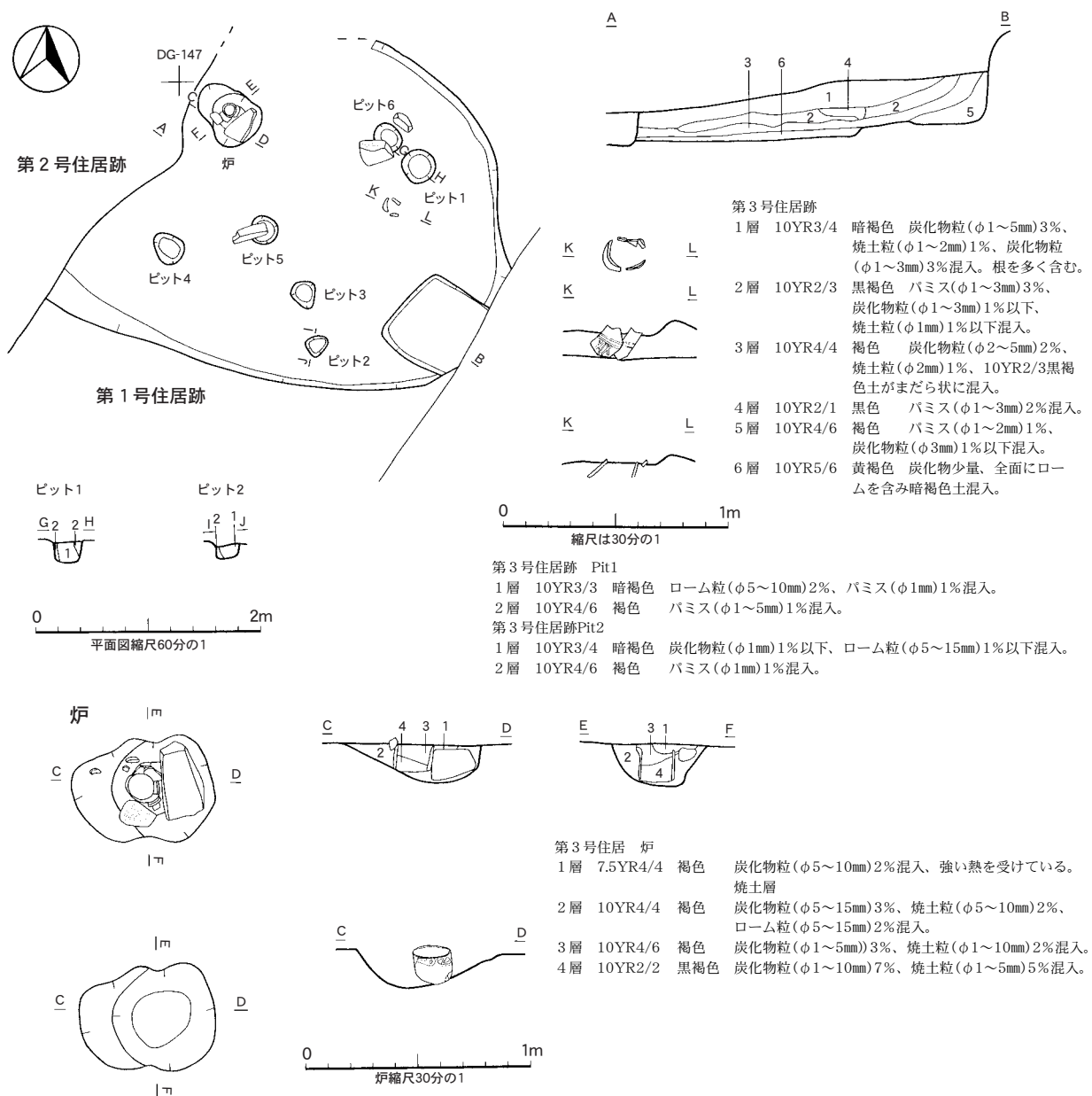


図7 第3号住居跡

第3号住居跡 (H5I01) 図7・8・9

〈位置・重複〉

本住居跡は、DG・DH-147グリッドに位置している。重複関係は、第2号住居跡に切られ、第1号住居跡を切っている。新旧関係は下記のようなになる。

古	新
第1号住居跡→	本住居跡 → 第2号住居跡

〈平面形・規模〉

西側が不明であるが、残存部から推定すると全体に丸みをもつ楕円形である。

規模は、長軸 (310cm)・短軸320cmを測る。

〈壁・床面〉

壁は南・北側のみ検出したが、床面から確認面にかけて、垂直に立ち上がる。

床面は、ほぼ平坦であり全面に粘土を用いた貼り床を呈し、硬いつくりである。

〈堆積土〉

堆積土は、6層に分層できた。第6層は住居跡の貼り床であり、断面観察等から自然体積と考えられる。

〈炉〉

西側に位置し、掘り方の内部に深鉢形と大型の礫を有するものである。土器は口縁を上にして直立状態であり、口縁から胴部にかけて残存している。火熱を受けて器表面の剥落が著しい。形態から、礫を伴う埋設炉と考えられる。

〈柱 穴〉

6個のピットが検出された。南・北側の壁寄りに位置している。配置等から柱穴と考えられる。ピット1円形 (28×26-18cm)・ピット2楕円形 (20×16-14cm)・ピット3楕円形 (26×18-10cm)・ピット4円形 (25×24-8cm)・ピット5楕円形 (30×27-14cm)・ピット6円形 (25×22-10cm)

〈付属施設〉

住居跡の壁寄りに、長径70cm・短軸60cmの深さ4cmの方形の土坑を検出した。遺物は出土しなかったが、本住居跡に伴うものと思われる。

〈遺 物〉 図8・9

土器は2が炉内から口縁と底部破片が欠損している深鉢形が正立状態で出土し、1は第2層中から斜位状態で出土した。堆積土からは212片の土器破片が出土している。

2は口縁部文様帯に粘土紐を用いて横位に区画帯を構成し、斜位及び弧状に貼り付け、粘土紐間を撚糸圧痕 (馬蹄形) を充填しており、胴部文様帯は羽状縄文である。1は口縁部から胴部下半まで残存し、口頸部の内反に横位の粘土紐を巡らして文様区画帯を構成している。口縁部文様帯には、縦位・斜位に粘土紐を貼り付け、粘土紐間に連続の刺突を充填している。4・5は地文縄文 (LRL) に、横位の沈線を三条を一単位として施文している。3・9～11は無文の土器で、3は平口縁の鉢、9～11は壺形と思われ同一個体の可能性が高い。6～8は胴部破片で、6・7は0段多条、8は単節と思われる。13は口縁部で、波状口縁の垂下部に横位沈線と連続刺突を、下位に円形の粘土紐を貼り付けている。14・15は底部破片で底面の周縁部が一段高くなっている。

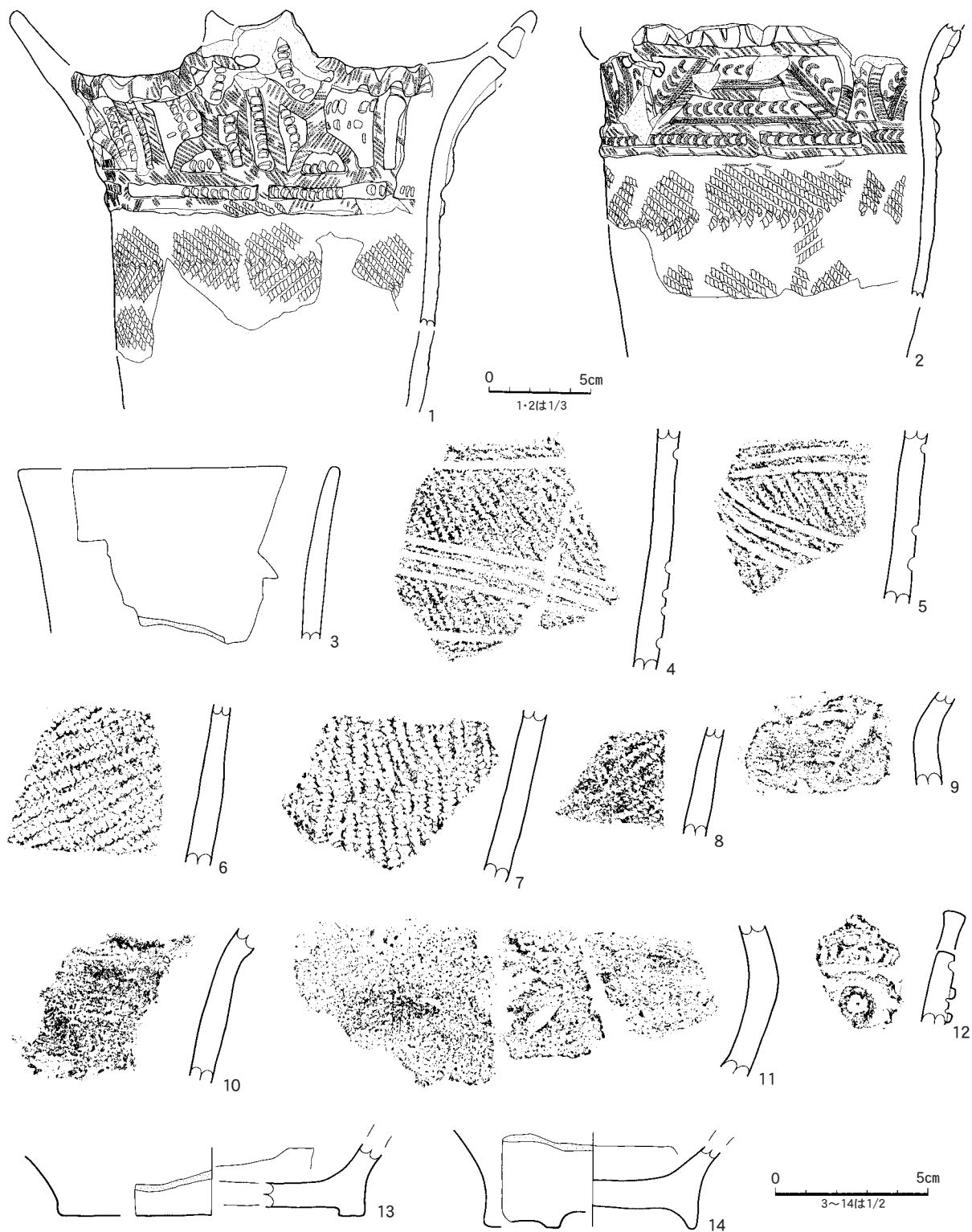


图8 第3号住居跡出土遺物(1)

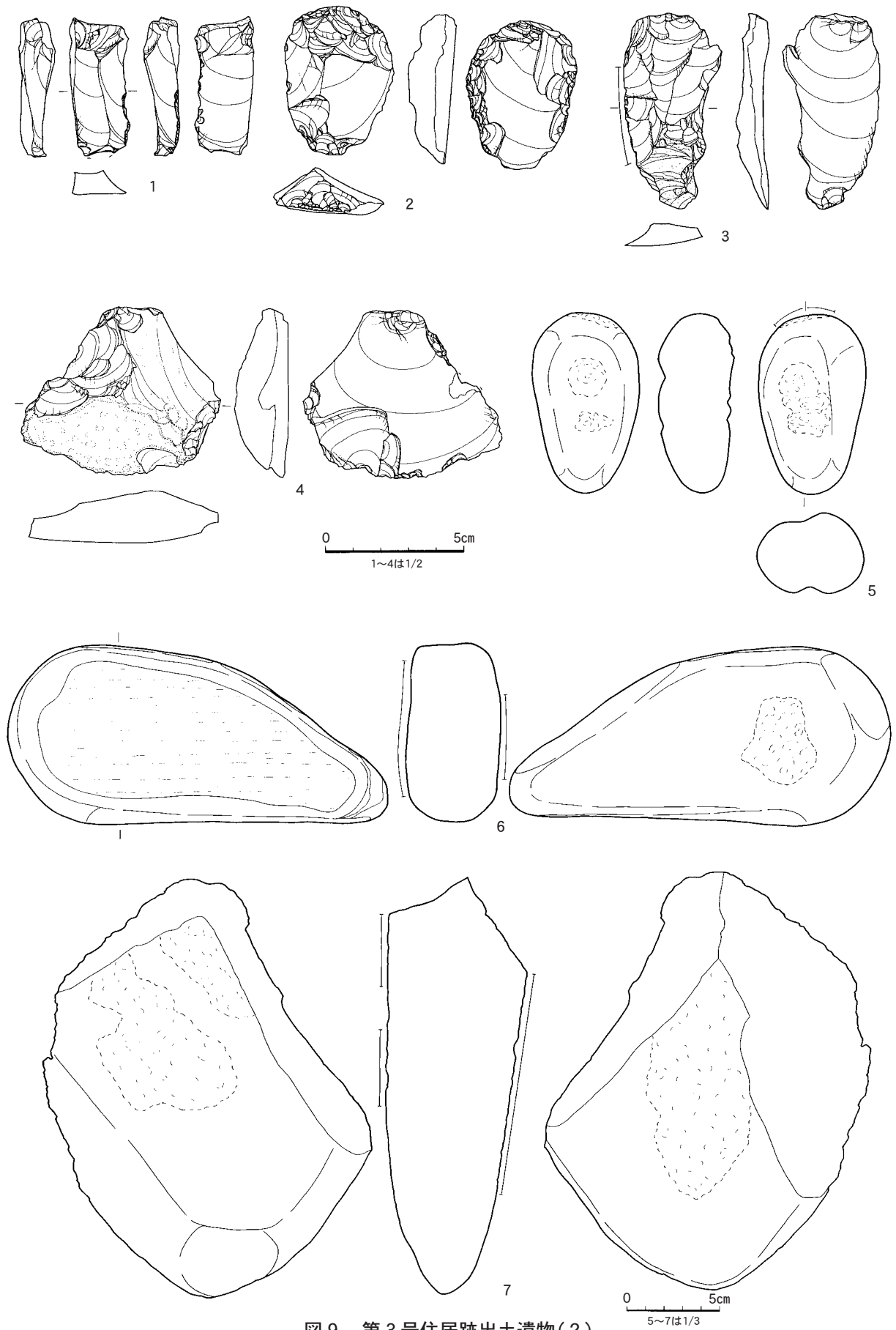


図9 第3号住居跡出土遺物(2)

時期は、2が縄文時代中期の円筒上層b式、1が縄文時代中期の円筒上層c式、4・5は縄文時代中期の椀林式、6～8は縄文時代中期後葉期、3・9～11は縄文時代後期の十腰内I式、13～15は、縄文時代後期後葉～晩期初頭期の土器と思われる。

石器は、剥片石器4点・礫石器3点が出土した。

剥片石器は、堆積土中から不定形石器が4点出土した。

礫石器は、炉内から石皿・砥石類1点・堆積土中から石皿砥石類1点・敲磨器類1点の計3点が出土した。

〈小 結〉

住居跡の構築年代は、炉内の出土土器を構築時期として判断するならば、縄文時代中期の円筒上層b式の時期と考えられる。

第4号住居跡 (IHSI06) 図10

〈位置・重複〉

DG-146・147グリッドに位置している。東側で第23号土坑と重複しており、本住居跡が古い。

〈平面形・規模〉

北側が突出しているものの、全体に丸みをもつ楕円形である。

規模は、長径270cm・短径220cmであり、一段低い部分は方形を呈しており、長径165cm・短径115cmを測る。全体に小型な住居跡である。

〈壁・床面〉

壁は確認面から、床面にかけて傾斜している。床面は、ほぼ平坦であり壁同様に硬いつくりである。床面は中央部が一段低くなっており、ベット状遺構と言われているものと考えられる。

〈堆積土〉

4層に分層できた。断面観察等から自然堆積と思われる。

〈炉〉〈柱穴〉

検出しなかった。

〈遺 物〉 図10

土器は堆積土中から9片出土した。3・7は口縁部破片で平口縁を呈する。7は口唇部上面が平坦で厚みを有する。1～6は単節を用いて施文しており、スス条炭化物の付着が多い。8は胴部破片であり、単節の縦位方向の条を呈しており、器表面に赤色顔料が塗布されている。9は底部の無文の破片で、底面の周縁部が盛り上がっている。

時期は、1～6が縄文時代中期後葉、7～9が縄文時代後期後葉～晩期初頭の時期と思われる。

石器は、礫石器2点が出土した。礫石器は、第3層中から敲磨器類1点・堆積土中から1点の計2点が出土した。

〈小 結〉

炉・柱穴は検出しなかったものの、本住居跡は床面・壁が硬いつくりであり、中央部に一段下がるベット状遺構と判断した。

構築時期であるが、堆積土中の出土土器が細片のため、時期を判断することは危険であるが、縄文

時代晩期に構築されたと考えられる。

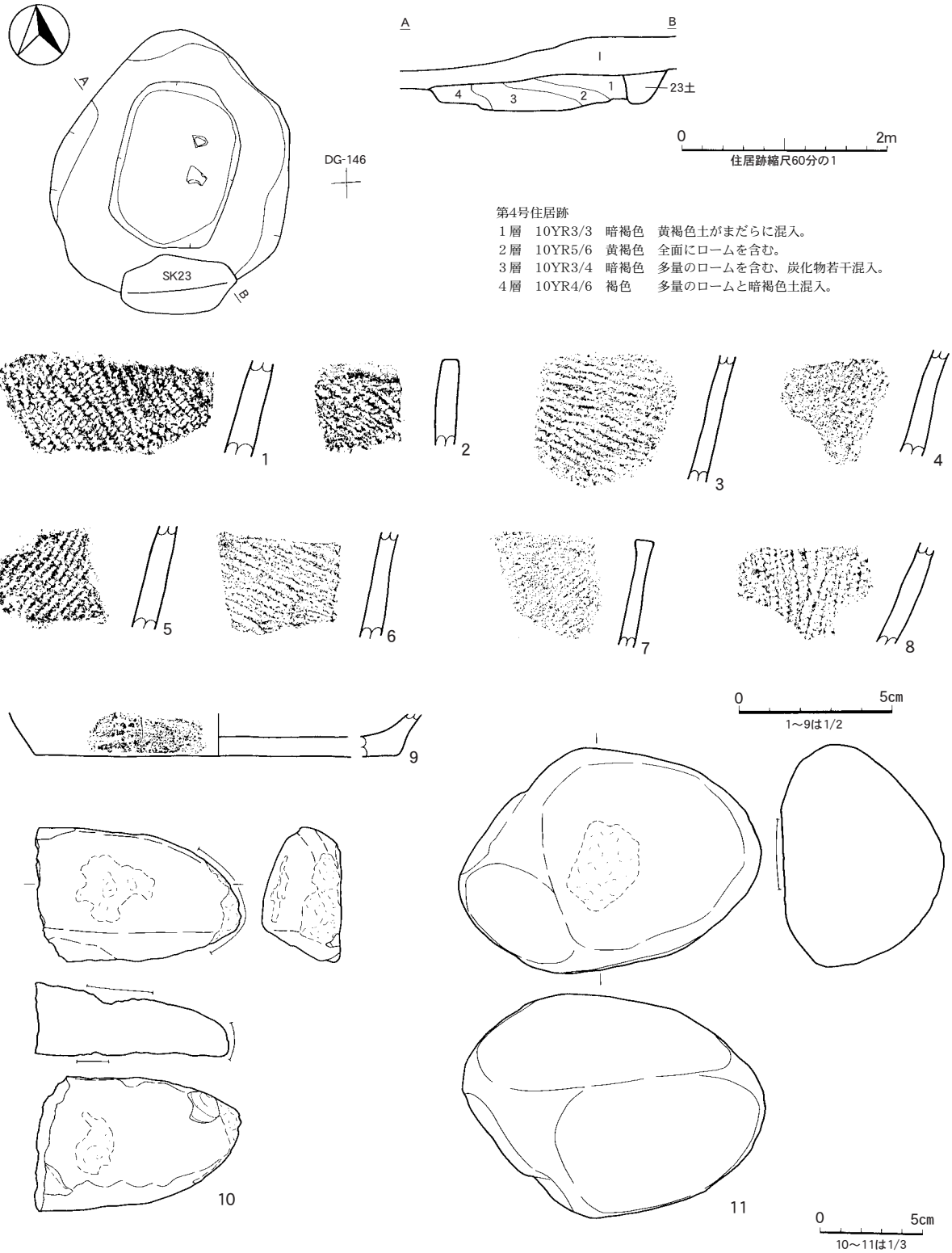


図10 第4号住居跡

2. 土 坑 図11～24

今回の調査で土坑は58基を検出した。形態及び断面形の観察からⅠ類～Ⅴ類に分類した。断面形の箱形は確認面から底面にかけて斜位で、底面が平坦なものを箱形とした。

Ⅰ類 開口部の形態は円形、断面形が 字形を呈するもの。

第2・3号土坑の2基を検出した

Ⅱ類 開口部の形態は円形、断面形が箱形を呈するもの

第6・8・16・17・19・20・24・25・31・36・38・39・42・48・51・58号土坑の16基を検出した。

Ⅲ類 開口部の形態は側縁部が、直線的で方形を呈する。断面形は箱形を呈する。

第1・4・5・9・13・18・21・27・32・35・58号土坑の11基を検出した。

Ⅳ類 開口部の形態は全体が丸みをもつ楕円形を呈し、断面形が箱形を呈する。

第7・10・12・14・15・22・23・26・34・37・46・50・54・56号土坑の14基を検出した。

Ⅴ類 開口部の形態は、一定せずに不整形を呈し、断面形が箱形を呈するもの。

第9・10・11・12・13・14・15・29・30・33・40・47・49の13基を検出した。

〈土坑内出土遺物〉図20～24

土 器

第1号土坑 図20-1～3

第1層中から21片・第3層中から1片・第5層中から1片の計24片出土。1・3が第Ⅱ群土器（縄文時代中期後葉～末葉）、2が第Ⅲ群土器（証文時代後期末葉～晩期初頭）と思われる。

第2号土坑 第2層中から4片が出土。縄文時代で時期は不明。

第11号土坑 図20-4

堆積土中から1片出土。深鉢形の胴部破片、第Ⅲ群土器（縄文時代後期末葉～晩期初頭）と思われる。

第13号土坑 図20-5・6

第1層中から5片出土。5・6は深鉢形の胴部破片第Ⅱ群土器（縄文時代中期後葉～末葉）と思われる。

第14号土坑 図20-7

第1層中から3片出土。口頸部にちかい胴部破片、第Ⅲ群土器（縄文時代後期末葉～晩期初頭）と思われる。

第20号土坑 図20-8

第1層中から1片出土。第Ⅲ群土器（縄文時代後期末葉～晩期初頭）と思われる。

第21号土坑 図20-11・12

第1層中から12片・堆積土中から2片の計14片出土。無文（器表面の剥落が著しい）と単節で、第Ⅱ群土器（縄文時代中期後葉～末葉）と思われる。

第22号土抗 図20-13～15

第1層中から16片出土。14が第Ⅱ群土器（縄文時代中期後葉～末葉）、第Ⅲ群土器（縄文時代後期末葉～晩期初頭）と思われる。

第23号土抗 図20-16

第1層中から2片出土。深鉢形の口縁部破片で無文、第Ⅲ群土器（縄文時代後期後葉～晩期初頭）と思われる。

第32号土抗 図20-17

堆積土中から4片出土。縄文時代で時期は不明。

第33号土抗 図20-18～21

第1層中から1片・第2層中から1片・第4層中から5片・堆積土中から18片の計25片出土。20は粘土塊、19が第Ⅱ群土器（縄文時代中期後葉～末葉）、18・20が第Ⅲ群土器（縄文時代後期後葉～末葉）と思われる。

第39号土抗 図20-22・23

第1層中から6片出土。深鉢形の胴部破片で、第Ⅲ群土器（縄文時代後期末葉～晩期初頭）と思われる。

第44号土抗 図20-28・図21-1～3

第1層中から5片・堆積土中から34片の計39片が出土。28は底部破片、1～3は深鉢形の胴部破片であり、第Ⅲ群土器（縄文時代後期末葉～晩期初頭）と思われる。

第45号土抗 図21-5

深鉢形の口縁部破片であり、第Ⅱ群土器（縄文時代中期 円筒上層b式）に相当すると思われる。

第56号土抗 図21-8

堆積土中から1片出土。深鉢形の胴部破片であり、無文である。スス状炭化物の付着がみられる。第Ⅲ群土器（縄文時代後期末葉～晩期初頭）に相当すると思われる。

第57号土抗 図22-2

堆積土中から出土。口頸部が内反し、上げ底を呈する平口縁の鉢形である。スス状炭化物の付着が多い。第Ⅲ群土器（縄文時代後期末葉～晩期初頭）と思われる。

第60号土抗 図21-9～18

第1層中から9片・第2層中から2片・堆積土中から38片の計49片が出土。深鉢形の胴部破片であり、15～17は無文で他は縄文を施文したいる。9～13が第Ⅱ群土器（縄文時代中後葉～末葉）、18が第Ⅲ群土器（縄文時代後期末葉～晩期初頭）、15～17は無文は第Ⅲ群と思われるが、その位置づけが前葉か後葉のどちらかに位置づけられるのかは判断できなかった。

第61号土抗 図21-20～22

第1層中から2片・第2層中から3片・第4層中から4片・第5層中から8片・堆積土中3片・床面から1片の計21片が出土。20は深鉢形の胴部破片で第Ⅱ群土器の円筒上層系と思われる。21は無文の胴部破片で薄でのつくりで、焼成が良好な土器である。22は底面の周縁が一段盛り上がり、第Ⅲ群土器（縄文時代後期後葉～晩期初頭）と思われる。石器は敲磨器類が1点出土した。

第62号土抗 図21-3～13

堆積土中から61片・第1層中から1片の計62片が出土。3・4は深鉢形の胴部破片であり、縄文を施文し炭化物の付着がみられ第Ⅱ群土器（縄文時代中期後葉～末葉）と思われる。5～7は無文土器で、6は平口縁の深鉢形、9は横位の沈線間に連続刺突を施文している。10は平口縁の口縁部であり、口唇部の上面が平滑なつくりである。11～13は深鉢形の胴部破片である。5～13は第Ⅲ群土器（縄文時代後期末葉～晩期初頭）と思われる。

第63号土抗 図21-20

堆積土中から6片出土。無文の胴部破片であり、第Ⅲ群土器（縄文時代後期末葉～晩期初頭）と思われる。

第64号土抗 図24-1～9

第1層中から26片・第2層中から5片が出土。1～4は深鉢形で、胴部から口唇部にかけて外反する平口縁の土器である。縄文のみを施文し、スス状炭化物の付着が多い。6～8は無文で焼成が良好で平口縁の土器である。7は器内外面に赤色顔料の塗布が確認される。9は台付土器の台部である。1～9の時期は第Ⅲ群土器（縄文時代後期末葉～晩期初頭）と思われる。

第65号土抗 24-10・11

第1層中から7片が出土。深鉢形の胴部破片であり、同一個体の可能性が高い土器である。スス状炭化物の付着がみられる。時期は第Ⅱ群土器（縄文時代中期後葉～末葉）と思われる。

第66号土抗 図24-12～18

堆積土中から33片が出土。12・15は無文の口縁部と口頸部破片であり、他は深鉢形で縄文を施文し、スス状炭化物の付着が多い。時期は第Ⅲ群土器（縄文時代後期末葉～末葉の時期と思われる）。

第67号土抗 図24-19

堆積土中から、ほぼ直立状態で出土、胴部中央から口縁部にかけて残存している。口頸部が反し波状口縁を呈する深鉢形である。口頸部と胴部に一条の粘土紐を巡らして文様区画帯を構成している。口頸部文様帯には、波状口縁部の垂下部に6字状の粘土紐を貼り付けており、撚糸圧痕を施文、胴部には縄文を施文している。

石 器

石器は剥片石器20点・礫石器12点が出土した。

第18号土抗 堆積土中から半円状扁平打製石器1点出土（図20-10）

第20号土抗 第1層中から敲磨器類1点出土（図20-9）

第22号土抗 第1層中から不定形石器1点出土

第31号土抗 堆積土中から不定形石器1点出土

第32号土抗 堆積土中から不定形石器1点出土

第44号土抗 堆積土中から石鎌1点（図20-25）・石匙1点（図20-27）・不定形石器3点（図20-24・26）・円盤状石製品が1点出土（図21-4）の計6点が出土

第45号土抗 堆積土中から不定形石器1点出土（図21-6）

第47号土抗 第4層中から、石錐1点出土（図21-7）

第56号土抗 堆積土中から不定形石器 1点出土

第61号土抗 第2層と第5層中から敲磨器類が各々1点の計2点が出土（図21-19、図22-1）

第62号土抗 堆積土中から不定形石器3点（図22-14・15・18）・敲磨器類が3点（図22-16・17・19）の計6点が出土

第63号土抗 第5・9層中から不定形石器が各々1点、ピット中から石槍1点（図23-2）、底面から石皿・砥石類が1点（図23-4）・敲磨器類が2点（図23-1・3）の計6点が出土

第64号土抗 第1層中から不定形石器3点出土

第67号土抗 底面から石皿・砥石類が1点出土

なお、剥片（チップ・フレイク）が出土した土抗は第1・14・16・20・21・27・32・33・41・45・47・56号土抗から出土している。

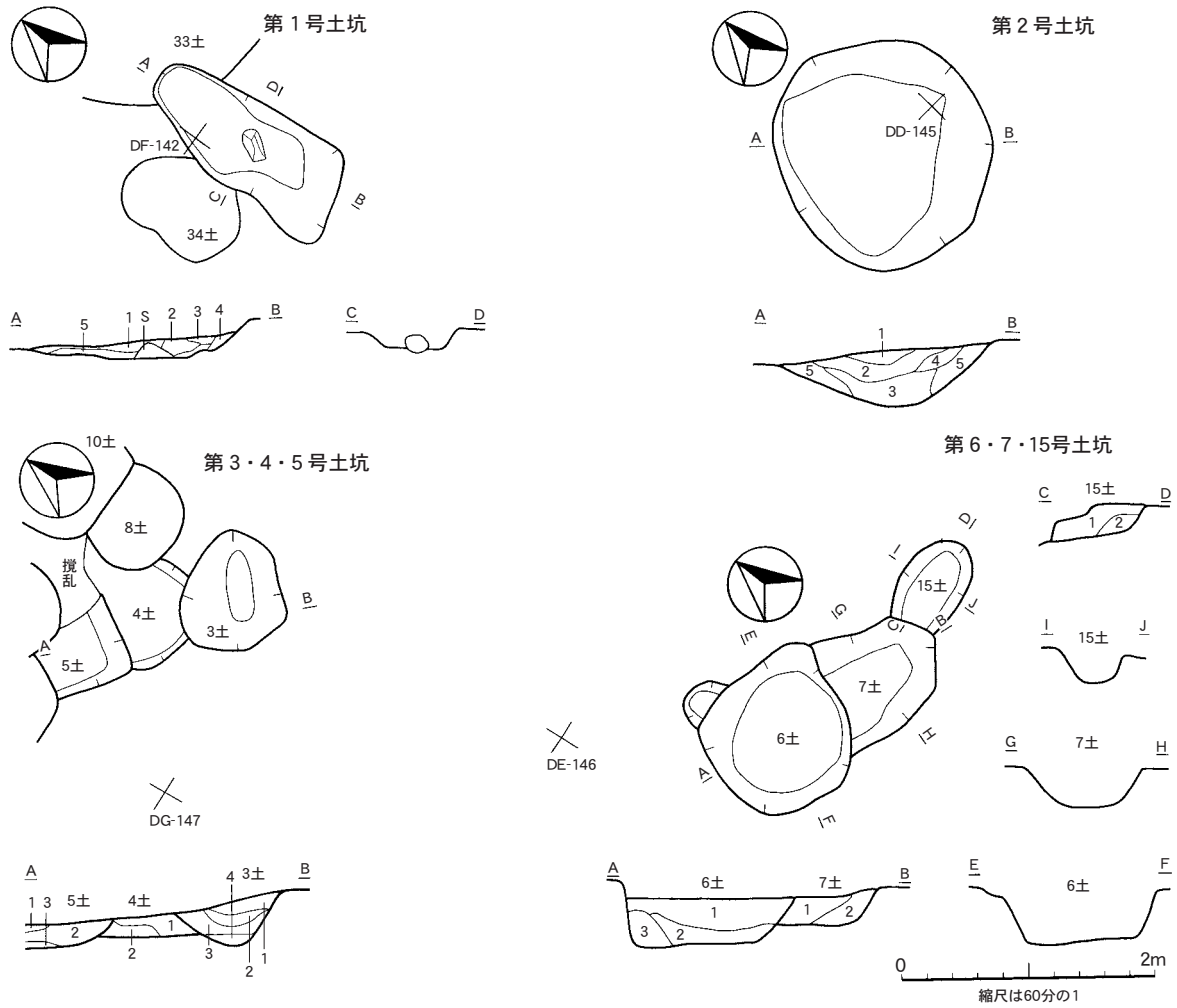
土製品 図20-21

第33号土抗 第1層中から手づくねの粘土塊が出土した。

〈小 結〉

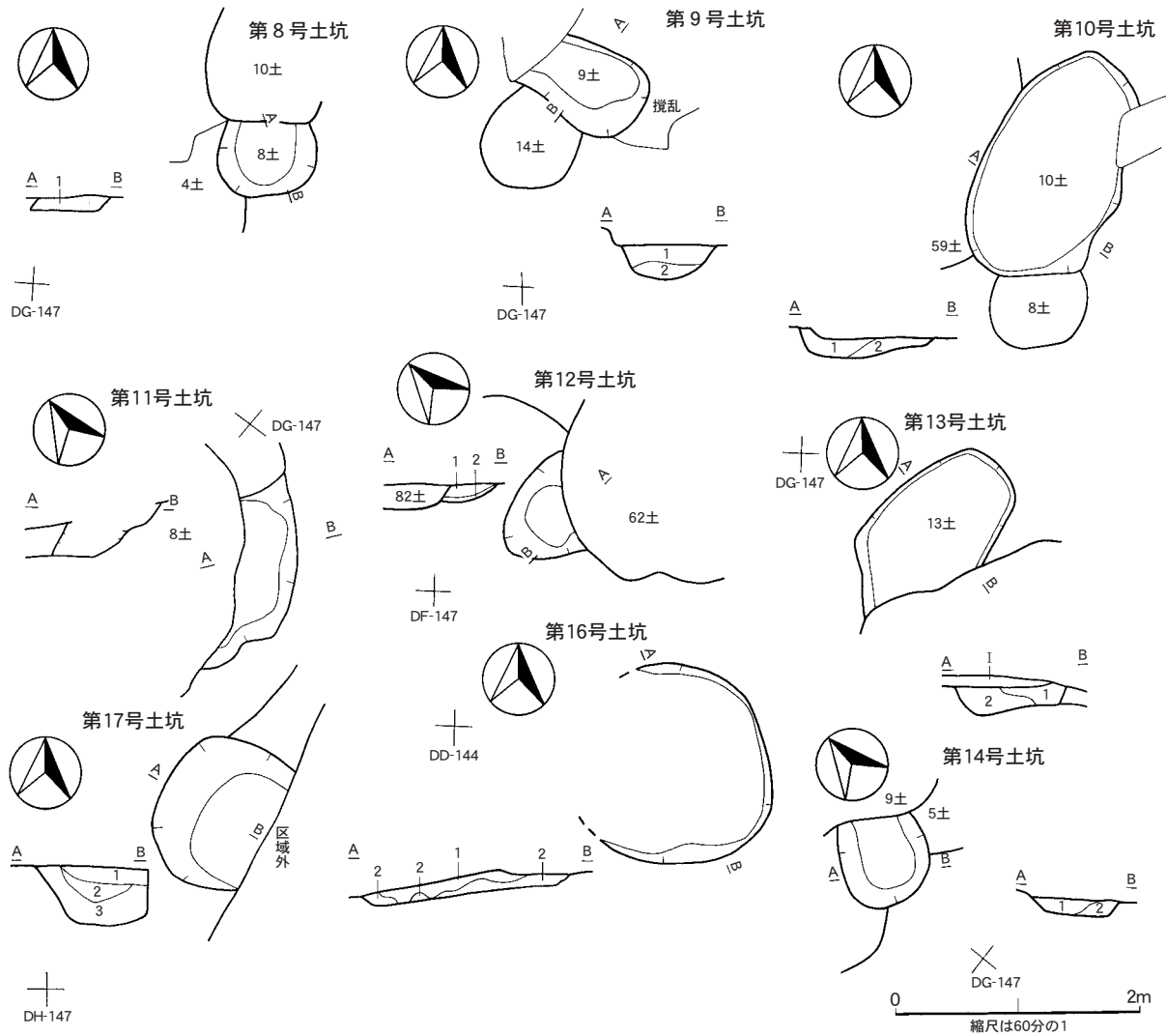
土坑から土器が出土したのは21基である。多くは土器破片であり、その出土状態は堆積土中に散在して出土していた。この出土状態は土坑が埋没する過程で土器破片が混入した事と考えられる。そのため土坑の構築時期は、前記したように土器が埋没過程時の土器である事から、土坑と遺物とに時間的に間隔がみられ、明確な構築時期の根拠とすることには無理があると思われる。

しかし、土坑内の出土遺物が構築時期に近く、土坑の構築段階と関連が強い遺物で、土坑内からの出土遺物を時期決定の一つと判断するならば、その時期は縄文時代中期後葉～末葉と縄文時代後期末葉～晩期の二時期に構築されたと考えられ、その土坑の多くの主体は縄文時代後期末葉～晩期初頭の時期に構築されたと考えられる。



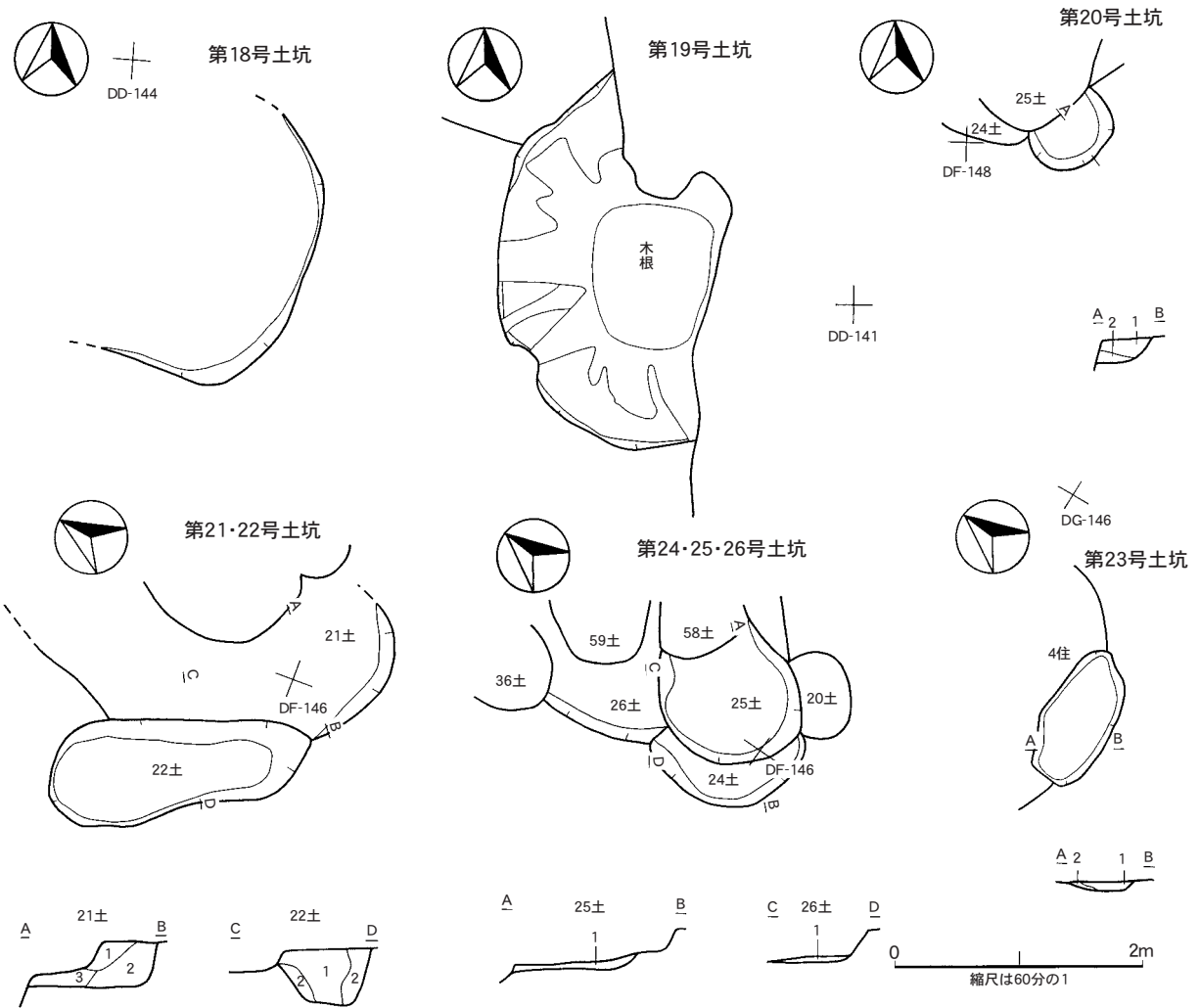
- 第1号土坑
- 1層 10YR2/2 黒褐色 炭化物粒(φ1~2mm)3%。
 - 2層 10YR4/6 褐色 10YR3/4暗褐色土との混合土、炭化物粒(φ2~4mm)3%。
 - 3層 10YR3/4 暗褐色 炭化物粒(φ1~3mm)2%。
 - 4層 10YR4/6 褐色 炭化物粒(φ1~2mm)1%。
 - 5層 10YR3/4 暗褐色 炭化物粒(φ2~10mm)3%。
- 第2号土坑
- 1層 10YR4/6 褐色 炭化物粒(φ1~3mm)5%、ローム粒(φ5mm)1%、礫(φ5mm)1%。
 - 2層 7.5YR3/4 暗褐色 炭化物粒(φ1~5mm)3%、ローム粒(φ2mm)1%、礫(φ5mm)1%。
 - 3層 10YR3/4 暗褐色 炭化物粒(φ1~5mm)2%、7.5YR5/6明褐色ブロック(φ5mm)1%、礫(φ5mm~30mm)7%。
 - 4層 7.5YR4/4 褐色 炭化物粒(φ1~2mm)2%。
 - 5層 10YR4/6 褐色 炭化物粒(φ1mm)1%。
- 第3号土坑
- 1層 10YR3/3 暗褐色 パミス少量含み、全体にバサバサしている。
 - 2層 10YR3/4 暗褐色 パミス、小砂粒を含む。
 - 3層 10YR4/4 褐色 ローム土混入。
 - 4層 10YR4/6 褐色 全面にローム土混入。
- 第4号土坑
- 1層 10YR3/3 暗褐色 炭化物、小砂粒を含む。
 - 2層 10YR3/2 暗褐色 黄褐色土がブロック状に混入。
- 第5号土坑
- 1層 10YR3/2 暗褐色 パミス混入。
 - 2層 10YR3/4 暗褐色 ローム土がブロック状に混入。
 - 3層 10YR5/6 黄褐色 小礫を含み、暗褐色土混入。
- 第6号土坑
- 1層 10YR3/4 暗褐色 炭化物粒(φ1~10mm)7%、パミス(φ1~5mm)2%、10YR4/4褐色土と10YR2/2黒褐色土がまばらに混入。
 - 2層 10YR4/4 褐色 パミス(φ1~5mm)5%、炭化物粒(φ3~10mm)1%、ローム粒(φ5~10mm)3%混入。
 - 3層 10YR4/6 褐色 パミス(φ1~3mm)1%、炭化物粒(φ1mm)1%以下混入。
- 第7号土坑
- 1層 10YR3/3 暗褐色 炭化物粒(φ5~10mm)3%、ローム粒(φ5~10mm)2%、パミス(φ1mm)1%混入。
 - 2層 10YR4/4 褐色 炭化物粒(φ1~3mm)1%混入。
- 第15号土坑
- 1層 10YR4/4 褐色 炭化物粒(φ1~3mm)1%、ロームブロック(φ10~50mm)20%混入。
 - 2層 10YR4/6 褐色 炭化物粒(φ1mm)1%以下、パミス(φ1~5mm)1%混入。

図11 土坑(1)



- 第8号土坑
1層 10YR3/4 暗褐色 多量の小ロームブロック混入。
- 第9号土坑
1層 10YR3/3 暗褐色 パミス少量混入。
2層 10YR3/4 暗褐色 炭化物、パミスを多量に含む。
- 第10号土坑
1層 10YR3/3 暗褐色 黄褐色土混入、小砂粒を含む。
2層 10YR2/2 黒褐色 小ロームブロック混入、炭化物含む。
- 第12号土坑
1層 10YR3/4 暗褐色 ローム塊(φ5~10mm)がまばらに10%、炭化物粒(φ1mm)全体に1%未満混入。
2層 10YR4/4 褐色 ローム塊(φ5mm)がまばらに5%。
- 第13号土坑
1層 10YR5/8 黄褐色 ロームがしま状に混入、暗褐色土混入。
2層 10YR3/3 暗褐色 若干の炭化物、パミスを含む。
- 第14号土坑
1層 10YR3/3 暗褐色 前面に黄褐色土混入。
2層 10YR2/2 黒褐色 炭化物若干含む。
- 第16号土坑
1層 10YR3/4 暗褐色 炭化物粒(φ1~3mm)2%、10YR4/4褐色シルト粒(φ5~20mm)3%。II層の土で木根で凹凸が激しい。
2層 10YR4/6 褐色 炭化物粒(φ1~2mm)1%、10YR4/4褐色ブロック(φ10~50mm)20%。
- 第17号土坑
1層 10YR2/2 黒褐色 ローム土若干混入。
2層 10YR3/2 黒褐色 木の根・腐った葉など多量に含み全体にボロボロしている。
3層 10YR3/3 暗褐色 小礫・ローム土若干混入。

図12 土坑(2)



第20号土坑

- 1層 10YR3/3 暗褐色 炭化物、小砂粒少量混入。
- 2層 10YR3/1 黒褐色 炭化物若干、パミス少量混入。

第21号土坑

- 1層 10YR3/2 黒褐色 全体的にボソボソし草木痕多い。
- 2層 10YR3/4 暗褐色 ロームがブロック状に混入。
- 3層 10YR4/6 褐色 全面にローム土を含み、暗褐色土混入。

第22号土坑

- 1層 10YR3/3 暗褐色 炭化物若干、パミス少量混入。
- 2層 10YR5/6 黄褐色 全面にローム土を含み、暗褐色土混入。

第23号土坑

- 1層 10YR5/6 黄褐色 暗褐色土混入。
- 2層 10YR2/2 黒褐色 炭化物若干、ローム土混入。

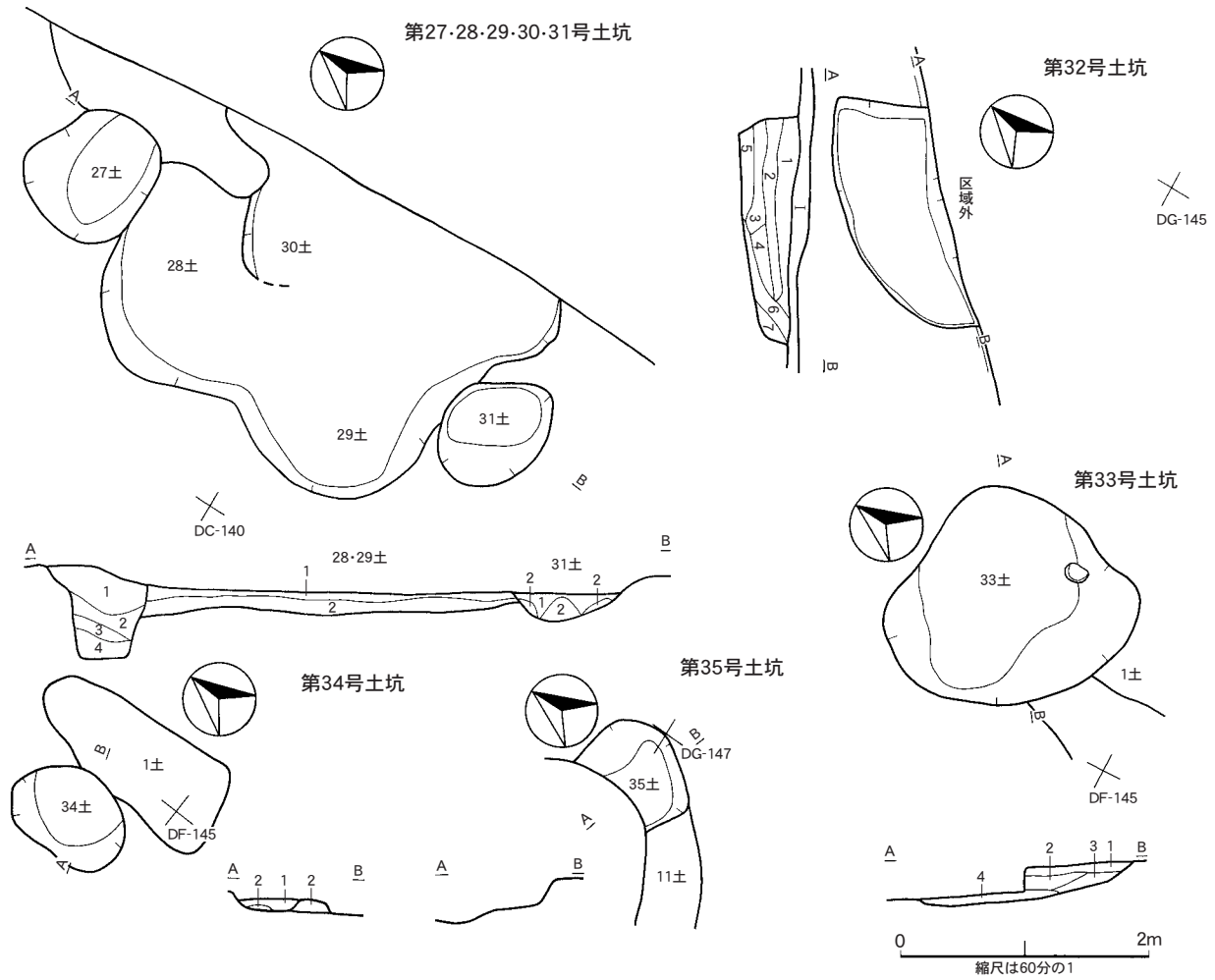
第25号土坑

- 1層 10YR3/2 黒褐色 全面にローム土混入。

第26号土坑

- 1層 10YR3/3 暗褐色 炭化物若干、ローム土混入。

図13 土坑(3)



第27号土坑

- 1層 10YR3/3 暗褐色 炭化物粒(φ1~2mm)2%混入、10YR4/4褐色シルトとの混合土。
- 2層 10YR4/4 褐色 炭化物粒(φ2mm)2%混入、10YR5/6粘土質シルトブロックとの混合土。
- 3層 10YR3/3 暗褐色 10YR5/6粘土質シルト粒(φ5~10mm)2%、炭化物粒(φ1~2mm)1%混入。
- 4層 10YR5/6 黄褐色 礫(φ40~60mm)10%、炭化物粒(φ1)1%混入。

第28・29号土坑

- 1層 10YR3/4 暗褐色 炭化物粒(φ1mm)1%混入、10YR4/6褐色粘土質シルトとの混合土。
- 2層 10YR4/4 褐色 炭化物粒(φ1mm)1%、10YR4/6褐色シルト(φ5~20mm)5%混入。

第31号土坑

- 1層 10YR2/3 黒褐色 10YR4/6褐色シルト(φ5~8mm)2%混入。
- 2層 10YR3/3 暗褐色 炭化物粒(φ1~5mm)1%、10YR4/6褐色粘土質シルト(φ5~15mm)20%混入。

第32号土坑

- 1層 10YR3/3 暗褐色 パミス、小ローム粒全面に混入。
- 2層 10YR5/6 黄褐色 暗褐色土混入。
- 3層 10YR3/1 黒褐色 ロームを全体に含み小礫混入。
- 4層 10YR3/4 暗褐色 ローム土混入。
- 5層 10YR4/6 褐色 ローム土がしま状に混入。
- 6層 10YR3/4 暗褐色 小ロームブロック混入。
- 7層 10YR4/4 褐色 ローム、暗褐色土、炭化物若干混入

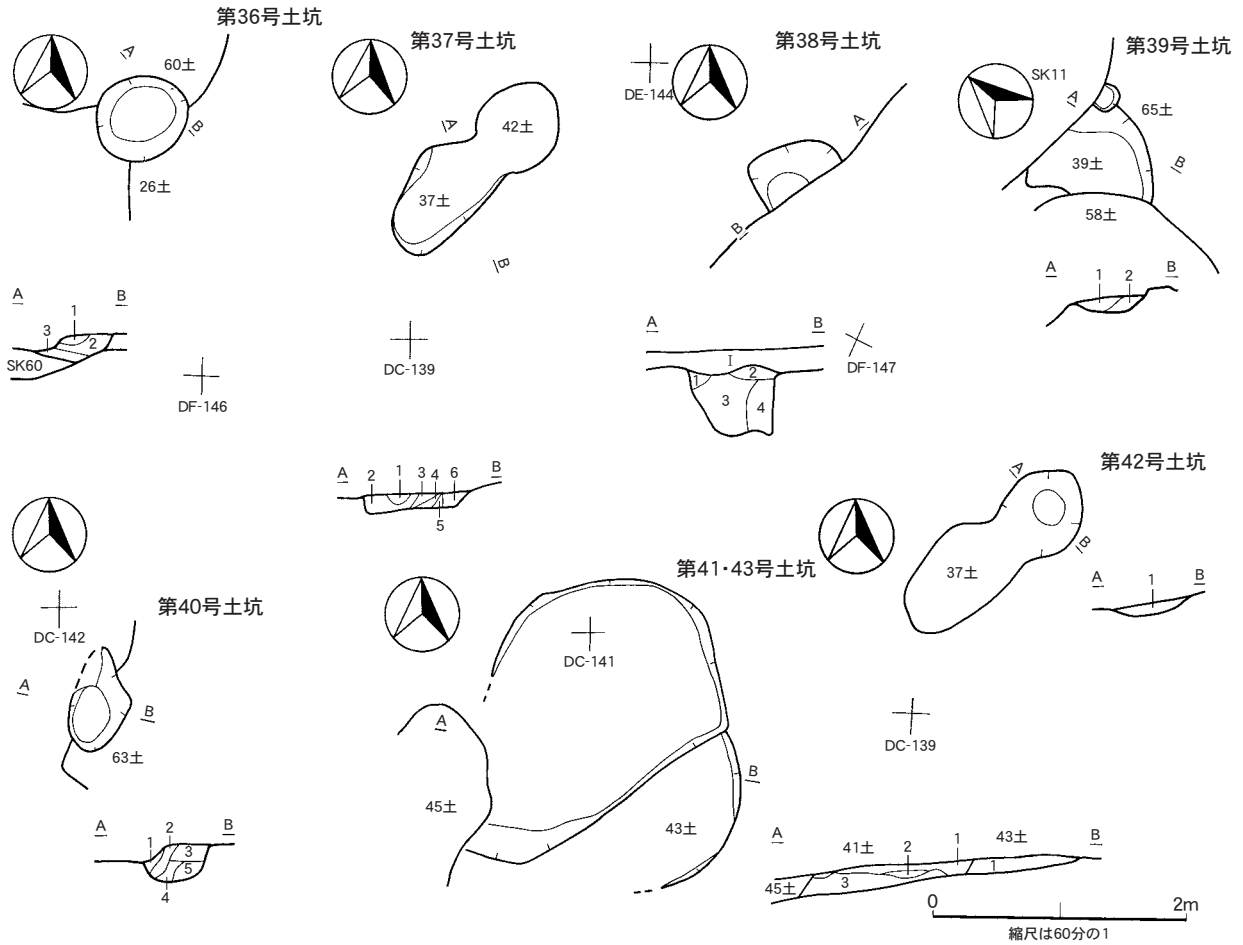
第33号土坑

- 1層 10YR5/6 黄褐色 全面にローム土を含み、暗褐色土混入。
- 2層 10YR3/3 暗褐色 炭化物若干、小ロームブロック混入。
- 3層 10YR2/3 黒褐色 炭化物・パミス少量混入。
- 4層 10YR4/4 褐色 全面にロームブロック混入。

第34号土坑

- 1層 10YR3/2 暗褐色 ローム土がブロック状に混入、炭化物若干混入。
- 2層 10YR5/6 黄褐色 ロームを全体に含み、暗褐色土混入。

図14 土坑(4)



第36号土坑

- 1層 10YR8/6 黄褐色 ロームを全体に含み、暗褐色土混入。
- 2層 10YR4/4 褐色 ローム全体に混入。
- 3層 10YR4/6 褐色 ロームを全体に含み、暗褐色土混入。

第37号土坑

- 1層 10YR3/4 暗褐色 炭化物粒(φ1mm)1%、10YR4/6褐色シルト粒(φ1mm)1%。木根痕。
- 2層 10YR3/4 暗褐色 10YR4/6褐色シルト粒(φ2~20mm)2%。
- 3層 10YR3/4 暗褐色 10YR4/6褐色シルト粒(φ2~15mm)2%。木根痕。
- 4層 10YR4/4 褐色 炭化物粒(φ1mm)1%、10YR4/6褐色シルト粒との混合土。
- 5層 10YR3/4 暗褐色 10YR4/6褐色シルト粒(φ1~5mm)2%。層右部ややしまりなし。木根痕。
- 6層 10YR4/6 褐色 炭化物粒(φ1~2mm)2%、10YR3/4暗褐色シルト粒との混合土。

第38号土坑

- 1層 10YR3/3 暗褐色 炭化物粒(φ1~10mm)5%。
- 1層 10YR3/4 暗褐色 1層と同じような土質。
- 2層 10YR4/4 褐色 炭化物粒(φ1~2mm)2%。
- 3層 10YR3/4 暗褐色 炭化物粒(φ1~3mm)5%。
- 4層 10YR4/6 褐色 炭化物粒(φ1~2mm)3%、2.5YR4/6赤褐色ブロック(φ1cm)混入。

第39号土坑

- 1層 10YR3/4 暗褐色 炭化物粒(φ2~3mm)2%。
- 2層 10YR4/6 褐色 10YR3/4暗褐色土がまばらに10%混入。

第40号土坑

- 1層 10YR4/4 褐色 炭化物粒(φ1mm)1%、礫(φ5mm)1%、10YR5/8黄褐色土粒(φ20mm)1%。
- 2層 10YR4/4 褐色 炭化物粒(φ1~2mm)2%、礫(φ5mm)1%、10YR5/8黄褐色土粒(φ5~20mm)2%。
- 3層 10YR4/6 褐色 炭化物粒(φ1mm)1%、礫(φ5mm)1%、10YR5/8黄褐色土粒(φ5mm)1%。
- 4層 10YR4/4 褐色 炭化物粒(φ1~3mm)2%、10YR3/3暗褐色シルトとの混合土。層上部しまり無くくずれやすい。
- 5層 10YR4/4 褐色 炭化物粒(φ1~2mm)1%。

第41号土坑

- 1層 10YR2/2 黒褐色 炭化物粒(φ2mm)1%、10YR5/6黄褐色粘土質シルト粒(φ1~40mm)7%。
- 2層 10YR5/6 黄褐色 炭化物粒(φ1mm)1%、10YR4/4褐色シルトとの混合土。
- 3層 10YR5/6 黄褐色 礫(φ10~20mm)2%混入。

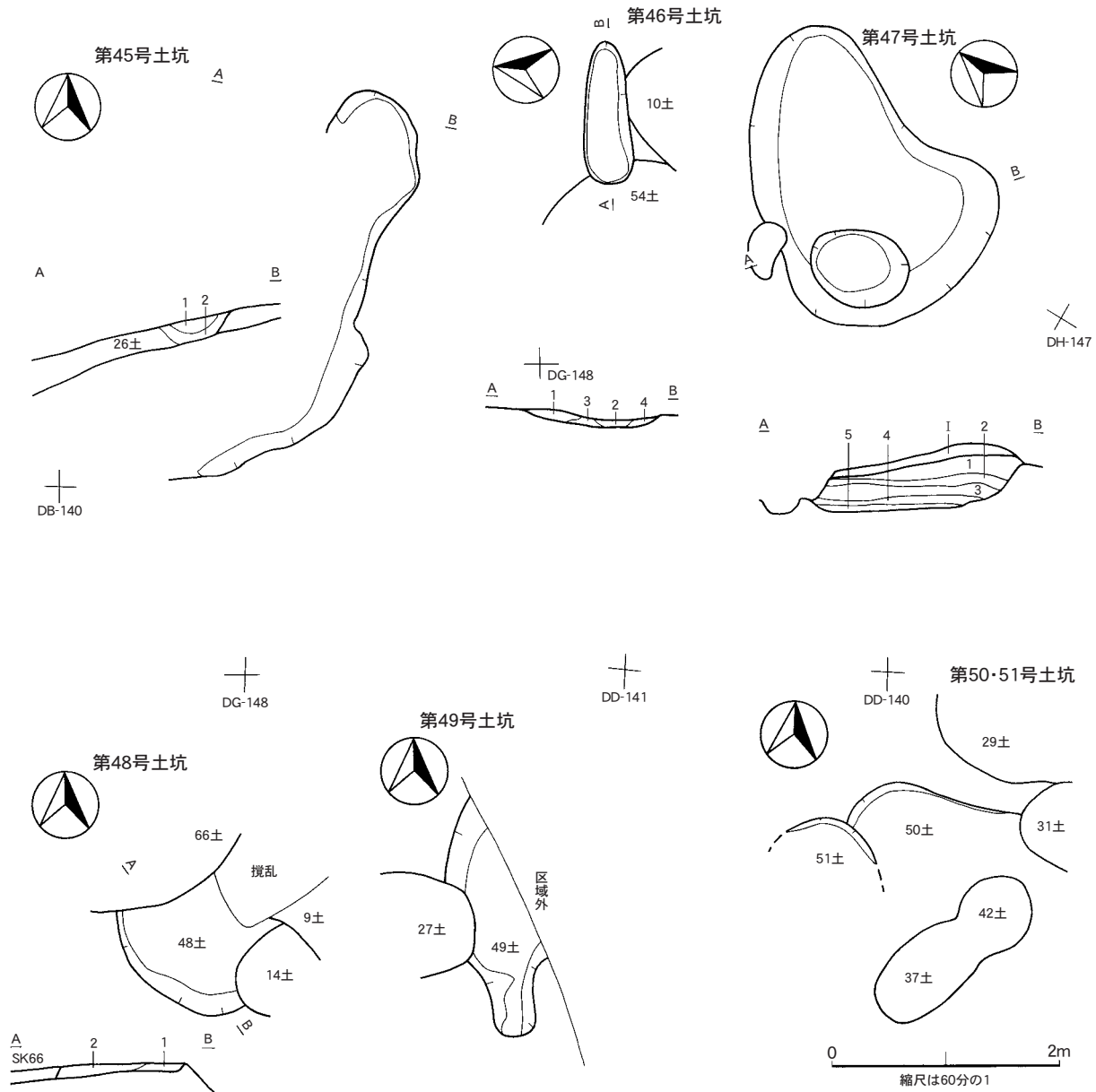
第42号土坑

- 1層 10YR3/4 暗褐色 炭化物粒(φ1~5mm)3%、礫(φ5mm)1%、10YR5/8黄褐色土粒(φ5~20mm)2%。

第43号土坑

- 1層 10YR5/6 黄褐色 炭化物粒(φ1~2mm)1%、10YR2/3黒褐色シルトとの混合土。

図15 土坑(5)



第45号土坑

- 1層 10YR4/4 褐色 10YR2/2黒褐色シルトとの混合土。
- 2層 10YR4/6 褐色 炭化物粒(φ1~3mm)1%、礫(φ10~100mm)10%、層中部に7.5YR3/4暗褐色シルトが10%混入。

第46号土坑

- 1層 10YR3/3 暗褐色 炭化物粒(φ1mm)・ローム粒(φ2mm)全体に1%未満混入。
- 2層 10YR3/3 暗褐色 ローム塊(φ10)まばらに5%、炭化物粒(φ1mm)全体に1%未満混入。
- 3層 10YR4/4 褐色 10YR4/6褐色土塊(φ1cm)まばらに10%混入。
- 4層 10YR3/4 暗褐色 炭化物粒(φ1mm)全体に1%未満混入。

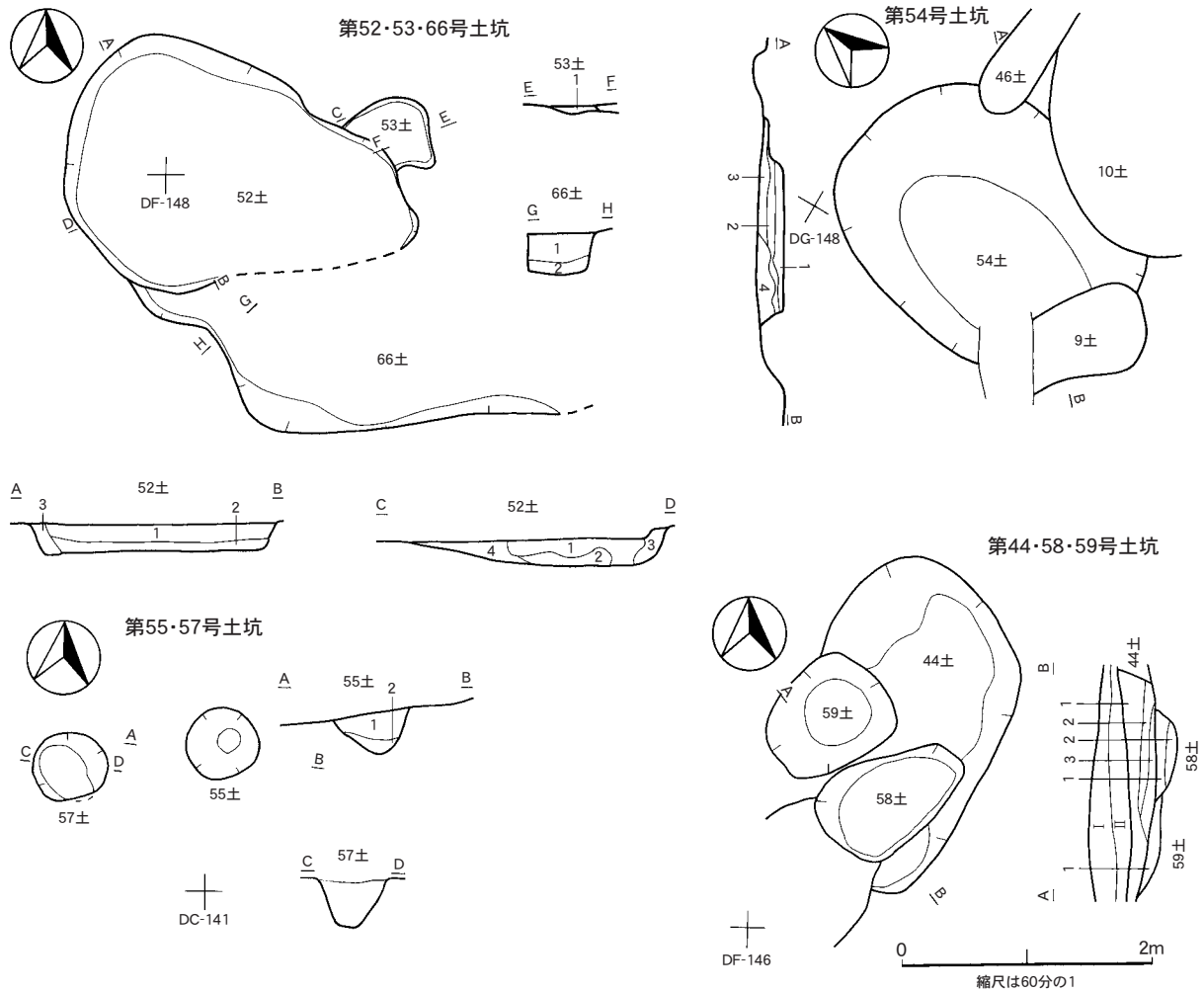
第47号土坑

- 1層 10YR2/2 黒褐色 小礫(φ1cm)全体に5%、炭化物粒全体に1%未満混入。
- 2層 10YR2/3 黒褐色 炭化物粒(φ1mm)全体に5%混入。
- 3層 10YR2/2 黒褐色 10YR4/6褐色土塊(φ10mm)まばらに20%、炭化物粒(φ2~5mm)全体に1%未満混入。
- 4層 10YR1.7/1 黒色 ローム塊を帯状に40%含む、炭化物粒(φ1mm)混入。
- 5層 10YR2/2 黒褐色 炭化物粒(φ1mm)全体に1%未満混入、ローム塊(φ2~5mm)まばらに5%混入。

第48号土坑

- 1層 10YR3/3 暗褐色 炭化物若干含み、小礫混入。
- 2層 10YR4/4 褐色 全体にローム粒を含む。

図16 土坑(6)



第44号土坑

- 1層 10YR3/3 暗褐色 黄褐色土混入、小礫を含む。
- 2層 10YR6/6 明黄褐色 若干暗褐色土含む。
- 3層 10YR5/6 黄褐色 暗褐色土混入、全体にロームを含む。

第52号土坑

- 1層 10YR3/3 暗褐色 ローム粒(φ5~15mm)5%、パミス(φ1mm)1%混入。
- 2層 10YR2/2 黒褐色 ローム粒(φ5mm)2%、パミス(φ1mm)1%混入。
- 3層 10YR4/6 褐色 パミス(φ1~3mm)1%、10YR3/3暗褐色土がまだら状に混入。
- 4層 10YR2/3 黒褐色 ローム粒(φ5~15mm)5%、パミス(φ1mm)4%混入。

第53号土坑

- 1層 10YR2/3 黒褐色 10YR4/4褐色土が带状に混入。

第54号土坑

- 1層 10YR3/3 暗褐色 炭化物粒(φ1~2mm)全体に1%未満、10YR4/6褐色土塊(φ5~10mm)がまばらに10%混入。
- 2層 10YR4/6 褐色 10YR2/3黒褐色土10YR4/3にぶい黄褐色土をまばらに(φ10mm)10%ずつ含む。
- 3層 10YR4/4 褐色 炭化物粒(φ1mm)全体に1%未満混入。
- 4層 10YR2/2 黒褐色 炭化物粒(φ2mm)全体に2%未満混入。

第55号土坑

- 1層 10YR4/6 褐色 炭化物粒(φ1~2mm)1%、礫(φ3~15mm)1%。
- 2層 10YR4/4 褐色 炭化物粒(φ1~2mm)1%。

第57号土坑

- 1層 10YR3/4 暗褐色 炭化物粒(φ1~2mm)1%、礫(φ10~150mm)25%[層下部に集中]。

第58号土坑

- 1層 10YR4/4 褐色 ロームを全体に含み、暗褐色土混入。
- 2層 10YR6/6 明黄褐色 ロームを全体に含み、暗褐色土混入。

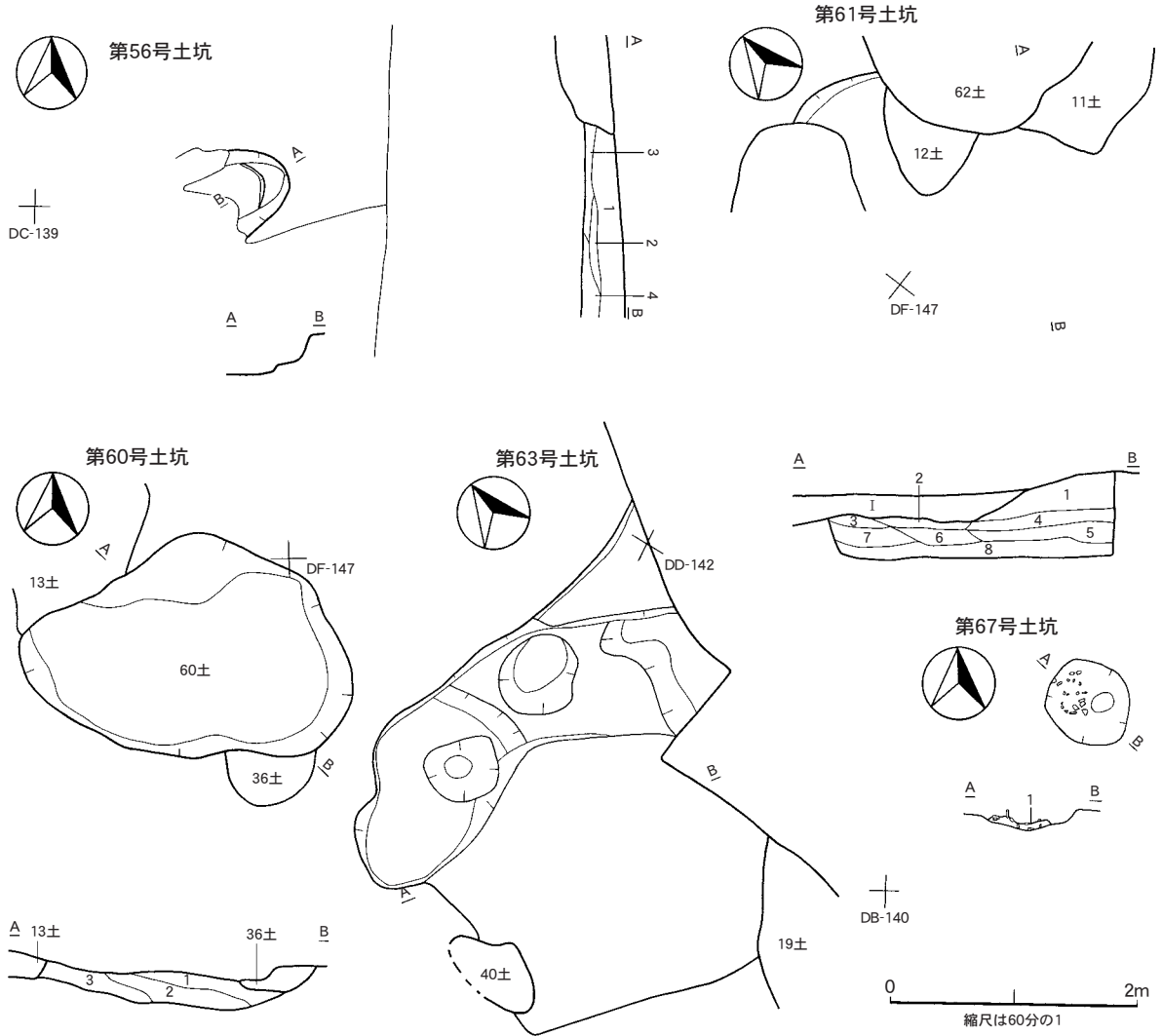
第59号土坑

- 1層 10YR3/4 暗褐色 ロームが小ブロック状に混入。

第66号土坑

- 1層 10YR3/4 暗褐色 ローム粒(φ5~20mm)10%、炭化物粒(φ1~2mm)1%混入。
- 2層 10YR2/2 黒褐色 ローム粒(φ5~15mm)5%、炭化物粒(φ1~2mm)1%混入。

図17 土坑(7)



第60号土坑

- 1層 10YR3/3 暗褐色 全面にローム混入、炭化物若干含む。
- 2層 10YR7/6 明黄褐色 しま状にローム混入、若干小礫含む。
- 3層 10YR5/6 黄褐色 全面にローム土、暗褐色土混入。

第61号土坑

- 1層 10YR2/3 黒褐色 炭化物粒(φ2mm)全体に1%未満、ローム粒(φ20~30mm)が下部にまばらに1%混入。
- 2層 10YR3/3 暗褐色 炭化物粒(φ2mm)全体に1%未満、浮石(φ20~30mm)が全体に1%未満混入。
- 3層 10YR3/4 暗褐色 ローム塊(φ30~50mm)がまばらに40%、炭化物粒(φ1mm)全体に1%未満混入。
- 4層 10YR4/6 褐色 (φ20~30mm)程の小礫1%程度混入。

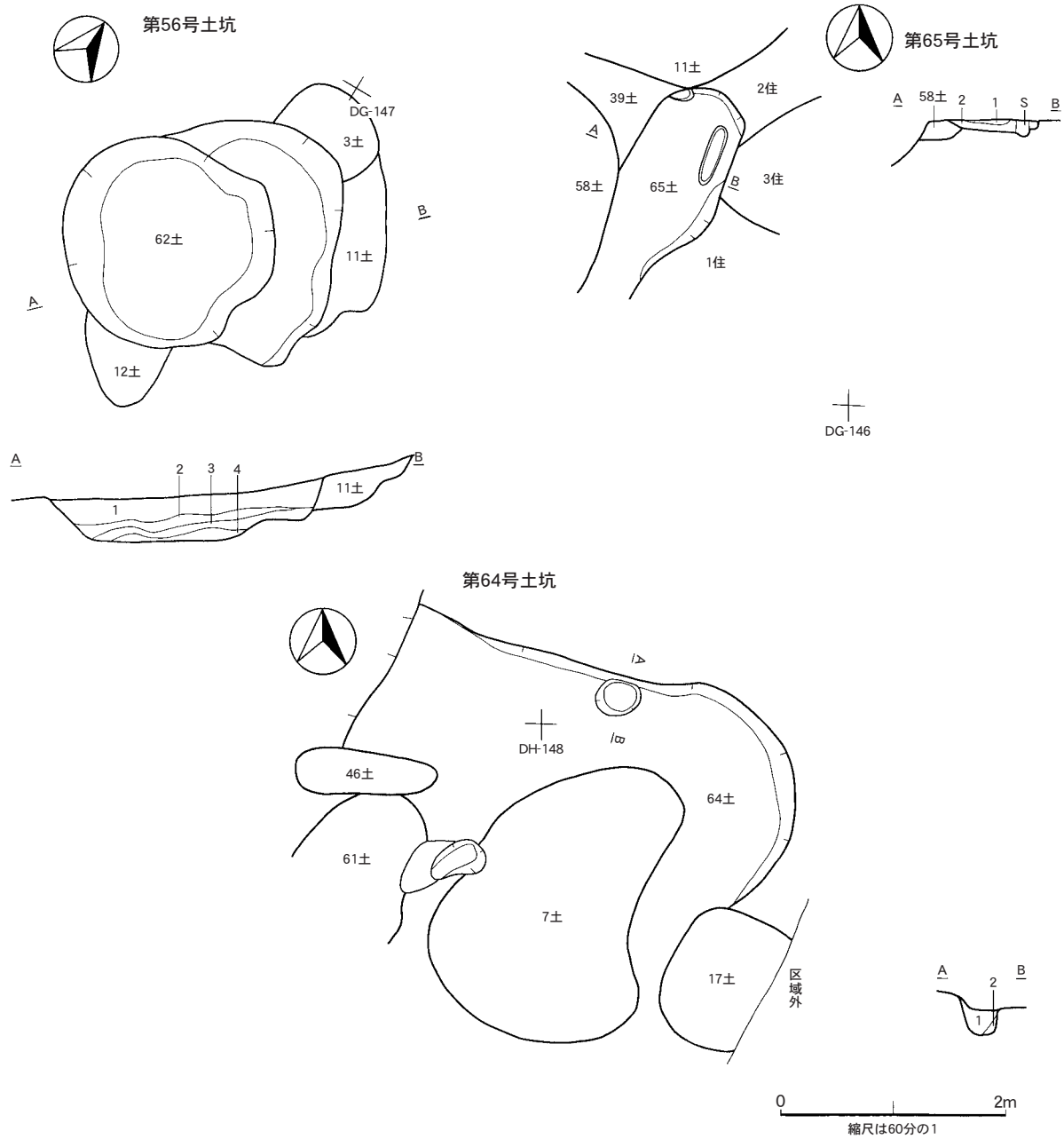
第63号土坑

- 1層 10YR3/3 暗褐色 炭化物粒(φ1~3mm)2%、10YR4/6褐色シルト粒(φ5~15mm)2%混入。
- 1層 10YR2/3 黒褐色 炭化物粒(φ1~2mm)1%、10YR4/6褐色シルト粒(φ5~10mm)2%混入。
- 2層 10YR2/2 黒褐色 炭化物粒(φ1~3mm)1%、10YR4/6褐色シルト粒(φ2~10mm)3%混入。
- 3層 10YR2/2 黒褐色 炭化物粒(φ1mm)1%、10YR4/6褐色シルト粒(φ1mm)1%混入。
- 4層 10YR3/3 暗褐色 炭化物粒(φ1~2mm)1%、10YR4/6褐色シルトとの混合土。
- 5層 10YR2/3 黒褐色 炭化物粒(φ1mm)1%。
- 6層 10YR3/4 暗褐色 炭化物粒(φ1~2mm)2%、層左端に10YR2/1黒色土が5%混入。
- 7層 10YR4/4 褐色 炭化物粒(φ1mm)1%、礫(φ10~30mm)1%混入。
- 8層 10YR4/4 褐色 炭化物粒(φ1~2mm)2%、礫(φ10~50mm)5%混入。

第67号土坑

- 1層 10YR4/4 褐色 炭化物粒(φ2~7mm)3%、礫(φ10~30mm)10%混入。

図18 土坑(8)



第62号土坑

- 1層 10YR2/3 黒褐色 炭化物粒(φ2mm)全体に1%未満、ローム粒(φ20~30mm)が下部にまばらに1%混入。
- 2層 10YR3/4 暗褐色 ローム塊(φ30~50mm)がまばらに40%、炭化物粒(φ1mm)全体に1%未満混入。
- 3層 10YR3/2 黒褐色 ローム塊(φ10~30mm)がまばらに10%、ローム粒(φ1~2mm)全体に1%未満、炭化物粒(φ1mm)全体に1%未満混入。
- 4層 10YR3/3 暗褐色 ローム塊(φ10mm)がまばらに5%、炭化物粒(φ1mm)全体に2%未満混入。

第64号土坑

Pit1

- 1層 10YR3/4 暗褐色 炭化物粒(φ1mm)全体に1%未満混入。
- 2層 10YR4/4 褐色 10YR3/4暗褐色土がまばらに10%混入、小礫(φ10mm)まばらに5%混入。

第65号土坑

- 1層 10YR3/4 暗褐色 炭化物粒(φ2mm)全体に1%未満混入。
- 2層 10YR4/6 褐色 炭化物粒(φ1mm)全体に1%未満混入。
- 3層 10YR3/4 暗褐色 炭化物粒(φ1~2mm)全体に1%未満混入、ローム塊(φ10mm)が下部に20%。

図19 土坑(9)

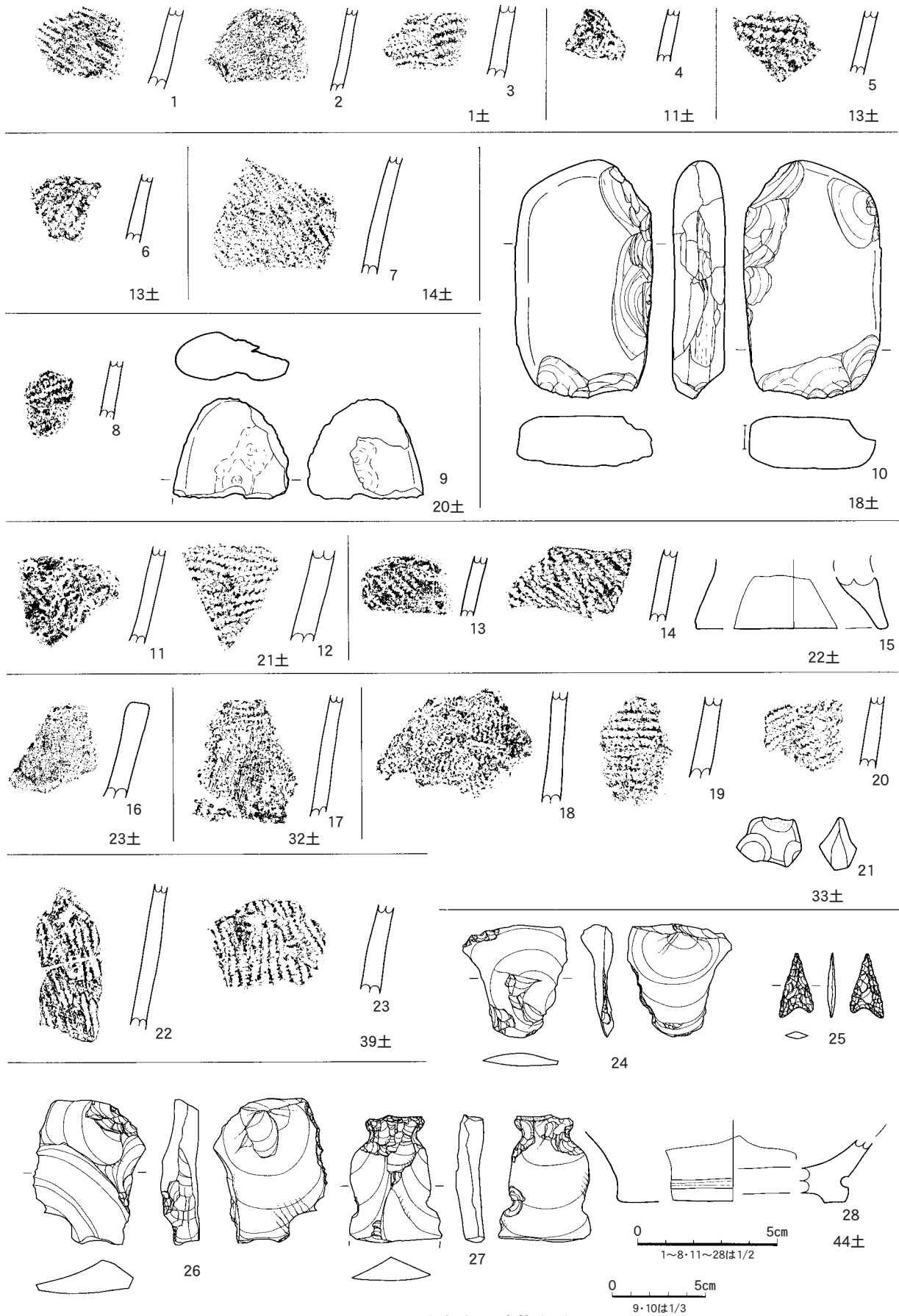


図20 土坑内出土遺物(1)

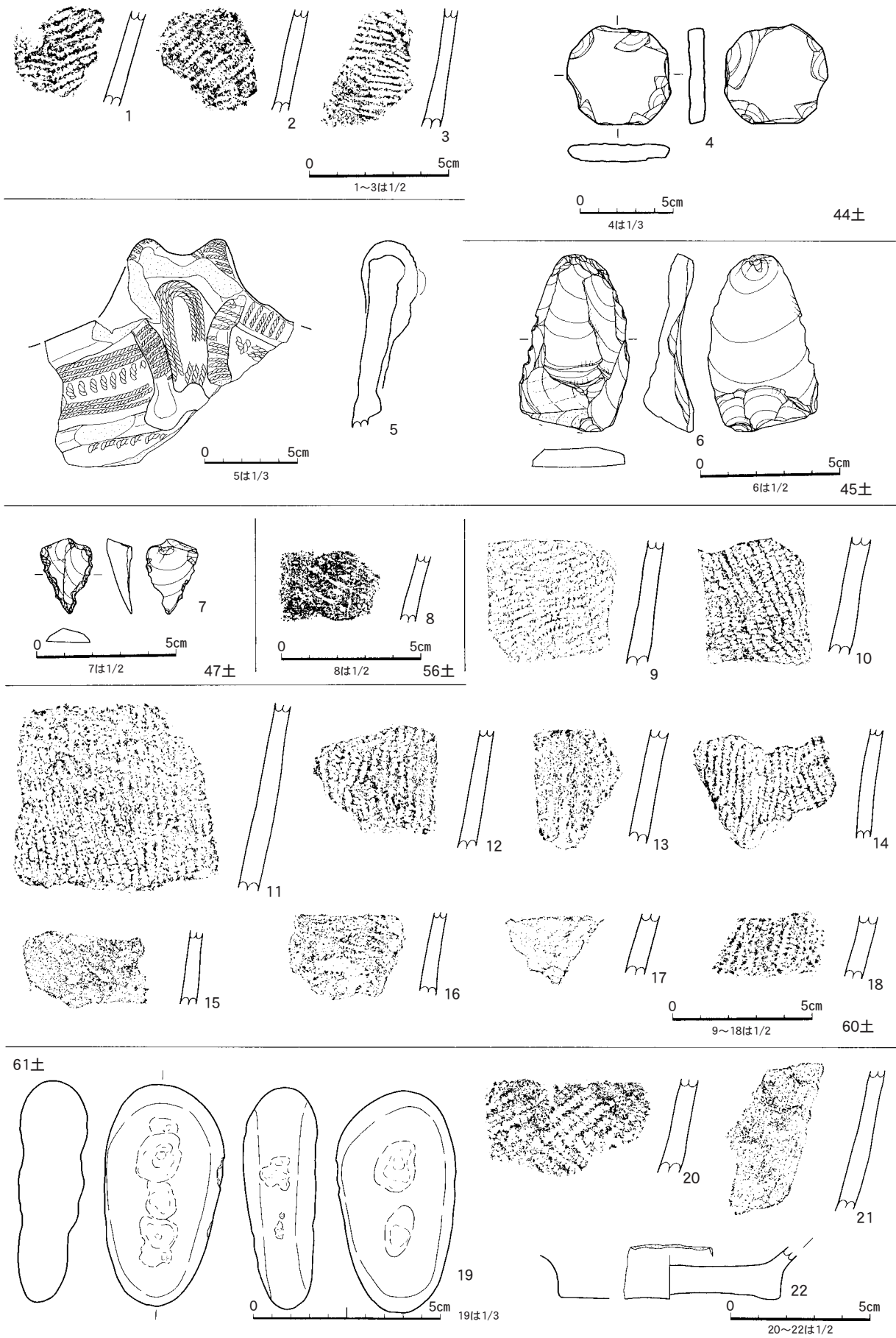


図21 土坑内出土遺物(2)

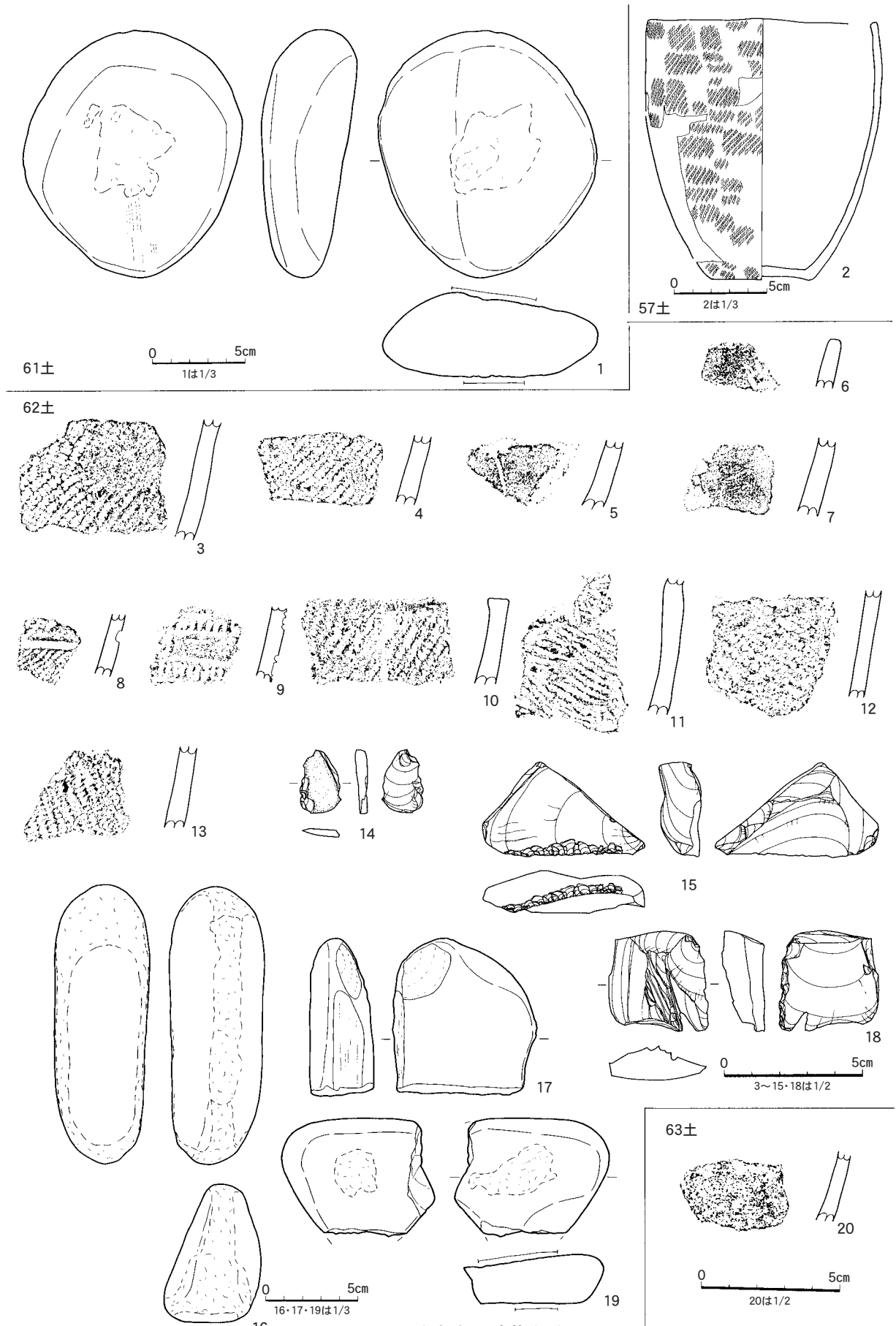


図22 土坑内出土遺物(3)

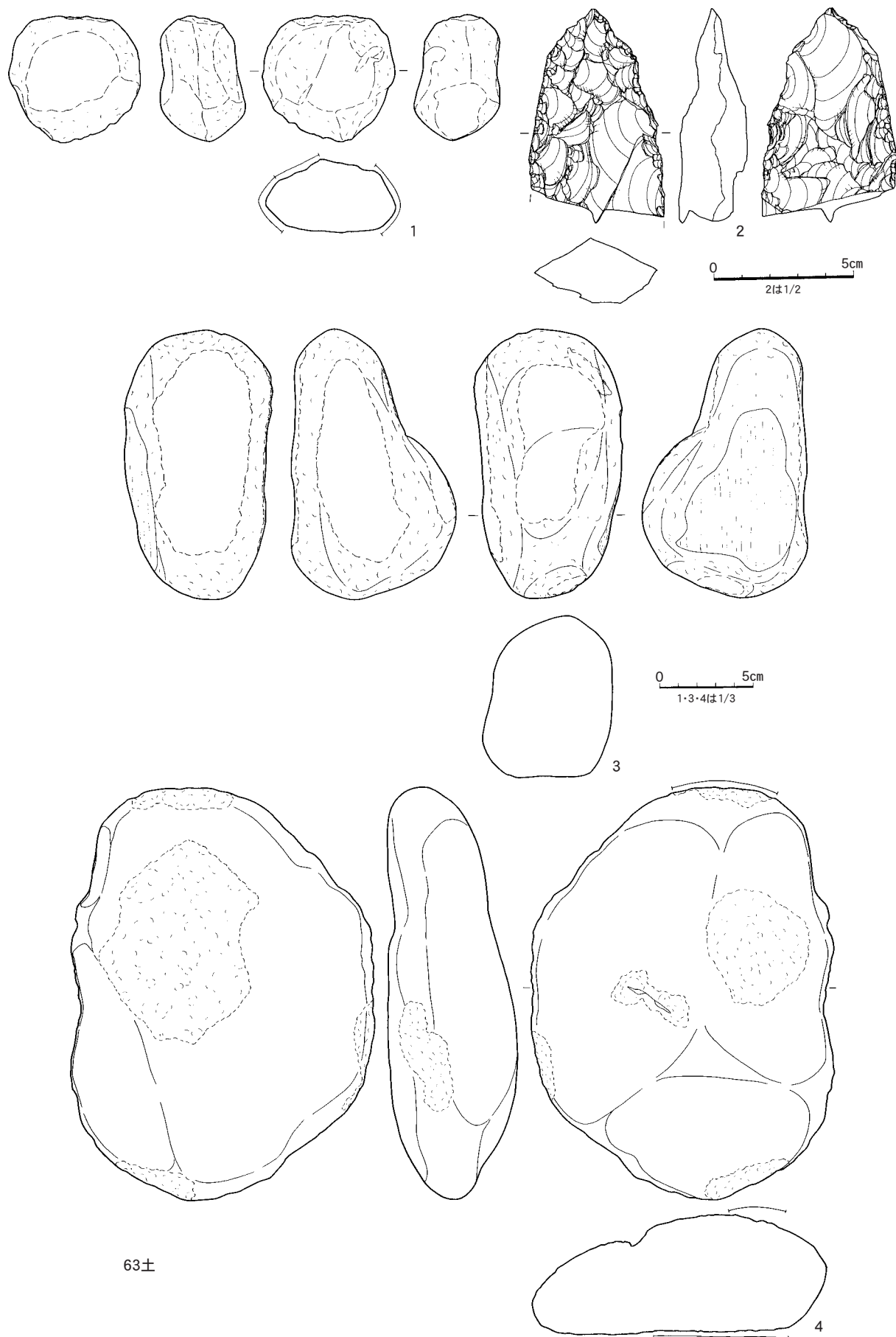


图23 土坑内出土遺物(4)

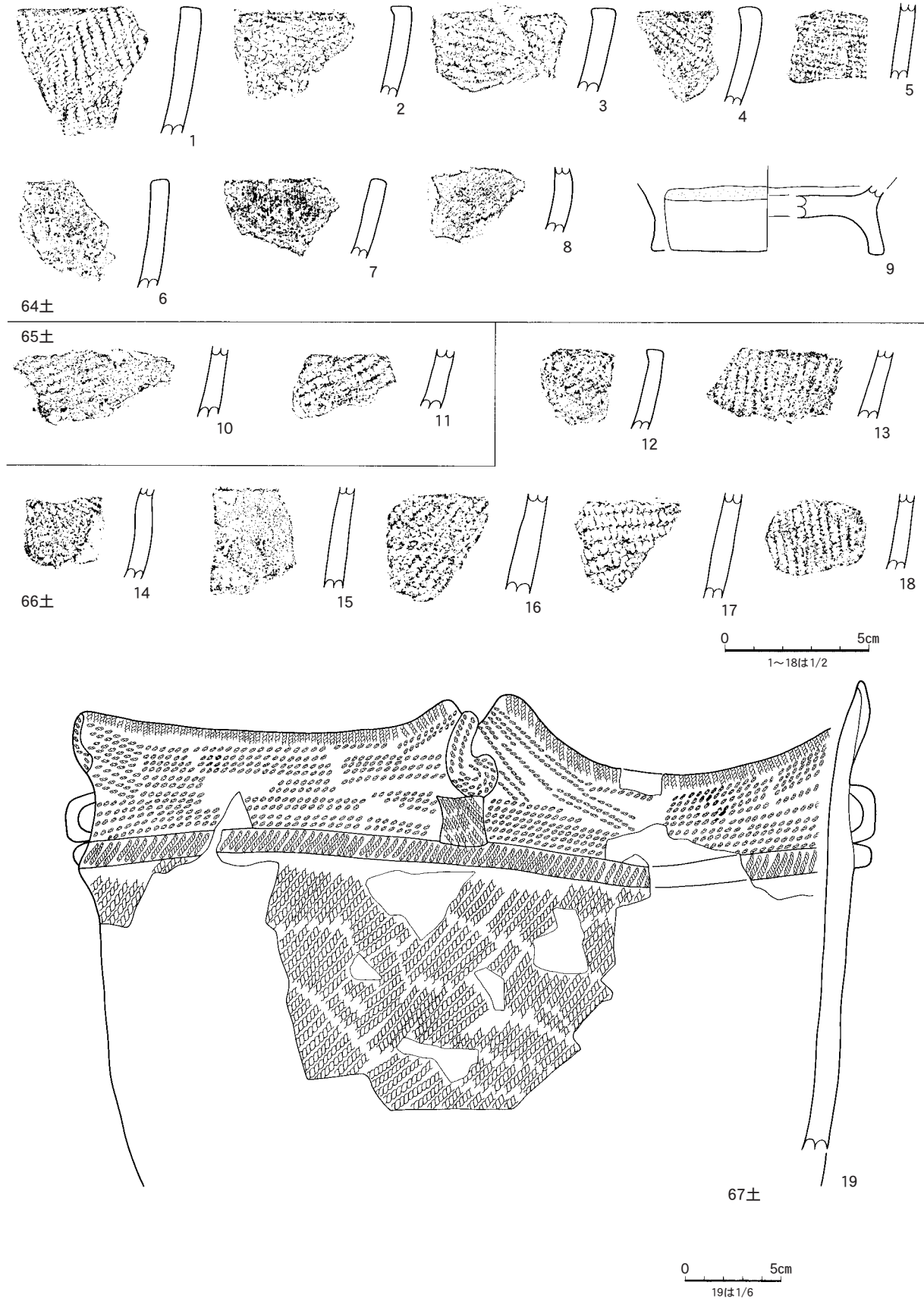


図24 土坑内出土遺物(5)

3. 硬化面 図25

第1層を除去後に、周辺とは硬さが違う硬い面を検出した。粘土等を用いて貼り床を呈しているのでは無く、上位から押されて硬くなったと理解した。今回の調査では3基確認されたので、第1～3硬化面と名称を付し記載する。

第1硬化面（旧番号SI01）

DF・DG-148グリッドに位置し、範囲は長径320cm・短径315cmを測り、ほぼ円形を呈する。

土 器 図25-1・2

硬化面から8片が散在して出土。深鉢・鉢形の胴部破片であり、1は地文縄文地に縦位の沈線を施文、2はスス状炭化物が器表面に付着している。時期は、縄文時代中期後葉～末葉にかけての時期と思われる。

石器は出土しなかった。

第2硬化面（旧番号SI05）

DG-146グリッドに位置し長径（400cm）・短径330cmを測り、西側・東側は区域外のため調査できなかったが、推定範囲は残存部から推定すると思われる。

土 器 図25-3～6

硬化面からやや上位から、16片が全体に散在して出土した。3・4・6は平口縁を呈し、1は0段多条、他は単節を施文している。口唇部上面は平坦で厚みを有する。5は三又状突起の下部に弧状文を施文している。時期は、縄文時代後期後葉～晩期初頭と考えられ、3・4・6は口唇部のつくりから同時期と判断したものである。

石 器 図25-7 不定形石器が1点出土した。

第3硬化面（旧番号SI07）

DD-140・141グリッドに位置し、長径（490cm）・短径（220cm）を測る。北側は区域外のために確認できなかった。残存部は不整形を呈する。

土 器 図25-8・9

硬化面から1点、硬化面からやや上位から8片が出土した。7は口頸部で斜行縄文を施文し、スス状炭化物が付着している。8は底部破片で平底で器厚は薄いつくりである。時期は、縄文時代後期後葉～晩期初頭と考えられる。

石 器 図25-10 不定形石器1点出土した。

〈小 結〉

当初、調査時点では床面と考えたが、床面と理解した面が粘土等で貼り床をしておらず、硬さも地点によって、違いがあり、積極的には住居跡の貼り床とは断定できなかった。しかし、この硬化面は人為的に上位から押されたために硬い面をつくりだしている事は間違いないと思われる。時期は出土遺物から判断すると、縄文時代後期末葉が主体であると考えられる。

用途に関しては、形態から住居が有力であるが、道路面も考えられるので今後の検討課題としたい。

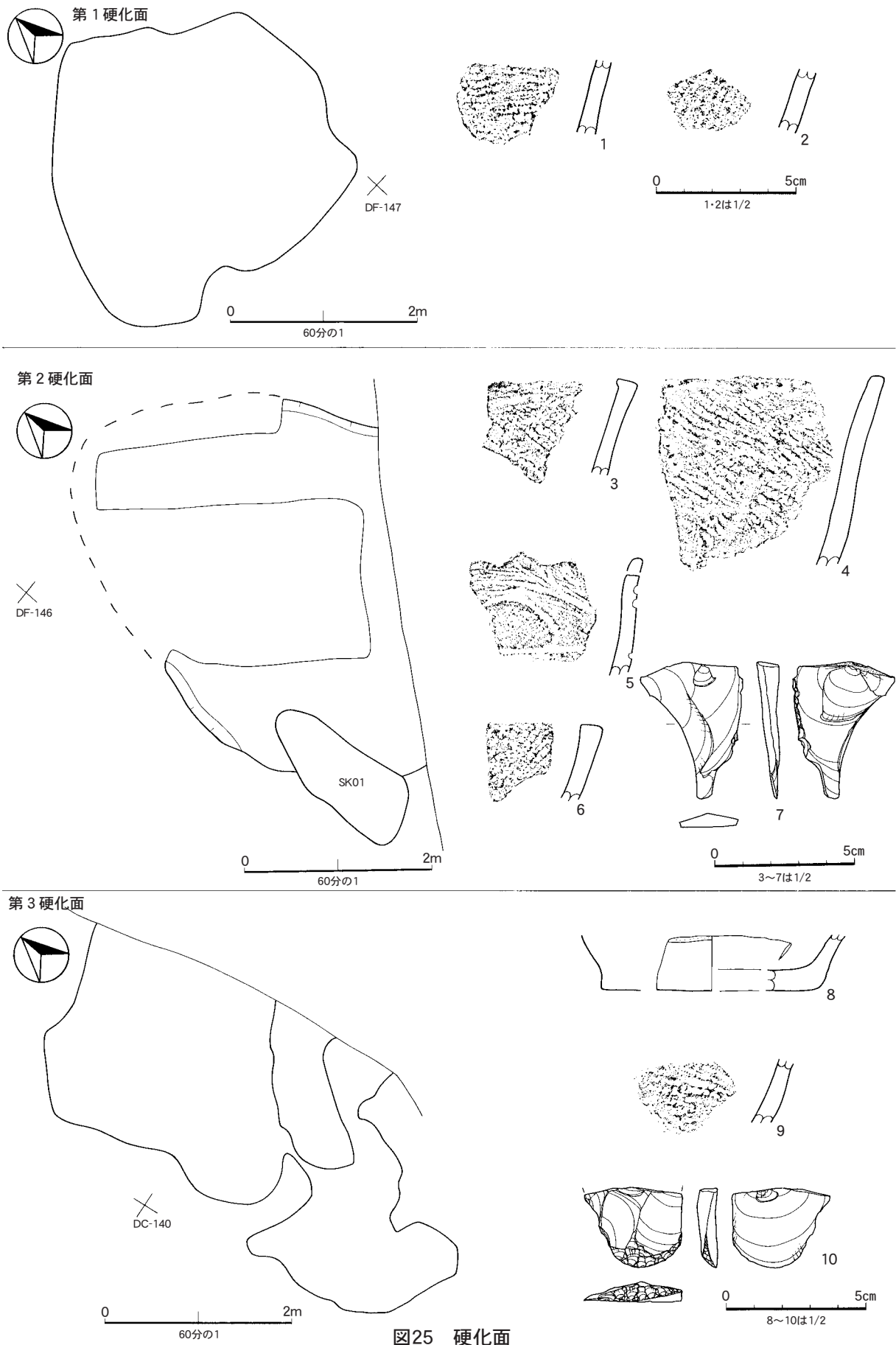


図25 硬化面

第2節 遺構外出土遺物

1. 土器 図26・27

水上遺跡では出土土器を下記のように分類する。

第Ⅰ群土器 縄文時代中期

第Ⅱ群土器 縄文時代後期

第Ⅲ群土器 縄文時代後期末葉～晩期初頭

第Ⅰ群土器 図26-1～8

1は口頸部が内反し、胴部上半が張る折り返し口縁の深鉢形である。地文縄文地に縦位に二条を一単位として沈線を施文している。2は羽条縄文と撚糸圧痕を施文し、その間に綾絡文を施文している。3・4は羽条縄文、5～8は口頸部及び胴部破片で単節の縄文を施文しており、スス状炭化物の付着が多い。

第Ⅱ・Ⅲ群土器 図26-9～23・図27-24～50

9は口頸部に粘土紐を横位・縦位に貼り付けている。10～17は沈線を施文しているもので、10・11は横位に、12は縦位、14は斜位、16・17は弧状に沈線を施文している。18～23は無文の土器を一括とした。胴部破片で焼成は良好なものである。

24～29は底部破片であり、底面の周縁部が一段高く盛り上がっている。薄手のつくりが多い。30～41は縄文のみを施文しているものである。深鉢形土器で平口縁であり、口唇部上面は平坦で、30～35は口唇部が厚みを有する。条は41が縦位であるが、斜位が主体であり、節が細かくスス条炭化物の付着が多い。42は縦位の貼り付けを中心として横位の磨消縄文、43は弧状の磨消縄文、47～49は横位の帯縄文である。44・45は横位方向に連続刺突を施文している。50は、やや直立する注口土器の注口部である。

〈小 結〉

土器の時期であるが、第Ⅰ群土器（縄文時代中期）は3・4が円筒上層系の羽状縄文、1が最花式、5～8の縄文のみの施文の土器は中期後葉～末葉、2は二種の原体を用いて施文している。時期を明確にし得なかったが、第Ⅰ群以前の可能性も考えられる土器である。

第Ⅲ群土器（縄文次第後期）は、9が後期初頭の牛ヶ沢式に、10～17は十腰内Ⅰ式、18から23の無文の土器は第Ⅲ群に属するが、十腰内Ⅰ式か後期末葉～晩期初頭のいずれかに属するのかは判断できなかった。

図27の底部破片及び粗製縄文を含めた土器は、細片のため確たる型式は断定できないが、第Ⅲ群土器の縄文時代後期末葉～晩期初頭に位置づけられると思われる。

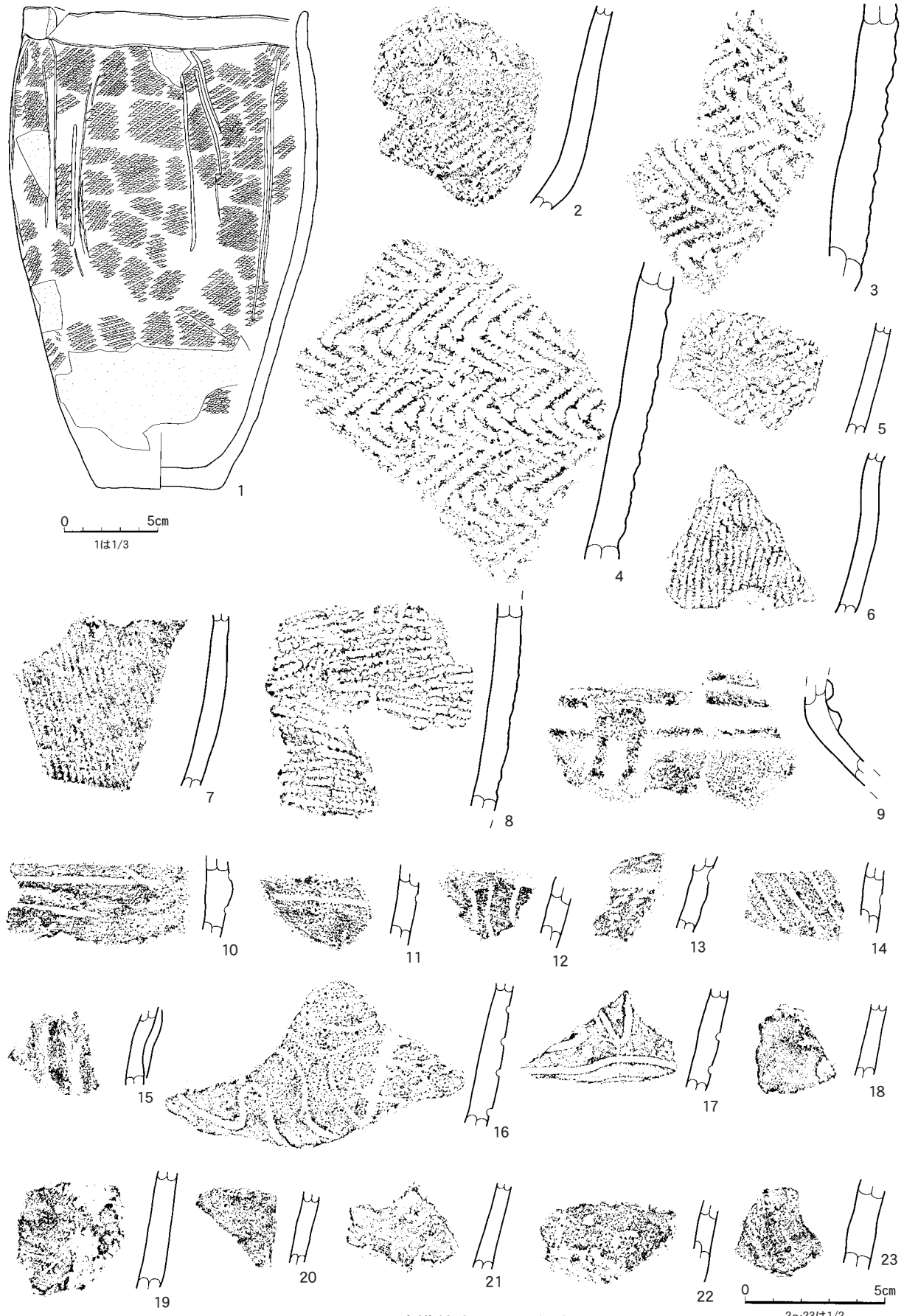


図26 遺構外出土土器(1)

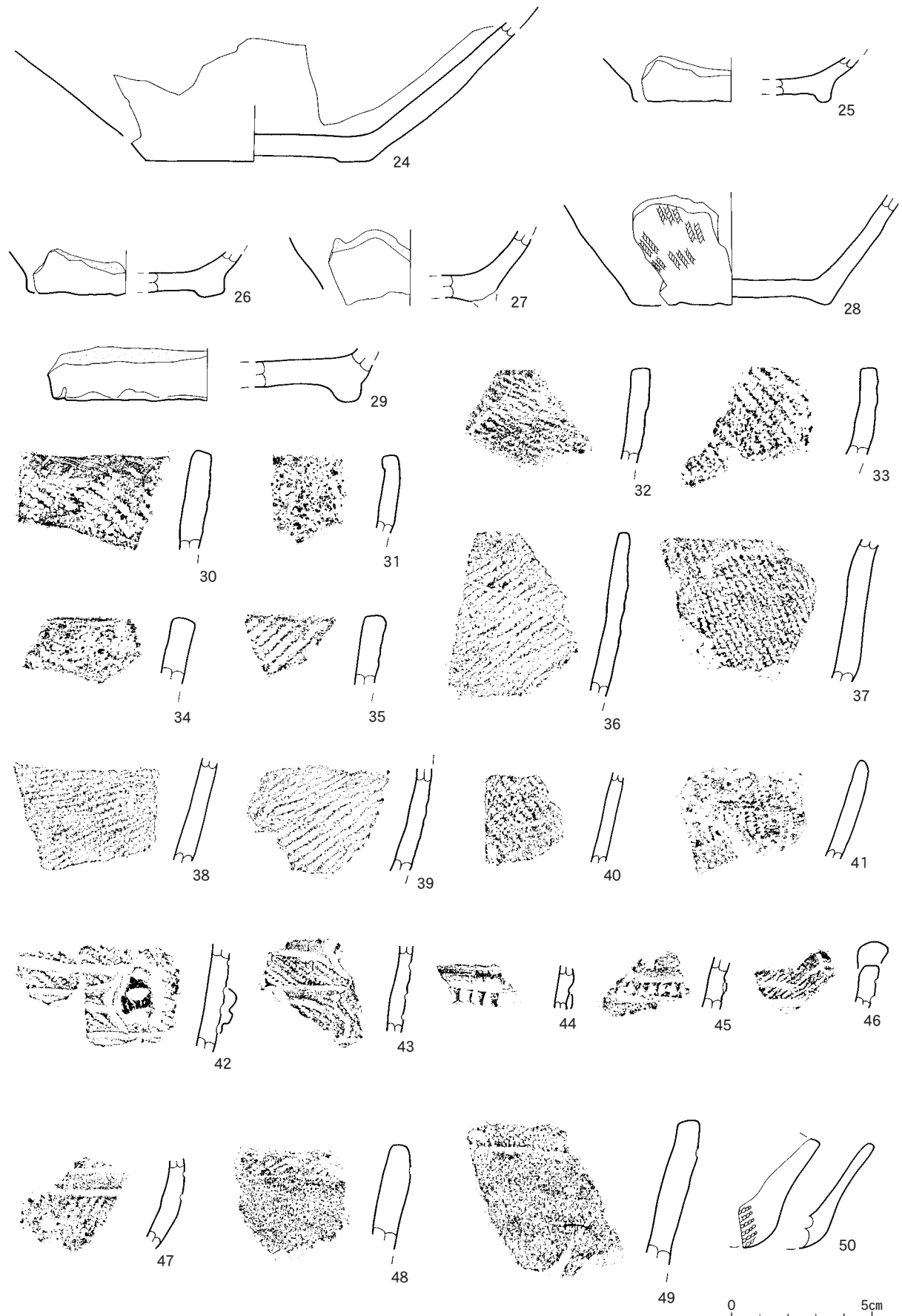


図27 遺構外出土土器(2)

2. 石器 図28～30

水上遺跡で出土した石器を下記のように分類する。

剥片石器	礫石器	石製品
A類 石鏃	E類 磨製石斧	I類 円盤状石製品
B類 石槍	F類 半円状扁平石器	
C類 石筥	G類 敲磨器類	
D類 不定形石器	H類 石皿・砥石類	

石器は、剥片石器と礫石器に分類して記載する。

〈剥片石器〉

遺構外から出土した剥片石器は、A類石鏃・C類石匙・D類石錘・E類不定形石器である。

A類 石族 図28-1・2

3点出土し、2点図化した。周縁部を調整して製作しており、1は柳葉状に2は三角形状を有する有茎石鏃である。2は茎部と先端部が欠損している。

C類 石匙 図28-3

2点出土し1点図化した。形態から横形石匙である。基部は斜位で裏面の調整は粗いつくりを呈する。

D類 石錘 図28-4

3点出土し、1点図化した。先端部の表裏面を調整剥離して作出している。

E類 不定形石器 図28-5～13・図29-1～7

39点出土し、16点を図化した。

搔器・削器等をすべてE類の不定形石器としてまとめた。

図28-6・9は縦長剥片の側縁部を調整剥離しており、図29・6は剥片の先端部に調整剥離がみられるものである。

〈礫石器〉

F類磨製石斧3点・H類敲磨器類6点が出土した。

F類 磨製石斧 図②—8・9・11

3点出土した。8・9は、ほぼ完形の形であり、18は頭部にタタキの痕跡があり、刃部は一部欠損している。11は頭部のみのものである。

H類 敲磨器類 29-10・12、図30-1～5

7点出土した。1・4は表裏面に円形のタタキによる窪みが確認され、2・3は側縁部に打痕がみられる。5は表面に擦りがみられるものである。

10は、端部にタタキがみられる。

〈小 結〉

石器の出土個数は、全体で95点出土した。剥片石器が70点が出土し、その石種及び個数は石鏃3

点（遺構外）・石槍1点（土杭）・石匙2点（遺構外）・石錘3点（遺構外）・不定形石器62点（住居6点・土杭15点・硬化面2点・遺構外39点）が出土し、不定形石器が主体を占める。

礫石器は25点が出土した。その石種及び個数は磨製石斧3点（遺構外）・半円状扁平打製石器1点（土杭）・敲磨器類17点（住居3点・土杭8点・遺構外6点）・石皿・砥石類4点（住居2点・土杭2点）が出土し、礫石器は敲磨器類が主体を占める。

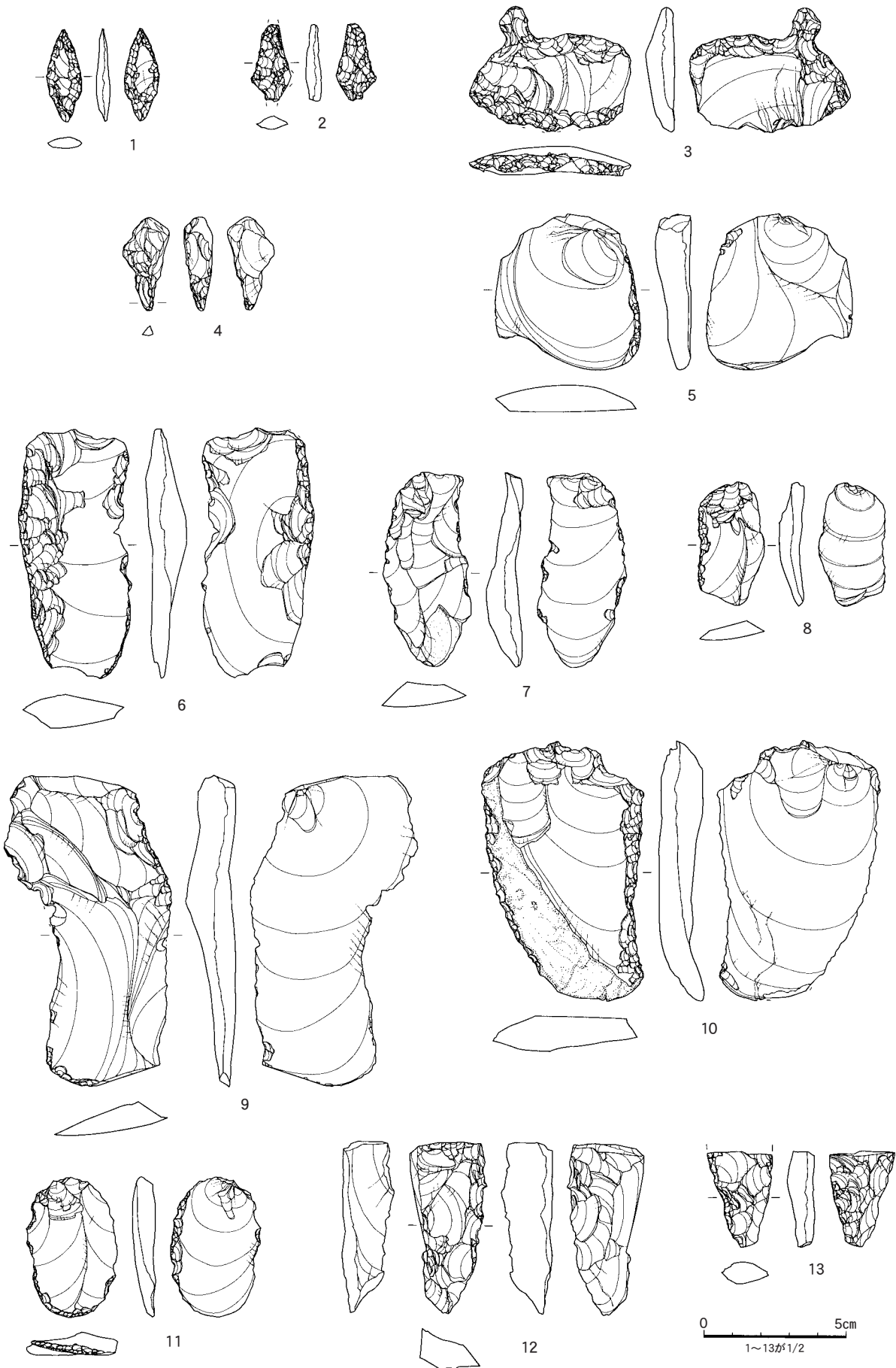


図28 遺構外出土石器(1)

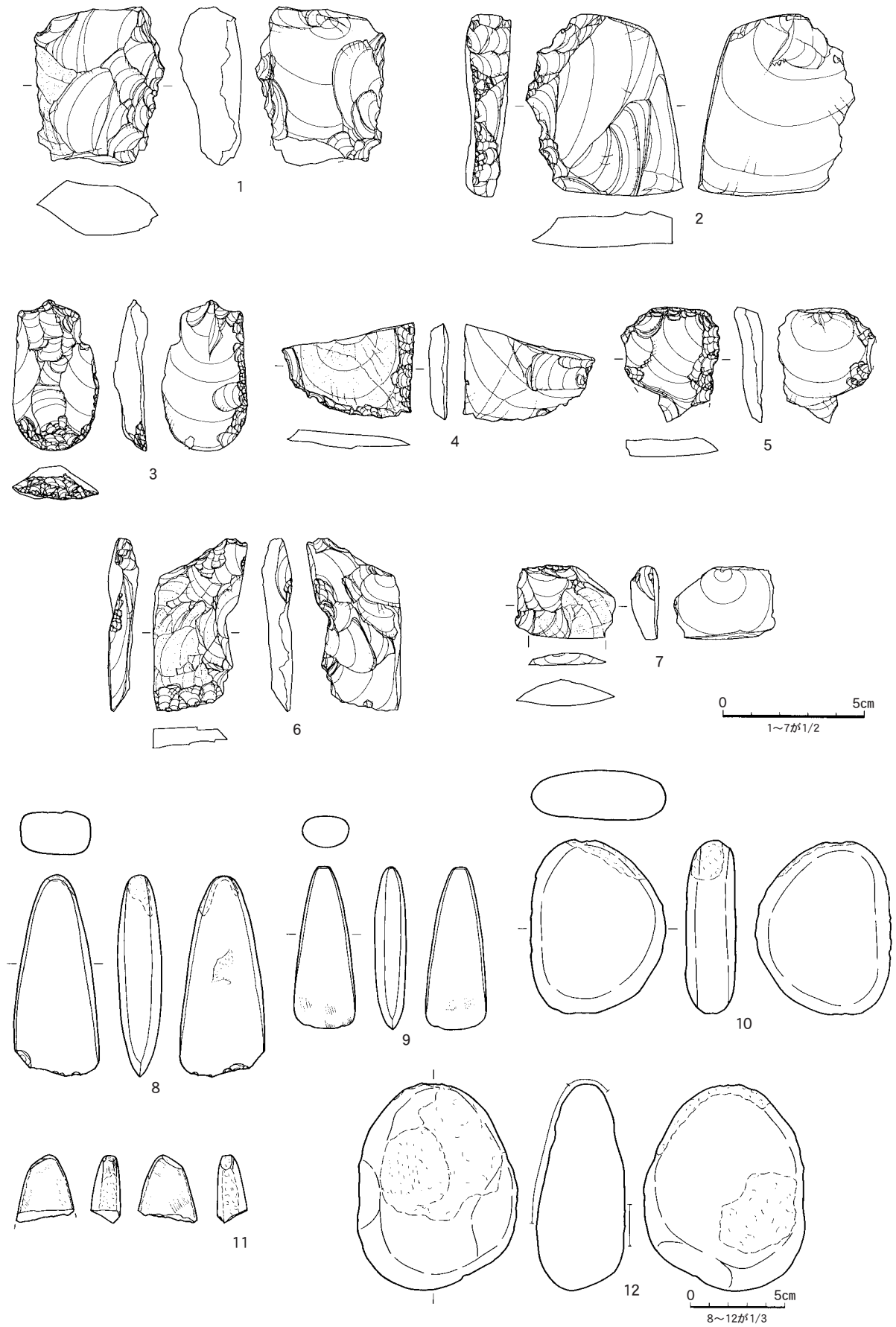


図29 遺構外出土石器(2)

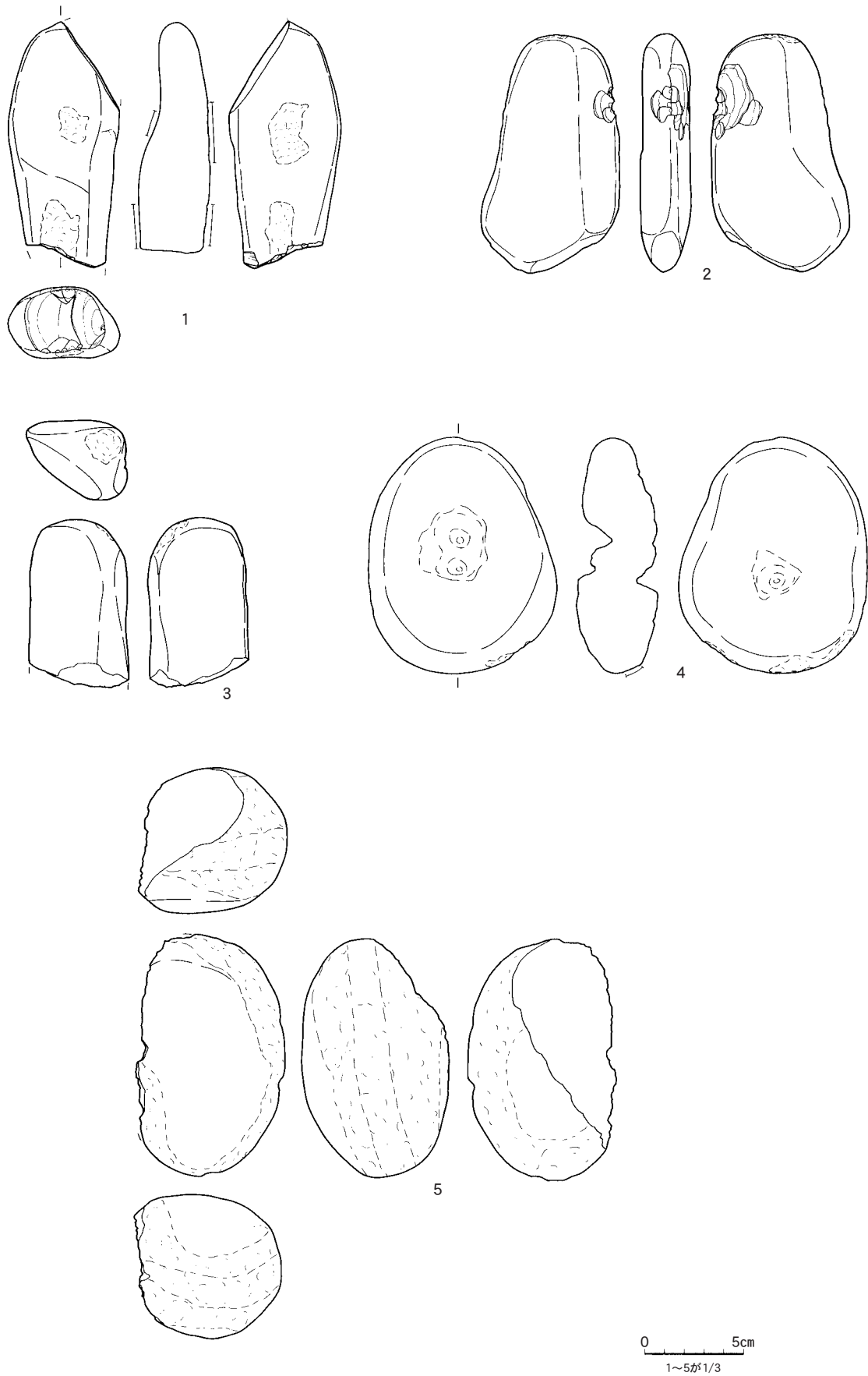


図30 遺構外出土石器(3)

第3章 まとめ

調査は、東側調査区と西側調査区の2箇所の調査を行なった。東側調査区は第I層を除去後に全面に礫群を検出した。当初、配石遺構とも期待したが、土石流の跡であることが判明した。遺物は縄文時代後期（十腰内I式）が数片出土したが、水流による影響で土器全体が摩耗している例が多い。石器は不定形石器が出土した。

西側の調査区は、神社を中心とした一段高い地点であり、本遺跡内に於いて遺構が唯一残存している地域と思われる。検出した遺構は、竪穴住居跡4軒・土坑67基・硬化面3基を検出した。遺構は、調査区の北側と南側の二つのブロックに分かれ、遺構が集中しているのが特徴である。住居跡は北側のブロックのみで検出され、遺構同士の重複が激しい。

住居跡の構築時期は、出土遺物から判断すると、2軒が縄文時代中期（第3号住居跡が円筒上層b式）。2軒が縄文時代後期末葉～縄文時代晩期初頭である。土坑も出土遺物が少なく時期決定することは難しいが、遺構の重複関係及び遺構内の出土土器が構築時期にちかいと判断するならば、おおむね縄文時代後期末葉～晩期初頭期の時期に構築したものと考えられる。

遺構外の出土遺物は、土器が縄文時代中期の円筒上層式・最花式・縄文時代中期後葉～末葉、縄文時代後期の牛ヶ沢式・十腰内I式・後期末葉～晩期初頭が出土した。

石器は95点出土し、遺構内から38点・遺構外から57点出土した。

剥片石器は、石鏃・石匙・石錘・不定形石器、礫石器は磨製石斧・半円状扁平打製石器・敲磨器類・石皿砥石類、石製品では円盤状石製品が出土した。今回は不定形石器が主体を占める。

今回の水上遺跡の調査は、西側調査区の一部の調査ではあったが、縄文時代中期及び縄文時代後期末葉～晩期初頭期の複合集落跡と考えられる。

なお、調査区の南側の地区に関しては、平成17年度に一部を調査（縄文時代後期末葉の階段状遺構を検出）し、他の地区については平成18年度に実施する予定である。

今回の報告は、平成16年度に調査を実施し、出土した遺物及び検出遺構の記載にとどめ、集落全体の概要及び検討・分析に関しては、今回の報告も含めて発掘調査終了後の報告で記載していきたいと考えている。

(調査担当者)

表

- 土坑一覽表
- 土器觀察表
- 石器觀察表

水上遺跡土坑一覽表

遺構名	旧番号	出土位置	開口部(cm)	底面(cm)	深さ(cm)	備考
01土	SK01	DI・DJ-144	166×62	121×56	14	底面に礫
02土	SK02	DG・DH-145	182×172	138×122	46	
03土	SK03	DL-145	94×76	56×22	36	
04土	SK04	DL-145	(93)×(66)	(86)×(54)	14	
05土	SK05	DL-145	(66)×(54)	(50)×(42)	18	
06土	SK06	DI-145	142×127	96×84	37	
07土	SK07	DI-144・145	(87)×82	(58)×46	24	
08土	SK08	DL-145	(82)×58	50×(45)	10	
09土	SK09	DL-145	(88)×65	(76)×42	28	
10土	SK10	DL-145	196×116	187×104	20	
11土	無番号	DK-145	(170)×(45)	(110)×(33)	28	
12土	SK12	DK146	(72)×(62)	(42)×(32)	14	
13土	SK13	DJ-146	(162)×90	(142)×84	24	
14土	SK14	DK・DL-145	(72)×72	(56)×40	12	
15土	SK15	DI-144・145	(72)×54	(58)×32	23	
16土	SK16	DG・DH-144	160×?	136×?	14	
17土	SK17	DM-145	(126)×(89)	(89)×(52)	44	
18土	SK18	DG-143・144	(216)×-	(210)×-	-	
19土	SK19	DE-142	(300)×(120)	(295)×(115)	-	
20土	SK20	DJ-145	68×(44)	52×(32)	20	
21土	SK21	DJ-145	(290)×-	(276)×-	36	
22土	SK22	DJ-145	212×76	173×58	37	
23土	SK23	DJ-144	113×56	106×46	6	
24土	SK24	DJ-145	127×(33)	104×(26)	7	
25土	SK25	DJ-145	(98)×105	(87)×90	17	
26土	SK26	DJ-145	-×(58)	-×(42)	6	
27土	SK27	DE-141・142	104×92	86×50	68	
28土	SK28	DD・DE-141	(152)×-	(126)×-	14	
29土	SK29	DD・DE-141	(230)×(190)	(222)×(166)	16	
30土	SK30	DE-141	(106)×-	(92)×-	?	
31土	SK31	DD-141	102×82	74×57	22	
32土	SK32	DJ-144	192×(78)	180×(56)	50	
33土	SK33	DJ-144	204×176	156×124	26	
34土	SK34	DI-144	100×67	78×57	8	
35土	SK35	DK-145	92×(52)	50×(32)	17	
36土	SK36	DJ-145	72×67	52×39	21	
37土	SK37	DD-141	(96)×62	(92)×50	13	
38土	SK38	DH-143	68×(36)	32×(16)	52	
39土	SK39	DK-145	(96)×(72)	(85)×(50)	11	
40土	SK40	DE-143	80×42	44×26	28	
41土	SK41	DC・DD-142	260×167	227×154	16	
42土	SK42	DD-141	(70)×64	24×24	7	
43土	SK43	DC・DD-142	(132)×(80)	(123)×(78)	11	
44土	SI08	DI・DJ-145	262×162	236×97	23	

遺構名	旧番号	出土位置	開口部(cm)	底面(cm)	深さ(cm)	備考
45土	SK45	DB-142	(370)×(78)	(352)×(62)	18	
46土	SK46	DL-145・146	122×39	115×24	8	
47土	SK47	DL・DM-145	266×206	210×130	41	底面にビット
48土	SK48	DK-145・146	(114)×(112)	(92)×(90)	10	
49土	SK49	DE-141・142	(212)×(62)	(111)×(56)	—	
50土	SK50	DD-141	(120)×—	(111)×—	—	
51土	SK51	DD-141	(72)×—	(62)×—	—	
52土	SK52	DK-146・147	290×172	266×153	26	
53土	SK53	DK-146	66×(48)	52×(42)	8	
54土	SK54	DL-145・146	242×190	(150)×100	18	
55土	SK55	DC-142	56×54	18×14	32	
56土	SK56	DD-140	(60)×(56)	(42)×(36)	27	
57土	SK57	DC-142	57×54	56×32	31	
58土	SI08A	DJ-145	124×68	102×56	13	
59土	SI08B	DJ-145	102×83	52×52	11	
60土	SI09	DJ-145・146	270×178	242×116	25	
61土	SI10	DK-146	—	—	32	
62土	SI11	DK-145・146	184×183	158×130	38	
63土	SI12	DE・DF-142・143	(330)×(320)	(310)×(298)	62	小ビット2個
64土	SI13	DL・DM-145・146	(390)×—	(368)×—	27	
65土	SI14	DK-145	(198)×93	(190)×80	12	小ビット1個
66土	SI15	DK-146	(350)×(144)	(321)×(130)	22	小ビット2個
67土	SR1	DD-142	72×64	18×14	18	

水上遺跡土器観察表

図	No.	出土位置	層位	部位	文様	分類	時期	備考
5	1	1住	床直	口頸	横位沈線 連続刺突 磨消縄文RL	II	後期末～晩期初	焼成良好
5	2	1住	床直	口頸	弧状文・磨消縄文LR	II	後期末～晩期初	焼成良好
5	3	1住	堆積土	胴	縄文RL	II	後期末～晩期初	スス状炭化物付着
5	4	1住	堆積土	胴	縄文RLR	II	後期末～晩期初	
5	5	1住	床直	胴	縄文RL	II	後期末～晩期初	スス状炭化物付着
5	6	1住	床直	胴	?	?	?	土器表面が摩滅
5	7	1住	床直	胴	縄文RL	II	後期末～晩期初	スス状炭化物付着
5	8	1住	堆積土	胴	縄文LR	II	後期末～晩期初	スス状炭化物付着
5	9	1住	堆積土	底部	縄文LR	II	後期末～晩期初	スス状炭化物付着
5	10	1住	床直	底部	縄文LR	II	後期末～晩期初	スス状炭化物付着
5	11	1住	床直	底部	無文	II	後期末～晩期初	台付鉢? 焼成良好
6	1	2住	1層	胴	縄文RL	I	中期後～末	2と同一固体
6	2	2住	1層	胴	縄文RL	I	中期後～末	1と同一固体
6	3	2住	堆積土	胴	縄文RL	I	中期後～末	スス状炭化物付着
6	4	2住	堆積土	胴	縄文LRL	I	中期後～末	スス状炭化物付着
6	5	2住	堆積土	胴	縄文LR	II	後期末～晩期初	スス状炭化物付着
8	1	3住	2層	深鉢	横位・斜位の粘土紐 連続刺突 羽状縄文	I	円筒上層C式	スス状炭化物付着
8	2	3住	炉	深鉢	横位・斜位の粘土紐 連続馬蹄形の燃糸 圧痕 羽状縄文	I	円筒上層B式	
8	3	3住	堆積土	鉢	平口縁 無文	II	後期末～晩期初	焼成良好

図	No.	出土位置	層位	部位	文様	分類	時期	備考
8	4	3住	堆積土	口頸	横位・斜位の沈線 縄文RL	I	榎林式	スス状炭化物付着 5と同一個体
8	5	3住	堆積土	口頸	横位・斜位の沈線 縄文RL	I	榎林式	スス状炭化物付着 4と同一個体
8	6	3住	堆積土	胴	縄文LR 0段多状	I	中期後～末	
8	7	3住	堆積土	胴	縄文LR 0段多状	I	中期後～末	スス状炭化物付着
8	8	3住	堆積土	胴	縄文LR 0段多状	I	中期後～末	スス状炭化物付着
8	9	3住	1層	口頸	無文	II	十腰内I式?	
8	10	3住	1層	口頸	無文	II	十腰内I式?	
8	11	3住	1層	壺	無文	II	十腰内I式?	
8	12	3住	3層	口頸	円形粘土紐 横位沈線 連続刺突	II	後期末～晩期初	
8	13	3住	3層	底部	無文 上げ底	II	後期末～晩期初	
8	14	3住	堆積土	台付鉢	無文	II	後期末～晩期初	
10	1	4住	堆積土	胴	縄文RL	I	中期後～末	スス状炭化物付着
10	2	4住	堆積土	口縁	縄文RL	I	中期後～末	
10	3	4住	堆積土	胴	縄文RL	II	後期末～晩期初	
10	4	4住	堆積土	胴	縄文LRL?	II	後期末～晩期初	スス状炭化物付着
10	5	4住	堆積土	胴	縄文RL	II	後期末～晩期初	スス状炭化物付着
10	6	4住	堆積土	胴	縄文RL	II	後期末～晩期初	スス状炭化物付着
10	7	4住	堆積土	口縁	縄文LR	II	後期末～晩期初	スス状炭化物付着
10	8	4住	3層	胴	縄文RL	II	後期末～晩期初	赤色顔料付着
10	9	4住	堆積土	底部	平底無文	II	後期末～晩期初	スス状炭化物付着
20	1	1土	堆積土	胴	縄文RL	II	後期末～晩期初	スス状炭化物付着
20	2	1土	1層	胴	無文	II	後期末～晩期初	スス状炭化物付着
20	3	1土	3層	胴	縄文LR	II	後期末～晩期初	
20	4	11土	2層	胴	縄文RL	II	後期末～晩期初	
20	5	13土	1層	胴	縄文LR	II	後期末～晩期初	
20	6	13土	1層	胴	縄文LR	II	後期末～晩期初	
20	7	14土	1層	胴	縄文RL	II	後期末～晩期初	
20	8	20土	1層	胴	縄文LR	II	後期末～晩期初	
20	11	21土	堆積土	胴	無文	II	後期末～晩期初	表面の剥落が著しい
20	12	21土	1層	胴	縄文RL	I	中期後葉～末	スス状炭化物付着
20	13	22土	1層	胴	縄文RL	II	後期末～晩期初	
20	14	22土	1層	胴	縄文RL	II	後期末～晩期初	スス状炭化物付着
20	15	22土	1層	台付鉢	無文	II	後期末～晩期初	
20	16	23土	1層	口縁	無文	II	後期末～晩期初	焼成良好
20	17	32土	堆積土	胴	縄文LR	II	後期末～晩期初	
20	18	33土	堆積土	胴	縄文LR	II	後期末～晩期初	スス状炭化物付着
20	19	33土	堆積土	胴	縄文LR	I	中期後～末	
20	20	33土	4層	胴	縄文LR	II	後期末～晩期初	
20	22	39土	1層	胴	縄文RL	II	後期末～晩期初	
20	23	39土	1層	胴	縄文RL 0段多条	I	中期後～後期末	スス状炭化物付着
21	9	60土	堆積土	胴	縄文LR	I	中期後～末	
21	10	60土	堆積土	胴	縄文RLR	I	中期後～末	スス状炭化物付着
21	11	60土	堆積土	胴	縄文RLR	I	中期後～末	スス状炭化物付着
21	12	60土	堆積土	胴	縄文LRL	I	中期後～末	スス状炭化物付着
21	13	60土	1層	胴	縄文RL	I	中期後～末	スス状炭化物付着
21	14	60土	2層	胴	縄文RL 0段多条	II	後期末～晩期初	
21	15	60土	堆積土	胴	無文	II	後期末～晩期初	
21	16	60土	堆積土	胴	縄文LR	II	後期末～晩期初	
21	17	60土	堆積土	胴	無文	II	後期末～晩期初	
21	18	60土	堆積土	胴	縄文LR	II	後期末～晩期初	
21	20	61土	1層	胴	羽状縄文LR, RL	I	円筒上層系土器	
21	21	61土	堆積土	胴	無文	II	後期末～晩期初	焼成良好
21	22	61土	4層	底部	無文 上げ底	II	後期末～晩期初	

図	No.	出土位置	層位	部位	文様	分類	時期	備考
22	2	57土	堆積土	鉢	平口縁 上げ底 縄文LR	II	後期末～晩期初	スス状炭化物付着
22	3	62土	堆積土	口縁	平口縁 無文	II	後期末～晩期初	焼成良好
22	4	62土	堆積土	胴	縄文LR	I	中期後～末	スス状炭化物付着
22	5	62土	堆積土	胴	縄文LR	I	中期後～末	スス状炭化物付着
22	6	62土	堆積土	胴	縦位の一条の沈線	II	後期末～晩期初	
22	7	62土	堆積土	胴	無文	II	後期末～晩期初	焼成良好
22	8	62土	堆積土	胴	縄文LRに横位の一条沈線	II	後期末～晩期初	
22	9	62土	堆積土	口頸	横位沈線に連続刺突	II	後期末～晩期初	
22	10	62土	堆積土	口縁	縄文LR 0段多状	I	中期後～末	
22	11	62土	堆積土	胴	縄文RL	I	中期後～末	
22	12	62土	堆積土	胴	縄文RLR	I	中期後～末	スス状炭化物付着
22	13	62土	1層	胴	縄文RL	I	中期後～末	
22	20	63土	堆積土	胴	無文	I	中期後～末	
24	1	64土	2層	口縁	平口縁 縄文RL 0段多状	II	後期末～晩期初	
24	2	64土	2層	口縁	平口縁 縄文RL 0段多状	II	後期末～晩期初	スス状炭化物付着
24	3	64土	1層	口縁	平口縁 縄文RL	II	後期末～晩期初	スス状炭化物付着
24	4	64土	2層	口縁	平口縁 縄文RL	II	後期末～晩期初	スス状炭化物付着
24	5	64土	2層	胴	縄文RL	II	後期末～晩期初	
24	6	64土	1層	口縁	平口縁 無文	II	後期末～晩期初	
24	7	64土	1層	口縁	平口縁 無文	II	後期末～晩期初	焼成良好
24	8	64土	1層	胴	無文	II	後期末～晩期初	焼成良好
24	9	64土	1層	台付鉢	無文	II	後期末～晩期初	
24	10	65土	1層	胴	縄文LR	II	後期末～晩期初	スス状炭化物付着
24	11	65土	1層	胴	縄文LR	II	後期末～晩期初	スス状炭化物付着
24	12	66土	2層	口縁	平口縁 無文	II	後期末～晩期初	
24	13	66土	堆積土	胴	縄文LR	II	後期末～晩期初	スス状炭化物付着
24	14	66土	堆積土	胴	縄文LR	II	後期末～晩期初	
24	15	66土	堆積土	胴	無文	II	後期末～晩期初	
24	16	66土	堆積土	胴	縄文LR	II	後期末～晩期初	スス状炭化物付着
24	17	66土	2層	胴	縄文LR 0段多状	II	後期末～晩期初	スス状炭化物付着
24	18	66土	2層	胴	縄文RL	II	後期末～晩期初	
24	19	67土	1層	深鉢	四波状 縦位・横位の粘土紐 横位・縦の擦糸・縦の擦糸圧痕	I	円筒上層a式	スス状炭化物付着
25	1	第1硬化面	確認面	胴	縄文LR	II	後期末～晩期初	
25	2	第1硬化面	確認面	胴	縄文LR	II	後期末～晩期初	スス状炭化物付着
25	3	第2硬化面	確認面	口縁	縄文RL	II	後期末～晩期初	スス状炭化物付着
25	4	第2硬化面	確認面	口縁	縄文RL	II	後期末～晩期初	スス状炭化物付着
25	5	第2硬化面	確認面	口縁	三つ又状突起 弧状文 縄文LR	II	後期末～晩期初	スス状炭化物付着
25	6	第2硬化面	確認面	口縁	縄文LR	II	後期末～晩期初	スス状炭化物付着
25	8	第3硬化面	確認面	底部	無文	II	後期末～晩期初	
25	9	第3硬化面	確認面	胴	縄文RL	II	後期末～晩期初	スス状炭化物付着
26	1	DE-143	II層	深鉢	折り返し口縁 縦位沈線 縄文LR	I	最花式	スス状炭化物付着
26	2	DG-143	I層	胴	縄文LR 擦糸圧痕?	?	前期初?	スス状炭化物付着
26	3	DM-145	II層	胴	羽状縄文LR・RL	I	円筒上層式	
26	4	DM-145	I層	胴	羽状縄文LR・RL	I	円筒上層式	
26	5	表採		胴	縄文LRL	I	中期後～末	スス状炭化物付着
26	6	DK-144	I層	胴	縄文LR	II	後期後～晩期初	スス状炭化物付着
26	7	DE-143	II層	胴	縄文RL	II	後期末～晩期初	スス状炭化物付着
26	8	DI-145	II層	胴	縄文LR	I	中期後～末	スス状炭化物付着
26	9	DH-89	II層	口縁	縦位・横位の粘土紐	II	十腰内I式	
26	10	DM-89	II層	胴	横位・斜位の沈線	II	十腰内I式	
26	11	DM-89	II層	胴	横位の沈線	II	十腰内I式	
26	12	DM-89	II層	胴	縦位の沈線	II	十腰内I式	
26	13	DM-89	II層	胴	横位の沈線 縄文	II	十腰内I式	
26	14	DM-89	I層	胴	斜位の沈線	II	十腰内I式	

図	No.	出土位置	層位	部位	文様	分類	時期	備考
26	15	DM-44	I層	口頸	縦位の粘土紐	II	十腰内I式	
26	16	DM-89	I層	胴	弧状文の沈線	II	十腰内I式	
26	17	DM-89	I層	胴	横位・蛇行文の沈線	II	十腰内I式	
26	18	表採		胴	無文	II	後期末～晩期初	
26	19	DI-146	I層	胴	無文	II	後期末～晩期初	
26	20	DI-144	I層	胴	無文	II	後期末～晩期初	
26	21	表採		胴	無文	II	後期末～晩期初	スス状炭化物付着
26	22	DM-89	II層	胴	無文	II	後期末～晩期初	
26	23	DM-146	II層	胴	無文	II	後期末～晩期初	
27	24	SB2	I層	底部	無文 上げ底	II	後期末～晩期初	焼成良好
27	25	DM-145	I層	底部	無文 上げ底	II	後期末～晩期初	焼成良好
27	26	DB-144	I層	底部	無文 上げ底	II	後期末～晩期初	
27	27	DI-145	II層	底部	無文 上げ底	II	後期末～晩期初	
27	28	DM-145	I層	底部	上げ底 縄文RL	II	後期末～晩期初	
27	29	DM-145	II層	底部	無文 上げ底	II	後期末～晩期初	
27	30	DI-145	I層	口縁	平口縁 縄文RL	II	後期末～晩期初	
27	31	DM-145	I層	口縁	平口縁 無文	II	後期末～晩期初	表面の剥落が著しい
27	32	DJ-147	I層	口縁	縄文RL	II	後期末～晩期初	
27	33	DI-144	I層	口縁	縄文RL 0段多条	II	後期末～晩期初	
27	34	DM-145	I層	口縁	縄文RL	II	後期末～晩期初	スス状炭化物付着
27	35	DJ-144	I層	口縁	縄文LR	II	後期末～晩期初	スス状炭化物付着
27	36	DJ-146	I層	口縁	縄文LR	II	後期末～晩期初	スス状炭化物付着
27	37	DM-146	I層	胴	縄文RL	II	後期末～晩期初	スス状炭化物付着
27	38	DC-140	I層	胴	縄文LR	II	後期末～晩期初	スス状炭化物付着
27	39	DM-146	I層	胴	縄文LR	II	後期末～晩期初	スス状炭化物付着
27	40	DH-145	I層	胴	縄文RL	II	後期末～晩期初	スス状炭化物付着
27	41	DH-145	I層	口縁	縄文LR	II	後期末～晩期初	
27	42	DI-144	I層	口頸	粘土粒 帯縄文 縄文充填縄文 縄文RL	II	後期末～晩期初	スス状炭化物付着
27	43	DH-145	I層	胴	帯縄文 充填縄文 縄文RL	II	後期末～晩期初	
27	44	DJ-145	I層	胴	横位沈線 連続刺突	II	後期末～晩期初	
27	45	DI-144	I層	胴	横位沈線 連続刺突	II	後期末～晩期初	スス状炭化物付着
27	46	DL-145	I層	口縁	波状口縁 縄文LR	II	後期末～晩期初	
27	47	DL-145	I層	胴	横位沈線 縄文LR	II	後期末～晩期初	
27	48	DE-144	I層	口縁	帯縄文 充填縄文 縄文LR	II	後期末～晩期初	
27	49	DD-143	II層	口縁	帯縄文 充填縄文 縄文LR	II	後期末～晩期初	
27	50	DC-140	I層	注口	縄文LR	II	後期末～晩期初	

石器観察表

図	No.	出土位置	層位	石質	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
5	12	1住	床直	頁岩	不定形石器	3.6	3.8	1.4	14	
6	6	2住	堆積土	頁岩	不定形石器	3.7	3.7	8.8	10.7	
9	1	3住	堆積土	頁岩	不定形石器	5.0	2.2	1.3	12.2	
9	2	3住	堆積土	頁岩	不定形石器	5.4	4.0	1.6	31.3	
9	3	3住	堆積土	頁岩	不定形石器	7.1	3.5	1.2	19.8	
9	4	3住	堆積土	頁岩	不定形石器	6.1	7.2	1.9	68.7	
9	5	3住	堆積土	安山岩	敲磨器類	9.2	5.0	3.8	300	
9	6	3住	堆積土	凝灰岩	石皿砥石類	20.3	9.8	5.1	1550	
9	7	3住	炉石	礫岩	石皿砥石類	22.0	17.3	6.8	5200	
10	10	4住	堆積土	安山岩	敲磨器類	(9.8)	6	3.6	(300)	欠損
10	11	4住	3層	礫岩	敲磨器類	15.0	10.8	7.5	1300	
20	9	20土	1層	凝灰岩	敲磨器類	(5.3)	(6)	2.4	(700)	欠損
20	10	18土	堆積土	流紋岩	半円状	12.8	7.2	2.7	410	
20	24	44土	堆積土	頁岩	不定形石器	40.9	37.3	11.5	8.6	

図	No.	出土位置	層位	石質	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
20	25	44土	堆積土	頁岩	石鏃	2.3	1.2	3	0.5	
20	26	44土	堆積土	頁岩	不定形石器	5.3	4.1	1.4	19.4	
20	27	44土	堆積土	頁岩	石匙	4.6	3.3	1.1	12.7	
21	4	44土	堆積土	凝灰岩	円盤状石	5.2	5.4	0.7	40	
21	6	45土	底面	頁岩	不定形石器	6.4	3.9	1.8	26	
21	7	47土	4層	頁岩	石錐	2.7	1.9	1.9	9.3	
21	19	61土	5層	デイサイト	敲磨器類	12	6.3	3.7	360	
22	1	61土	2層	凝灰岩	敲磨器類	13.5	11.8	4.5	852	
22	14	62土	堆積土	頁岩	不定形石器	2.3	1.5	4.5	0.8	
22	15	62土	堆積土	頁岩	不定形石器	4.1	3.7	1.2	8.6	
22	16	62土	堆積土	凝灰岩	敲磨器類	15.3	4.9	4.5	750	
22	17	62土	堆積土	はん岩	敲磨器類	(8.5)	(7.5)	(3.3)	(320)	欠損
22	18	62土	堆積土	頁岩	不定形石器	3.7	3.6	1.6	19	
22	19	62土	堆積土	安山岩	敲磨器類	(7.5)	(6.3)	2.3	(200)	欠損
23	1	63土	堆積土	チャート	敲磨器類	6.8	6.9	3.9	270	
23	2	63土	堆積土	頁岩	不定形石器	(7.7)	(4.8)	2.5	(67.7)	基部欠損
23	3	63土	堆積土	流紋岩	敲磨器類	14.4	8.4	7.5	1160	
23	4	63土	堆積土	安山岩	石皿・砥石	22.5	16	6	7400	
25	7	第2硬化面	確認面	頁岩	不定形石器	4.9	3.6	0.8	7.9	
25	10	第3硬化面	確認面	頁岩	不定形石器	2.9	3.5	0.7	6.6	

遺構外石器観察表

図	No.	出土位置	層位	石質	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
28	1	DH-144	I層	頁岩	石鏃	3.3	1.2	0.5	1.5	
28	2	DC-140	I層	頁岩	石鏃	2.7	1.4	0.6	1.5	先端部・基部欠損
28	3	DM-145	I層	頁岩	石匙	4.4	5.7	1.1	21.2	
28	4	CY-108	I層	頁岩	石錐	3.3	1.7	1.1	4.0	
28	5	DH-145	I層	頁岩	不定形石器	5.5	5.1	1.3	30.8	
28	6	DC-141	I層	頁岩	不定形石器	8.8	4.0	1.4	32.6	
28	7	DE-143	I層	頁岩	不定形石器	6.9	3.1	1.3	17.7	
28	8	DH-145	I層	頁岩	不定形石器	4.4	2.4	0.8	6.0	
28	9	DF-142	I層	頁岩	不定形石器	10.9	5.9	1.8	6.3	
28	10	DE-143	I層	頁岩	不定形石器	9.2	5.7	1.6	77.5	
28	11	DH-144	I層	頁岩	不定形石器	4.9	3.2	0.8	11.4	
28	12	DH-142	I層	頁岩	不定形石器	6.0	2.7	1.8	25.6	
28	13	DD-142	I層	頁岩	不定形石器	3.4	2.3	1.0	6.1	欠損
29	1	DF-142	I層	頁岩	不定形石器	5.7	4.6	2.2	56.9	
29	2	DA-96	I層	頁岩	不定形石器	6.4	5.7	1.6	60.7	
29	3	DD-143	I層	頁岩	不定形石器	5.4	3.1	1.2	17.1	
29	4	DH-144	I層	頁岩	不定形石器	3.4	4.7	0.7	11.9	
29	5	DI-144	I層	頁岩	不定形石器	4.1	3.5	1.0	11.9	
29	6	DH-143	I層	頁岩	不定形石器	6.1	3.4	1.1	20.5	
29	7	DH-144	II層	頁岩	不定形石器	2.6	3.6	1.1	7.5	
29	8	DH-145	I層	安山岩	石斧	10.5	4.5	2.4	160	
29	9	DF-148	I層	輝緑岩	石斧	8.3	2.8	1.7	51.0	
29	10	DI-144	I層	凝灰岩	敲磨器類	9.4	6.9	2.4	252	
29	11	DH-145	I層	泥岩	石斧	3.0	2.9	1.7	12.0	欠損
29	12	DE-144	I層	凝灰岩	敲磨器類	10.1	8.4	4.5	515	
30	1	DH-144	I層	流紋岩	敲磨器類	12.3	5.3	3.6	290	欠損
30	2	DF-143	II層	凝灰岩	敲磨器類	12.5	6.2	2.7	260	
30	3	DH-145	I層	安山岩	敲磨器類	8.3	5.1	4.0	210	欠損
30	4	DG-144	II層	凝灰岩	敲磨器類	11.7	9.6	4.2	570	
30	5	DF-148	I層	凝灰岩	敲磨器類	12.3	7.3	7.2	620	欠損

写 真 图 版



遺跡遠景（北→）



遺跡遠景（西→）



全体調査区 (S→)



調査区西側地区 (E→)



調査区 E→



調査区 W→



調査区 N→



調査区 W→



調査風景



調査風景



調査風景



調査風景

写真3 調査区・調査風景



調査区東側礫全景 S→



調査区東側礫近景 E→



調査区東側礫全景 W→



調査区東側礫近景 E→



調査区東側礫全景 S→



調査区東側礫近景 E→



調査区西側地区 基本層序



調査区東側地区 基本層序

写真4 調査区東側・基本層序



調査区西側地区 E→



調査区西側地区 S→



第2号住居跡 完掘 W→



第2号住居跡 炉 E→



第3号住居跡 完掘 S→



第3号住居跡 完掘 E→



第3号住居跡 炉 N→



第4号住居跡 完掘 S→

写真5 調査区西側地区・住居跡



1土 完掘 S→



6土 完掘 S→



7土 完掘 S→



6・7・15土 完掘 S→



8土 完掘 N→



15土 完掘 S→



11土 完掘 W→



12土 完掘 N→

写真6 土坑(1)



13土 完掘 E→



16土 完掘 N→



17土 完掘 N→



18土 完掘 E→



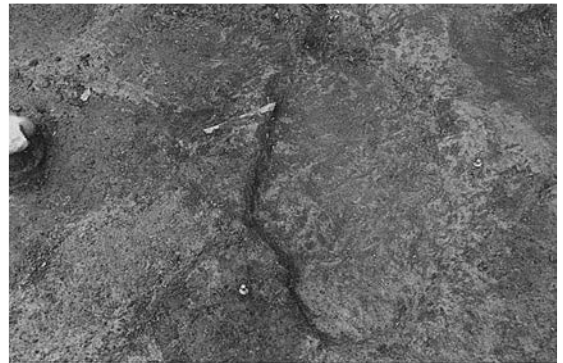
19土 完掘 E→



20土 完掘 E→



22土 完掘 E→



23土 完掘 S→

写真7 土坑(2)



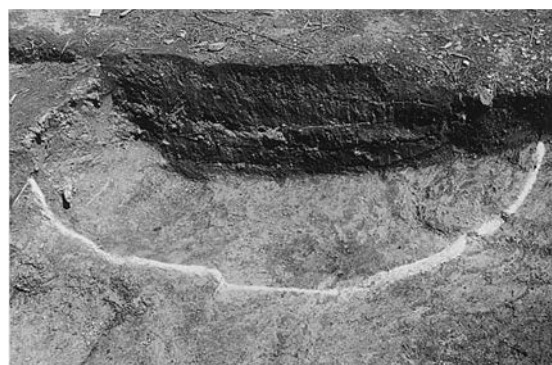
24土 完掘 E→



25土 完掘 E→



27~31土 完掘 E→



32土 完掘 E→



33土 完掘 E→



34土 完掘 E→



36土 完掘 E→



39土 完掘 W→

写真8 土坑(3)



40土 完掘 N→



44土 完掘 N→



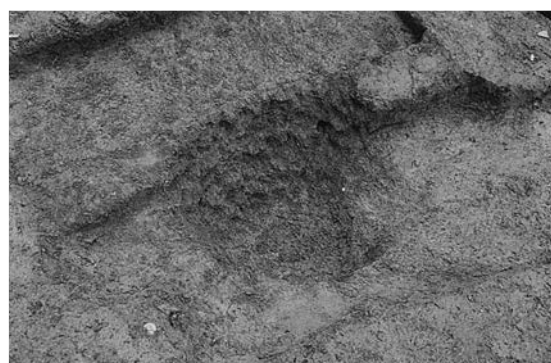
47土 完掘 N→



48土 完掘 E→



54土 完掘 E→



55土 完掘 N→



57土 完掘 W→



58・59・60土 土層図 N→

写真9 土坑(4)



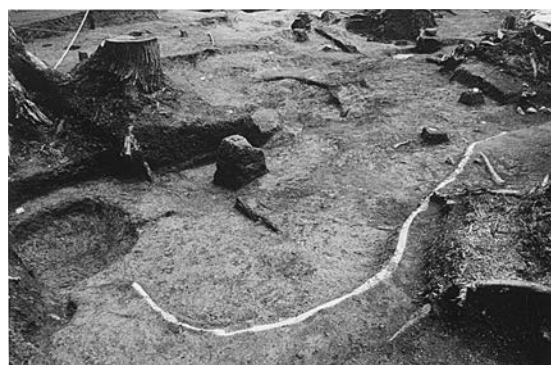
61土 完掘 W→



462土 完掘 W→



63土 完掘 W→



64土 完掘 N→



65土 完掘 W→

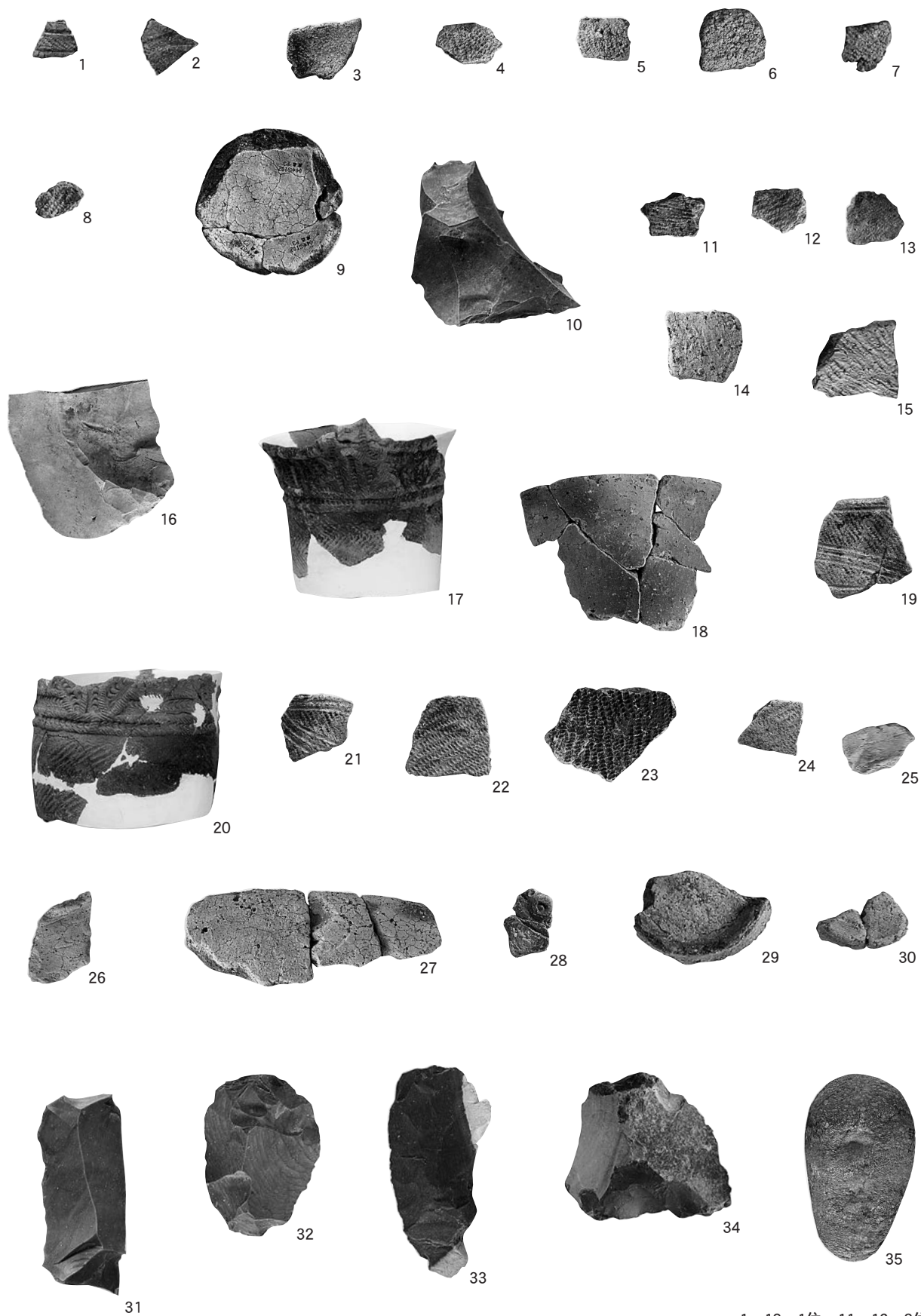


52・66土 完掘 N→



20・21・22・24土 完掘 E→

写真10 土坑(5)



1~10-1住、11~16-2住
17~35-3住

写真11 遺構内土器・石器(1)

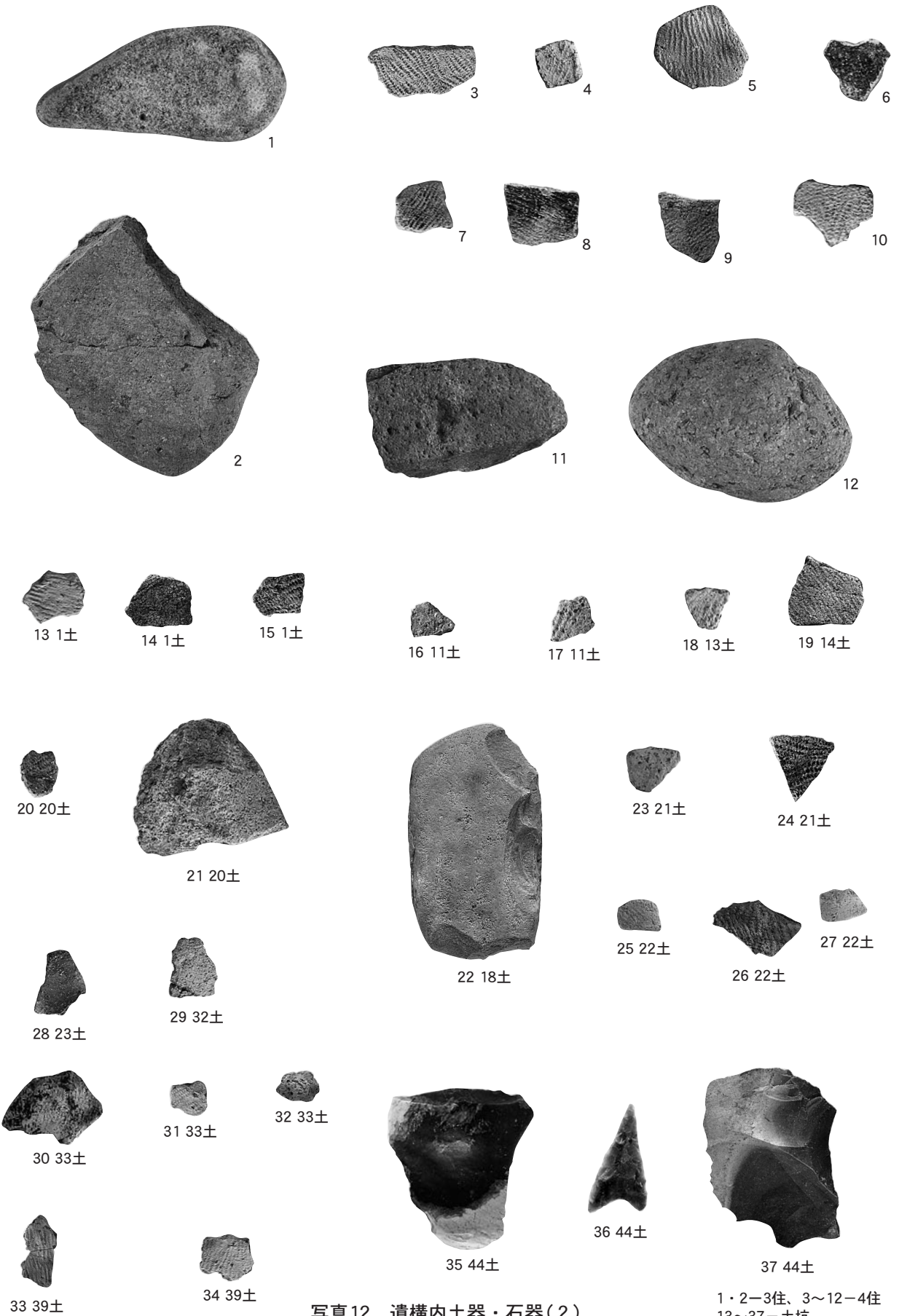


写真12 遺構内土器・石器(2)

1・2-3住、3~12-4住
13~37-土坑

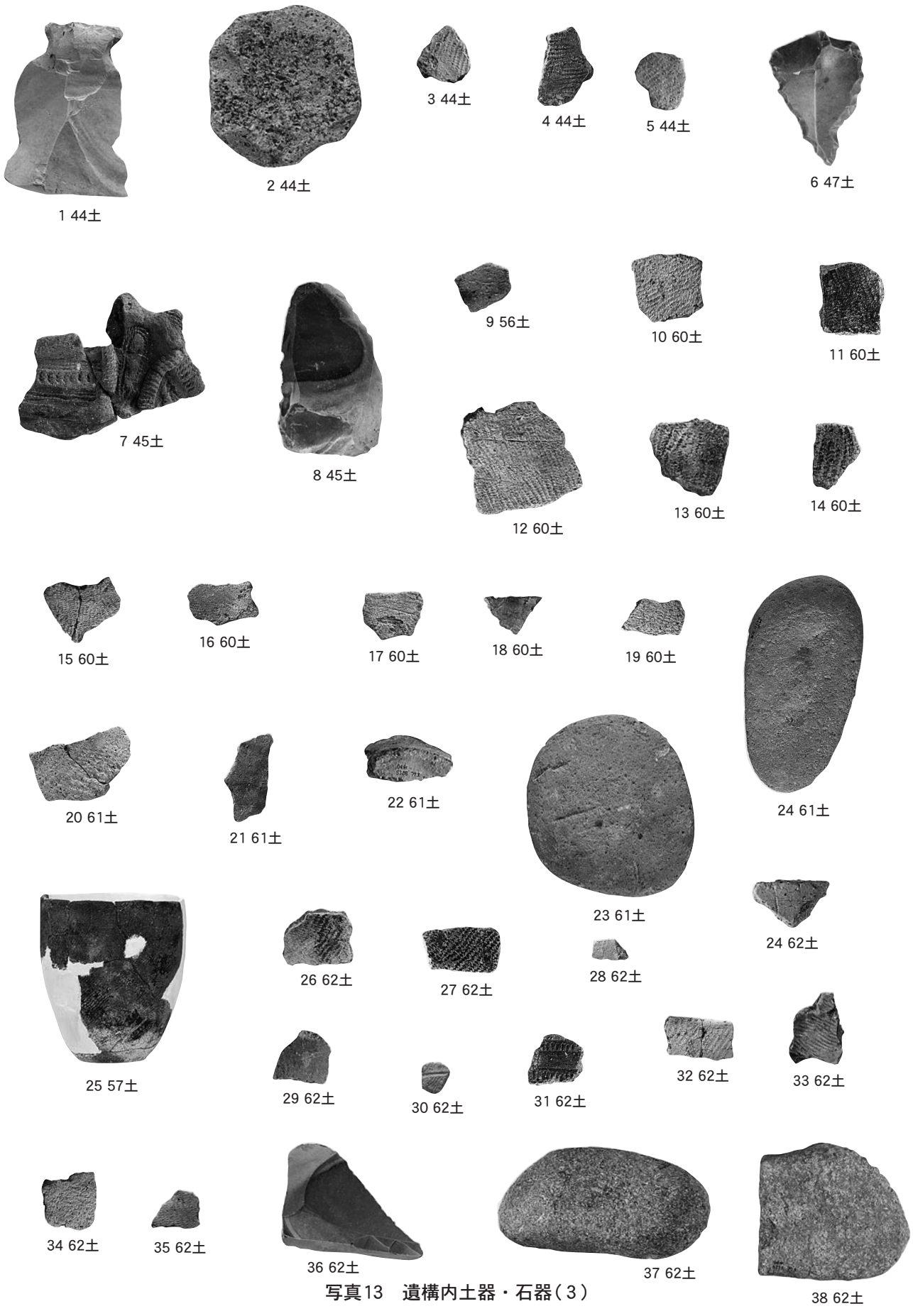


写真13 遺構内土器・石器(3)

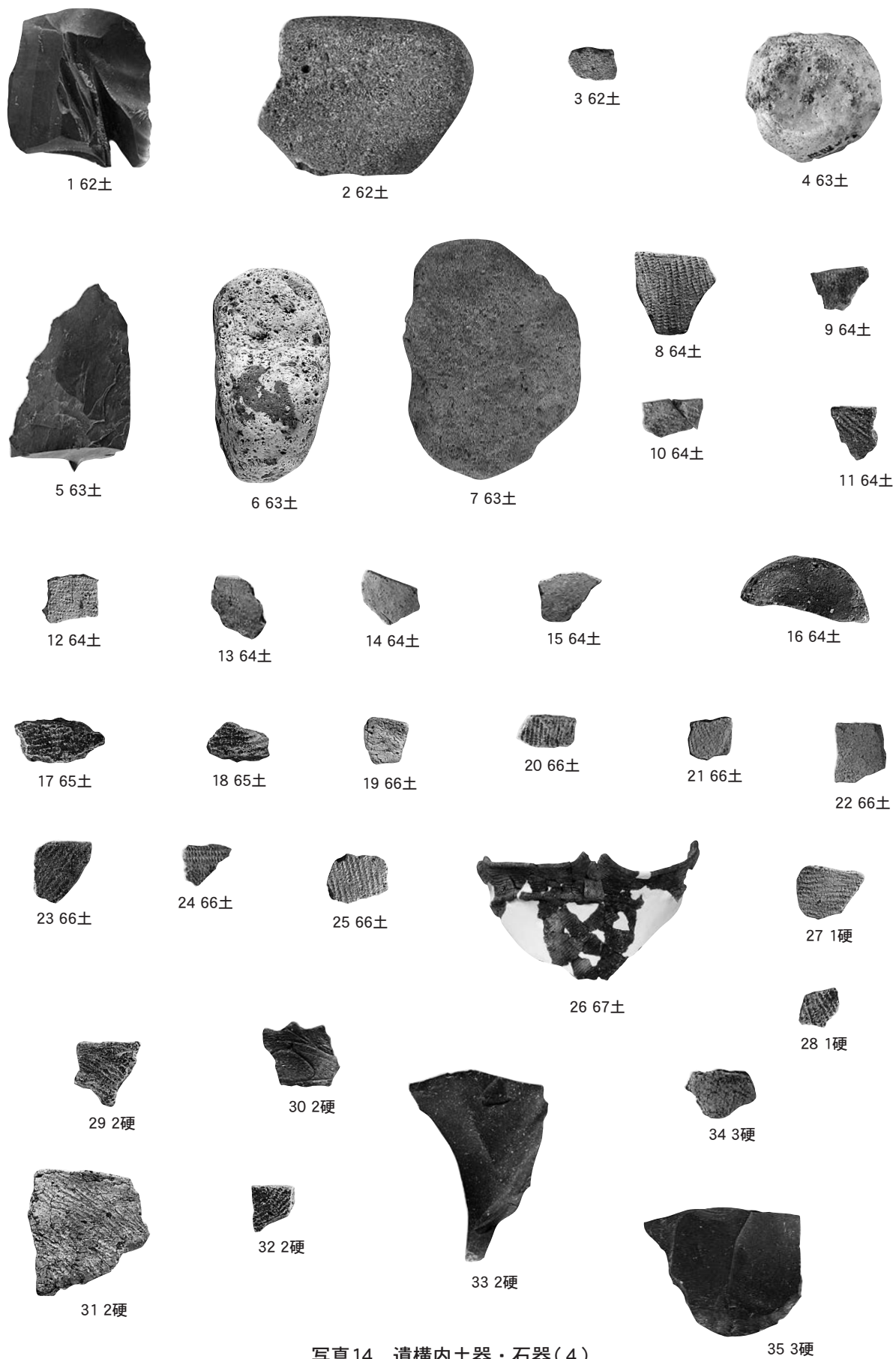


写真14 遺構内土器・石器(4)

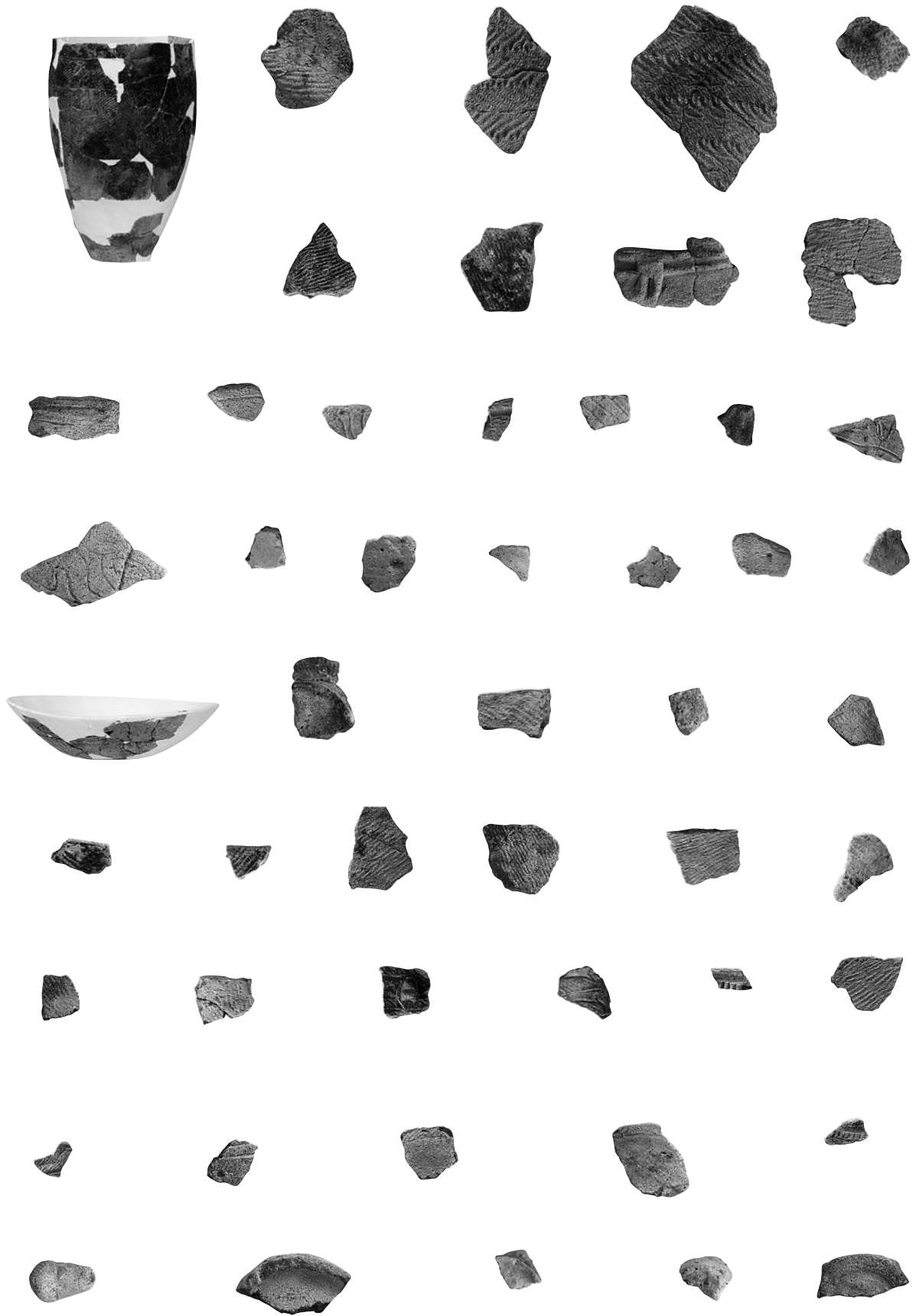


写真15 遺構外土器

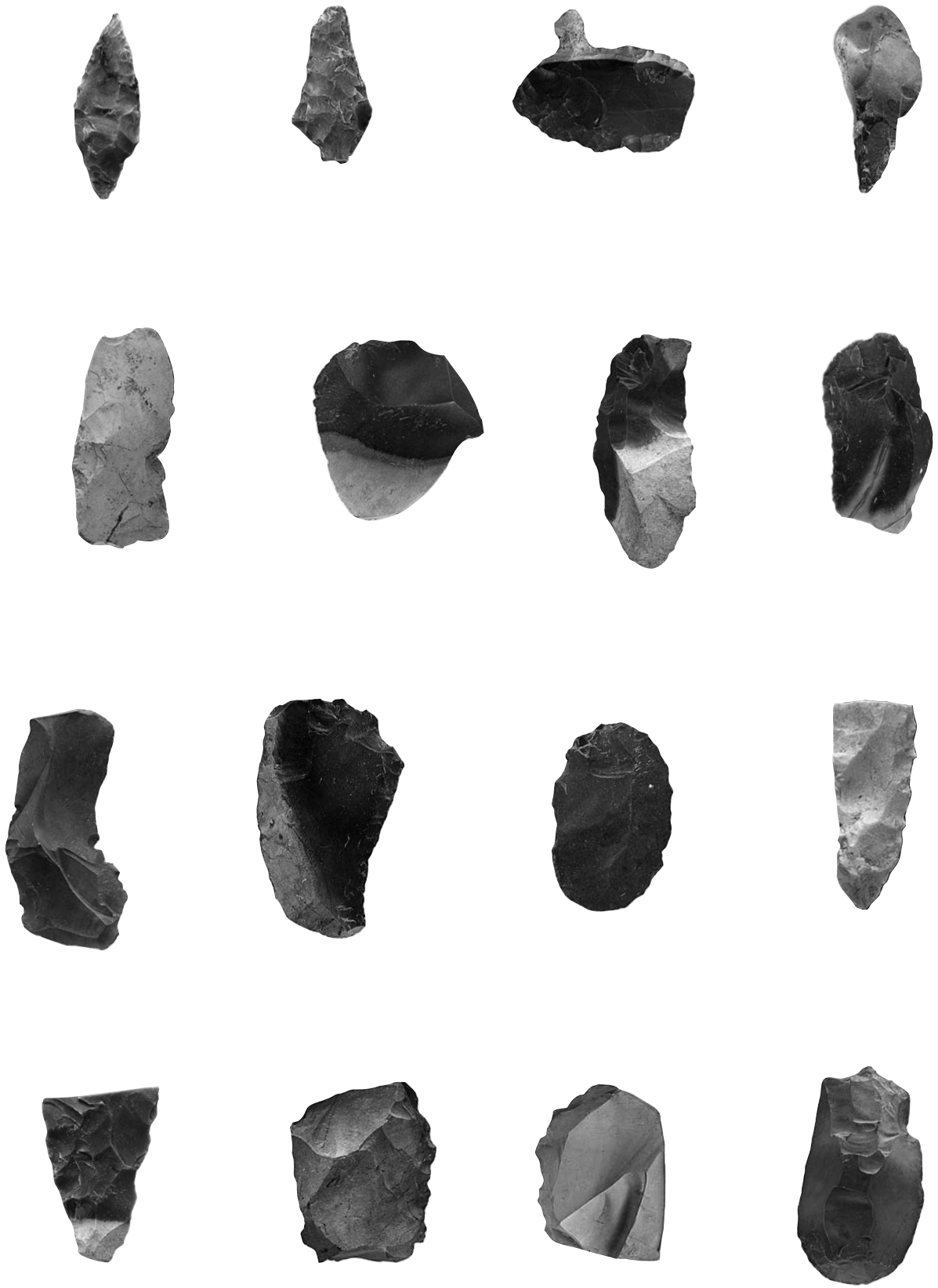


写真16 遺構外石器(1)



写真17 遺構外石器(2)

報告書抄録

ふりがな	かわらたい(1)・(4)いせき、おおかわぞえ(2)いせき、								
書名	川原平(1)・(4)遺跡、大川添(2)遺跡								
副書名	津軽ダム建設事業に伴う遺跡発掘調査報告								
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書								
シリーズ番号	第409集								
編著者名	中嶋友文・岡本 洋・工藤 大								
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター								
所在地	〒038-0042 青森県青森市新城字天田内152-15 TEL.017-788-5701 FAX.017-788-5702								
発行機関	青森県教育委員会								
発行年月日	2006年3月10日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		旧日本測地系 (Tokyo Datum)		調査期間	調査面積 ㎡	調査原因	
		市町村	遺跡番号	北緯	東経				
かわらたい 川原平(1)	あおもりけんなか つがるく 青森県中津軽郡 西目屋村大字川 原平字福岡 116-47外	02343	25009	北緯	東経	20030701	2,300	津軽ダム建設事業に伴う 事前調査	
				40°31'25"	140°13'43"				
				40°31'31"	140°13'53"				
かわらたい 川原平(4)	かわらたいらあざふくおか 川原平字福岡 64-69外	02343	25022	世界測地系 (JGD2000)		～	4,800		
おおかわぞえ 大川添(2)	かわらたいらあざおかわ 川原平字大川 添201～203外			25019	北緯				東経
					40°31'35"				140°13'31"
		40°31'41"	140°13'41"						
40°31'33"	140°13'10"								
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項			
川原平(1)		縄文時代	土坑	12基	縄文土器	・後期後半の大型 中空土偶が出土			
川原平(4)			焼土状遺構	3基	石器 土製品				
		配石(集石)遺構	2基	石製品					
		遺物包含層	1ヶ所						
要約	調査の結果、大部分が造成による盛り土や削平が行われている中で、川原平(1)遺跡と川原平(4)遺跡の一部は残存しており、特に川原平(1)遺跡は後期後半から晩期初頭にかけての遺物包含層や配石(集石)遺構が確認された。遺物は県内では出土例の少ない後期後半から晩期前半の土器をはじめ、中空の土偶や土製品や石製品などが多量に出土している。大川添(2)遺跡は、大部分が削平されたり、盛り土されているが、川沿いの緩斜面は残存している可能性が高い。								

報告書抄録

ふりがな	みずかみいせき							
書名	水上遺跡							
副書名	津軽ダム建設事業に伴う遺跡発掘調査報告							
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第409集							
編著者名	成田滋彦・平山明寿							
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒038-0042 青森県青森市新城字天田内152-15 TEL.017-788-5701 FAX.017-788-5702							
発行機関	青森県教育委員会							
発行年月日	2006年3月10日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		旧日本測地系 (Tokyo Datum)		調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
みずかみ 水上	あおもりけんなかつがらぐん 青森県中津軽郡 にしめやむらおのあさな 西目屋村大字砂 こせあさみずかみ 子瀬字水上	02343	25017	北緯	東経	20040506 ~ 20040722	1,400	津軽ダム建設 事業に伴う 事前調査
				世界測地系 (JGD2000)				
				北緯	東経			
				40° 31' 46"	140° 15' 00"			
				40° 31' 56"	140° 14' 48"			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
水上		縄文時代	住居跡	4基	縄文土器			
			土坑	58基	石器			
			硬化面	3基	土製品			

青森県埋蔵文化財調査報告書 第409集

川原平(1)・(4)遺跡
大川添(2)遺跡
水上遺跡

—津軽ダム建設事業伴う遺跡発掘調査報告—

発行年月日 平成18年3月10日

発行 青森県教育委員会

編集 青森県埋蔵文化財調査センター

〒038-0042 青森市新城字天田内152-15

TEL 017-788-5701 FAX 017-788-5702

印刷 高金印刷株式会社

〒038-0015 青森市千刈2丁目1-30

TEL 017-781-2244 FAX 017-781-2509
